

国道 438 号道路改築事業(飯山工区)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊

東坂元北岡遺跡
飯山北土居遺跡

2016.2

香川県教育委員会

序 文

本書には、国道438号道路改築事業(飯山工区)に伴い発掘調査を実施した、香川県丸亀市飯山町(はんざんちょう)東坂元(ひがしさかもと)の東坂元北岡遺跡と、同川原(かわはら)の飯山北土居遺跡の報告を収録しています。

東坂元遺跡では弥生時代中期中葉のサヌカイト製石器が多量に出土しました。大部分が製作途中の剥片で、石器生産に伴う資料といえます。これらの資料の剥離方法などを検討した結果、規格性の高い技術によるサヌカイト製石器の生産が明らかになりました。

飯山北土居遺跡は、従来から平地の中世城館として知られていた遺跡で、今回の調査では城館を方形に囲む溝が検出されました。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・方向にいたるまでの間、関係機関ならびに地元関係者各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げるとともに、今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成28年2月
香川県埋蔵文化財センター
所長 真鍋昌宏

例　　言

1 本報告書には、国道438号道路改築事業(飯山工区)に伴い発掘調査を実施した、香川県丸亀市飯山町東坂元に所在する東坂元北岡遺跡(ひがしさかもときたおかいせき)1・2次調査、および同市飯山町川原に所在する飯山北土居遺跡(はんざんきたどいいせき)を収録している。

2 発掘調査は香川県埋蔵文化財センター、香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課が実施した。

3 発掘調査期間と担当者は次のとおりである。

東坂元北岡遺跡

1次調査

期間 平成18年11月1日～平成19年3月31日

担当 香川県埋蔵文化財センター 文化財専門員 藏本晋司・長井博志

2次調査

期間 平成20年11月11日～12日

担当 香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課 文化財専門員 乗松真也

飯山北土居遺跡

期間 平成21年12月1日～31日

担当 香川県埋蔵文化財センター 主任文化財専門員 木下晴一 文化財専門員 森下友子

4 調査、報告書作成にあたっては次の方々、関係機関の協力を得た。記して謝意を表したい。

朝井琢也、上峯篤史、鈴木綾香、田崎博之

香川県中讃土木事務所、地元自治会、地元水利組合（順不同、敬称略）

5 報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆は「第1部 東坂元北岡遺跡」を乗松真也が、「第2部 飯山北土居遺跡」を木下晴一が担当し、編集は乗松が行った。

6 本報告書で用いる座標系は国土座標第IV系(世界測地系)で、方位の北は国土座標第IV系による。また、標高は東京湾平均海水面を基準とした。

7 遺構は次の略号により表示した。

SP 柱穴・小穴 SK 土坑 SD 溝 SR 自然河川 SX その他の遺構

8 遺構断面図の水平線上の数値は水平線の標高線(単位m)である。

9 遺構断面図中の注記の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖32版』を参照した。

- 10 土器観察表の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 32 版』を参照した。また、残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。
- 11 石器実測図中の外郭線周囲の線は潰れの範囲を示している。図の左側に展開した面を A 面、右側の面を B 面として記述する。剝片石器の場合は A 面が背面、B 面が腹面となる。石材は表記がない限りサヌカイトである。
- 12 遺物の時期は主に次の文献を参照した。
- 信里芳紀 2005 「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年—凹線文期を中心にして—」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』 I
- 信里芳紀 2002 「小谷窯跡出土須恵器の編年」香川県埋蔵文化財調査センター編『高松ファクトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小谷窯跡・塙谷古墳』
- 佐藤竜馬 1993 「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設 40 周年記念考古学論叢』
- 佐藤竜馬 2000 「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」香川県埋蔵文化財調査センター編『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 4 冊 空港跡地遺跡 IV』

* 地図は国土地理院地形図を使用しました。

本文目次

第1部 東坂元北岡遺跡

第1章 調査にいたる経緯と経過	3
第1節 調査にいたる経緯	3
第2節 調査の経過	5
第3節 調査体制・整理体制	5
第2章 立地と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 発掘調査の記録	10
第1節 調査の方法	10
第2節 層位	10
第3節 旧石器時代の遺物	18
第4節 弥生時代の遺構と遺物	18
第5節 中世の遺構と遺物	45
第4章 自然科学分析	50
第5章 総括	54
第1節 金山型剝片剥離技術の復元	54
第2節 東坂元北岡遺跡における石器生産	58
第3節 原産地金山と周辺地域におけるサヌカイト製石器の状況	59
第4節 中繼地としての東坂元北岡遺跡	65

第2部 飯山北土居遺跡

第1章 調査にいたる経緯と経過	83
第1節 調査にいたる経緯	83
第2節 調査の経過	84
第2章 遺跡の立地と環境	85
第1節 飯山北土居遺跡の認識	85
第2節 遺跡周辺の地形	85
第3章 発掘調査の成果	90
第4章 総括	95

挿図目次

東坂元北岡遺跡	
第1図 道路位置図1	3
第2図 道路位置図2	4
第3図 丸龟平野東部における弥生時代 中期中葉～後葉の道路	9
第4図 調査区割図	10
第5図 調査区壁断面1	11
第6図 調査区壁断面2	12
第7図 調査区壁断面3	13
第8図 調査区壁断面4	14
第9図 調査区壁断面5	15
第10図 調査区壁断面6	16
第11図 時期別造構配置図	17
第12図 SR01出土遺物	18
第13図 SD02・11・12 断面図・出土遺物	19
第14図 SD13・23・25 平・断面図・出土遺物	20
第15図 SR01出土遺物1	22
第16図 SR01出土遺物2	23
第17図 SR01出土遺物3	24
第18図 SR01出土遺物4	25
第19図 SR01出土遺物5	26
第20図 SR01出土遺物6	27
第21図 SR01出土遺物7	28
第22図 SR01出土遺物8	29
第23図 SR01出土遺物9	30
第24図 SR01出土遺物10	31
第25図 SR01出土遺物11	32
第26図 SR01出土遺物12	33
第27図 SR01出土遺物13	34
第28図 SR01出土遺物14	35
第29図 SR1II出土遺物	39
第30図 SR12出土遺物1	40
第31図 SR12出土遺物2	41
第32図 SX01 平・断面図・出土遺物	42
第33図 SX21 平・断面図・出土遺物	
道構外出土遺物1	43
第34図 道構外出土遺物2	44
第35図 SA21・SP110 平・断面図・出土遺物	46
第36図 SK11・12・13・14・15・17・18・19 平・断面図・出土遺物	47
第37図 SD21・22・24・26・27 断面図・出土遺物	48
第38図 道構外出土遺物	49
第39図 東坂元北岡遺跡の1区西壁における 花粉ダイアグラム	51
第40図 東坂元北岡遺跡の花粉・胞子	53
第41図 金山型剝片剥離技術模式図	56
第42図 長者原遺跡出土の角の棱線を取り込んだ剥片	57
第43図 打製石剝と打製作成の厚さ	58
第44図 闇連道路位置図	60
第45図 石器サイズ別数量比(11mm ~)	62
第46図 石器分類別数量比(11 ~ 50mm)	63
第47図 石器分類別重量比(11 ~ 50mm) 1	64
第48図 石器分類別重量比(11 ~ 50mm) 2	65
第49図 金山産サスカイト製器流通模式図	68
飯山北土居遺跡	
第50図 道路の位置	83
第51図 道路付近 空中写真 (国土地理院昭和37年撮影) 及び位置図(丸龟市都市計画図)	86
第52図 地形分類図	87
第53図 道路周辺の条里地番	88
第54図 調査区割図	89
第55図 調査区全体図	90
第56図 1区 平・断面図	91
第57図 2区 平・断面図	92
第58図 3区 平・断面図	93
第59図 4区 平・断面図	93
第60図 出土遺物	94
第61図 丸龟市教育委員会による調査成果	95

表目次

東坂元北岡遺跡	
第1表 東坂元北岡遺跡における花粉分析結果	52
第2表 道路類型	66
第3表 東坂元北岡遺跡 造構一覧表	70
第4表 土器觀察表1	71
第5表 土器觀察表2	72
第6表 土器觀察表3	73
第7表 土器觀察表4	74
第8表 土器觀察表5	75
第9表 土器觀察表6	76
第10表 瓦觀察表	77
第11表 石器觀察表1	77
第12表 石器觀察表2	78
第13表 石器觀察表3	79
飯山北土居遺跡	
第14表 土器觀察表	96
第15表 石器觀察表	96

写真目次

写真 1 東坂元北岡道路 調査前風景 北から	97	写真 22 東坂元北岡道路 3区 南半部 北から.....	104
写真 2 東坂元北岡道路 1区 SR01 断面 東から.....	97	写真 23 東坂元北岡道路 3区 SK18 断面 北から	104
写真 3 東坂元北岡道路 1区 SD02 断面 北から	97	写真 24 東坂元北岡道路 現地説明会風景	104
写真 4 東坂元北岡道路 1区 SR01 石庵丁出土状況	98	写真 25 東坂元北岡道路 出土遺物 1.....	105
写真 5 東坂元北岡道路 1区 SX01 遺物出土状況 東から	98	写真 26 東坂元北岡道路 出土遺物 2.....	106
写真 6 東坂元北岡道路 1区 南端 断面 南から	98	写真 27 東坂元北岡道路 出土遺物 3.....	107
写真 7 東坂元北岡道路 1区 SR01 石庵丁出土状況	99	写真 28 東坂元北岡道路 出土遺物 4.....	108
写真 8 東坂元北岡道路 2区 SD11 断面 南から	99	写真 29 東坂元北岡道路 出土遺物 5.....	109
写真 9 東坂元北岡道路 2区 SK12 断面 北西から	99	写真 30 東坂元北岡道路 出土遺物 6.....	110
写真 10 東坂元北岡道路 2区 SK11 断面 北西から	100	写真 31 東坂元北岡道路 出土遺物 7.....	111
写真 11 東坂元北岡道路 2区 SK15 断面 西から	100	写真 32 東坂元北岡道路 出土遺物 8.....	112
写真 12 東坂元北岡道路 2区 全景 北から	100	写真 33 東坂元北岡道路 出土遺物 9.....	113
写真 13 東坂元北岡道路 2区 西壁断面 東から	101	写真 34 飯山北土居道路 調査地遠景	
写真 14 東坂元北岡道路 2区 西壁南端断面 東から	101	飯野山から 1994年撮影.....	114
写真 15 東坂元北岡道路 2区 SP110杯出土状況	101	写真 35 飯山北土居道路 4区 調査状況 西から	114
写真 16 東坂元北岡道路 3区 SD21 断面 南から	102	写真 36 飯山北土居道路 1区 調査状況 東から	114
写真 17 東坂元北岡道路 3区 SD23 断面 南から	102	写真 37 飯山北土居道路 2区 調査状況 東から	115
写真 18 東坂元北岡道路 3区 SX21 検出状況 東から	102	写真 38 飯山北土居道路 2区 SDX3 振削状況北から	115
写真 19 東坂元北岡道路 3区 SX21 断面 北から	103	写真 39 飯山北土居道路 3区 調査状況 北から	115
写真 20 東坂元北岡道路 3区 SD25 断面 東から	103	写真 40 飯山北土居道路 4区 SD08 等振削状況 西南から	116
写真 21 東坂元北岡道路 3区 SD24 断面 北から	103	写真 41 飯山北土居道路 4区 SD08 断面 西南から	116
		写真 42 飯山北土居道路 4区 SP01 断面	116

第1部 東坂元北岡遺跡

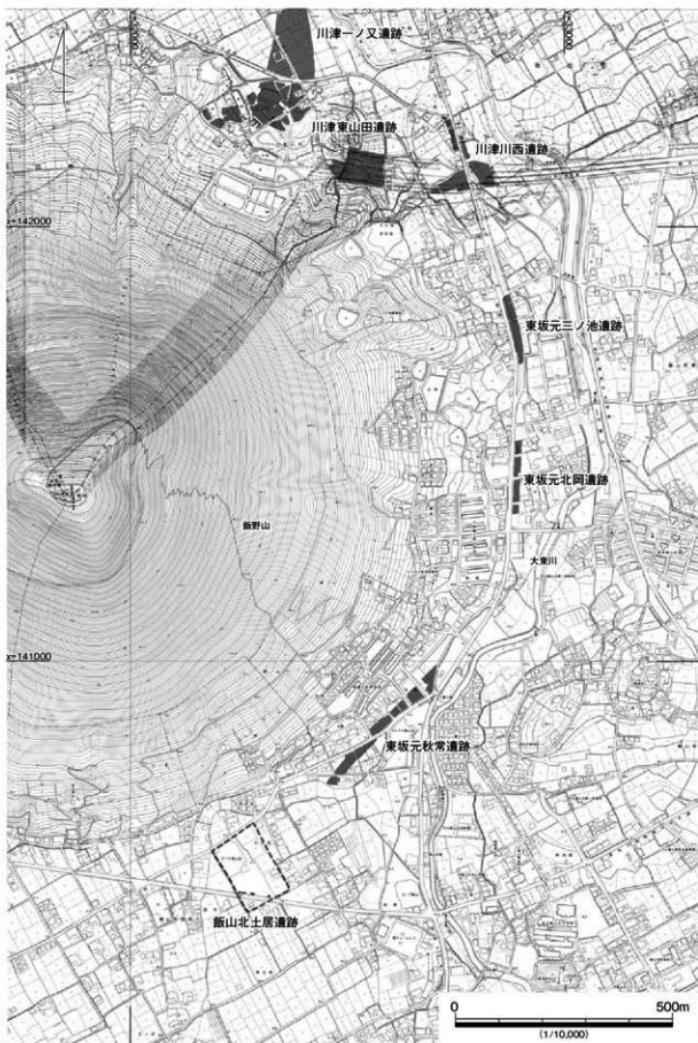
第1章 調査にいたる経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯

国道438号道路改築事業(飯山工区)に伴い、香川県教育委員会では平成16年度から17年度にかけて香川県丸亀市飯山町東坂元で試掘調査を実施した。その結果、試掘調査対象地のうち2,616m²で弥生時代を中心とした遺物・遺構を確認したため、東坂元北岡遺跡として文化財保護法にもとづく保護措置が必要と判断した。



第1図 遺跡位置図団1



第2図 遺跡位置図2

第2節 調査の経過

東坂元北岡遺跡では、1次調査を香川県埋蔵文化財センターが、2次調査を香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課が実施した。1次調査の期間は平成18年11月1日～平成19年3月31日、2次調査の期間は平成20年11月11・12日である。1次調査期間中の平成19年3月10日には現地説明会を開催し、約150名の参加者を得た。

整理作業は平成26年度に実施した。遺物の実測・浮遊書の一部については株式会社イビソクに委託した。

第3節 調査体制・整理体制

発掘調査および整理作業の体制は以下のとおりである。

平成18年度発掘調査体制一覧表

香川県教育委員会事務局 文化行政課		香川県埋蔵文化財センター	
総括 課長	三谷 雄治	総括 所長	渡部 明夫
課長補佐(総括)	中村 植伸	次長	柳原 正人
総務・振興グループ		総務課 課長	野口 孝一
副主幹	河内 一裕	主任	鶴田 和司
主任	脇 悠介	主任	田中 千晶
文化財グループ		調査課 課長	廣瀬 常雄
課長補佐	藤好 史郎	文化財専門員	戸本 晋司
主任	山下 平重	文化財専門員	長井 博志
文化財専門員	信里 芳紀	嘱託(土木)	高嶋 勝英
		嘱託(調査技術員)	木野戸 直

平成20年度発掘調査体制一覧表

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課	
総括 課長	春山 浩康
課長補佐(総括)	武井 寿紀
総務・生涯学習推進グループ	
副主幹	香西としみ
主任	林 照代
文化財グループ	
主幹(兼)課長補佐	藤好 史郎
主任文化財専門員	森 格也
文化財専門員	乗松 真也

平成26年度整理作業体制一覧表

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課		香川県埋蔵文化財センター	
総括 課長	増田 宏	総括 所長	真鍋 昌宏
副課長	川上 泰	次長	前田 和也
総務・生涯学習推進グループ		総務課 課長（兼務）	前田 和也
副主幹	松下 由美子	主任	俠野 英二
主事	和木 麻佳	主任	寺岡 仁美
文化財グループ		主任	中川 美江
課長補佐	片桐 孝浩	主任	高木 秀哉
主任文化財専門員	山下 平重	主任	岩崎 昌平
文化財専門員	松本 和彦	資料普及課 課長	森 格也
		文化財専門員	乗松 真也
		嘱託	大林 真沙代
		嘱託	岡本 光代
		嘱託	甲斐 美智子
		嘱託	葛西 萬
		嘱託	佐々木 博子
		嘱託	西本 智子
		嘱託	森田 爰子

第2章 立地と環境

第1節 地理的環境

東坂元北岡遺跡は香川県丸亀市飯山町東坂元に位置する。

香川県は四国北東部の一角にあり、四国本島の一部と瀬戸内海上の島嶼部で構成される。県南端部では東西に讃岐山脈が伸びて徳島県との県境となる。丸亀市は香川県の中西部に位置し、面積 118.2km²、人口約 110,000 人(2015 年 9 月現在)である。市域は大東川、土器川、金倉川の流域に広がる丸亀平野の北東部を占める。北は瀬戸内海に面し、本島、広島、手島などの塩飽諸島の一部を含む。東は青ノ山(225m)、城山(462m)、横山(254m)で宇多津町、坂出市、綾川町に隣接する。南は猫山(468m)、城山(375m)、西山(204m)でまんのう町との境になる。

丸亀平野の北東には円錐形の独立した飯野山(422m)が位置する。丸亀平野南部の鷹丸山の麓を水源とする大東川は、同じく猫山や大高見峰に源流をたどれる中大東川や東大東川などの流水を集めて飯野山の東側を流下し、左岸に落差のある段丘崖を形成する。この段丘上、飯野山東麓の緩斜面に東坂元北岡遺跡は立地する。現在の大東川は角山(184m)、聖通寺山(117m)の西麓を流れて瀬戸内海にいたるが、現状の地割の乱れや土地のわずかな高低差からは、角山の東側を回り込む流路を有していたと考えられている(仮に大東川旧流路とする)。大東川旧流路の東側には山塊群があり、それぞれの峰を中心に郷師山(296m)、常山(283m)、金山(281m)、笠山(109m)と呼ばれる。聖通寺山、角山、金山より北側は、大東川旧流路による堆積物の供給活動や 19 世紀の塩田開発に伴う埋め立て等により現在でこそ陸地化しているが、中世以前には角山山麓と笠山山麓をやや湾入して結ぶラインが海岸線となっていた。

第2節 歴史的環境

丸亀市飯山町東坂元は、2005 年(平成 17)に合併して丸亀市となる以前には、綾歌郡飯山町の一部であった。飯山町は 1956 年(昭和 31)に坂本村と法輪寺村の合併によって成立した自治体で、東坂元北岡遺跡のある坂本村は近世(17 世紀中葉以降)には東坂本村と西坂本村に分かれていた。古代の鶴足郡坂本郷は、現在の丸亀市飯山町東坂元・西坂元を比定地とする。

東坂元北岡遺跡から北東約 3km にある金山は、石器の素材として用いられたサヌカイトの原産地である。香川県内には、五色台(高松市)、城山(坂出市)など複数のサヌカイト原産地があり、時期によつて石器に利用される産地が異なっていた。金山は縄文時代になってから開発され、弥生時代にいたっては香川県とその周辺地域で使用されるサヌカイト製石器のほとんどが金山産とみられている。金山北麓には金山型剥片剝離技術(森下 2001)によって剝離された横長剝片が多い量に散布しており、この場での横長剝片量産の可能性を示唆する。金山産サヌカイト製石器の使用は弥生時代中期中葉～後葉にピークを迎えるが、その背景には金山北麓資料や定型的な剝片剝離技術の存在があるのだろう。金山南麓の長者原遺跡では、小面積の調査で弥生時代中期後葉の堅穴住居 1 棟が確認され、調査面積の割には大量のサヌカイト製石器が出土している。原産地に立地する小規模な集落で、石器生産を担っていた蓋然

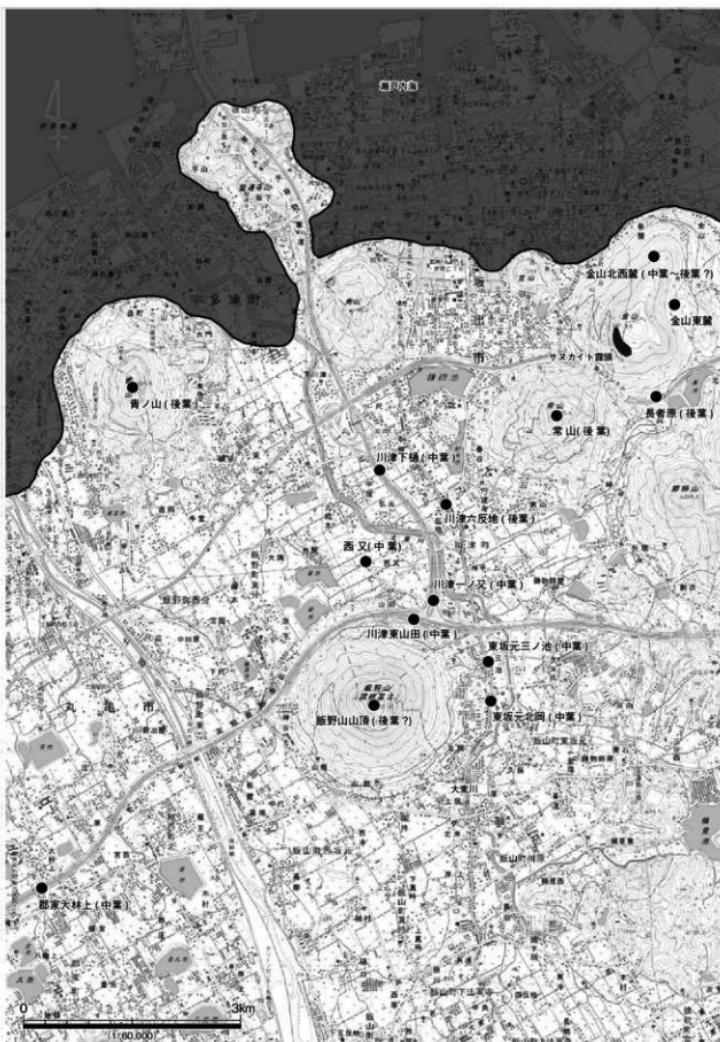
性が高い。

大東川流域に点在する弥生時代前期～中期前葉の遺跡のうち、西又遺跡や川津下橋遺跡は中期中葉にも継続する。両遺跡とも、中期中葉では少量の土器や石器の出土にとどまり、居住構造は確認されていない。

一方、川津一ノ又遺跡や川津東山田遺跡、東坂元三ノ池遺跡は中期中葉に出現する遺跡である。土坑などに加えて掘立柱建物が検出されている川津一ノ又遺跡は、確実に居住構造を伴う集落といえる。集落域を流下する溝や、縁辺の低地部からは多量の遺物が出土しており、居住構造は調査対象地外にも広がる可能性がある。出土遺物には相当数のサヌカイト製石器が含まれており、成品に加えて石器生産を示唆する剥片やチップがかなりの割合を占めている。これらの資料を再検討することで、現在のところ不鮮明な川津一ノ又遺跡における石器生産の実態に迫ることができるだろう。川津東山田遺跡と東坂元三ノ池遺跡では、少量の土器と石器のみの出土で構造の存在は不明である。両遺跡は飯野山北麓の緩斜面地に立地する。

中期後葉には山頂に立地する遺跡が現れる。青ノ山山頂に位置する青ノ山8号墳の埴丘盛土からは中期後葉の土器片数点が出土している。構造は不明ながら、近隣に中期後葉の集落の存在を推定してもいいだろう。飯野山山頂から出土している大型の壺は、類例が少なく時期の限定が困難だが、中期後葉としておきたい。常山遺跡も遺構は未確認だが、土器に加えて調査面積の割に多量の石器が出土している。これら3遺跡は山頂部に立地し、いわゆる「高地性集落」の立地上の特性と合致する。

山頂部に立地する遺跡は備讃瀬戸沿岸では中期中葉から後期前葉にかけての幅をもち、海浜部や斜面部に立地する遺跡の消長と連動する（乘松 2006）。ところが、丸亀平野北東部の瀬戸内海に面する地域では山頂部立地の遺跡は中期後葉に限られ、同じ時期の斜面部や海浜部の遺跡は知られていない。この点は同地域の中期中葉～後葉の遺跡動態の背景を考えるうえでの手がかりになりうる。



第3図 丸亀平野北東部における弥生時代中期中葉～後葉の遺跡

第3章 発掘調査の記録

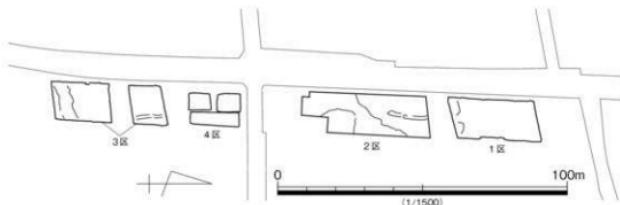
第1節 調査の方法

東坂元北岡遺跡では、工事の工程や作業ヤード確保のため、調査対象地を複数の地区に分割して発掘調査を実施した。1次調査のⅠ～Ⅲ区をそれぞれ1～3区、2次調査地を4区として報告する。

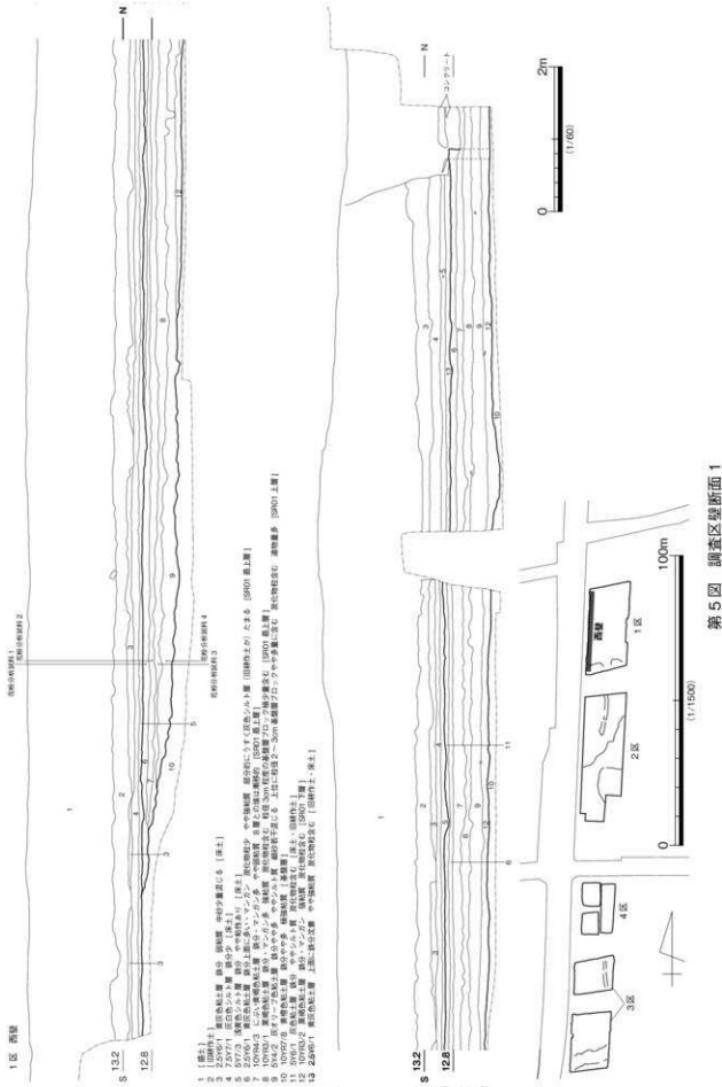
遺構検出面までは盛土と旧耕作土が30～120cm程度堆積していたため、その部分については重機を用いて掘削し、遺構検出面以下は人力で掘り下げて調査した。

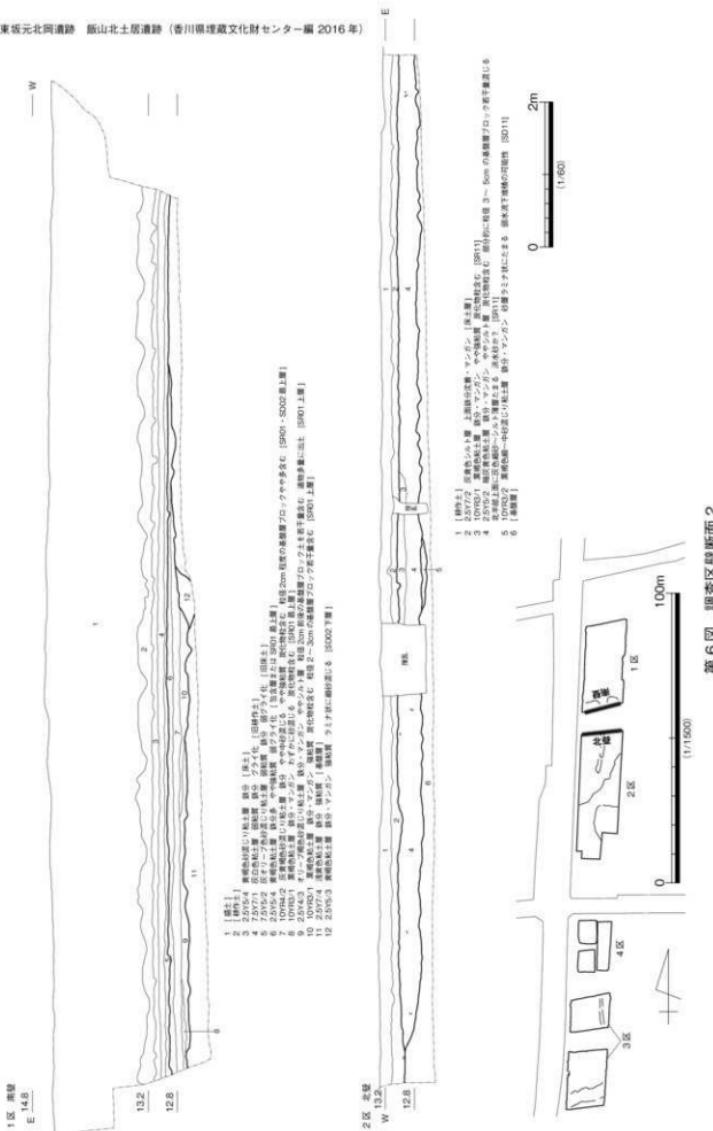
第2節 層位

1・2・4区と3区北部では、近年の盛土と旧耕作土直下に明黄褐色～にぶい黄色粘土層が堆積している。この層の上面が弥生時代～中世の遺構面となる。3区南部では旧耕作土と遺構面との間に10cm強の包含層が堆積している。調査地周辺は西方の飯野山から東方に向かって傾斜しているが、調査対象地が南北に長く東西に短い点や、削平を被っている点もあり、層位では東西方向の旧地形を確認できない。一方、調査対象地南北端での遺構検出面の標高差が40cmあり、北から南への傾斜を読み取ることができる。南端の3区にのみ包含層が存在するのもこの傾斜によるものだろう。

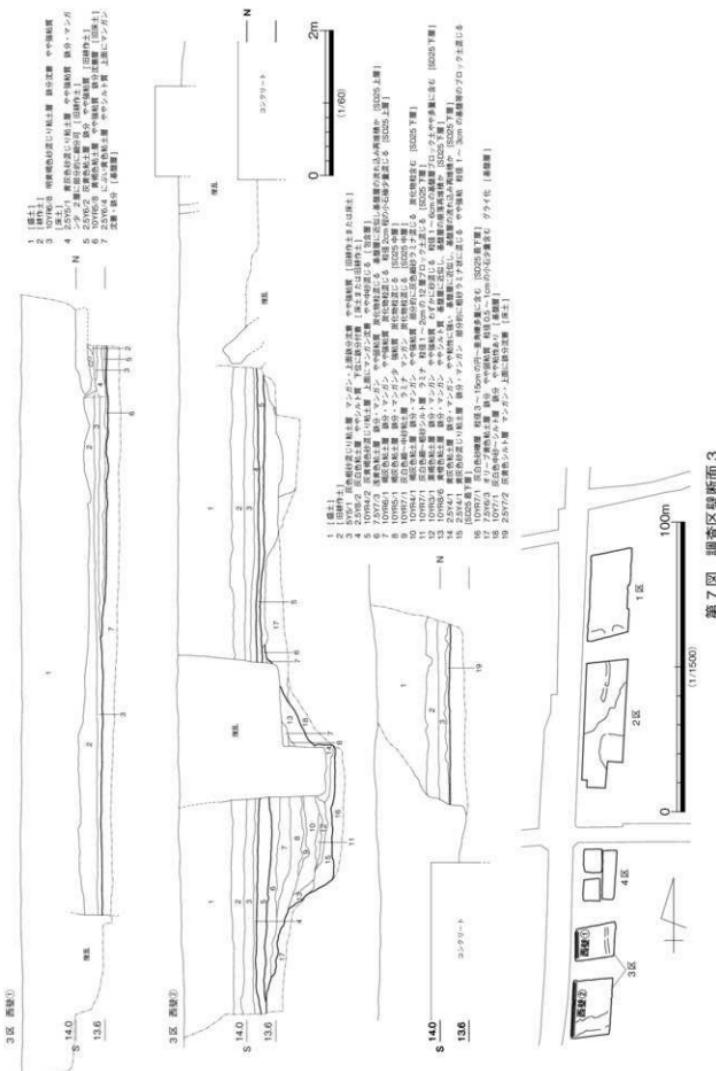


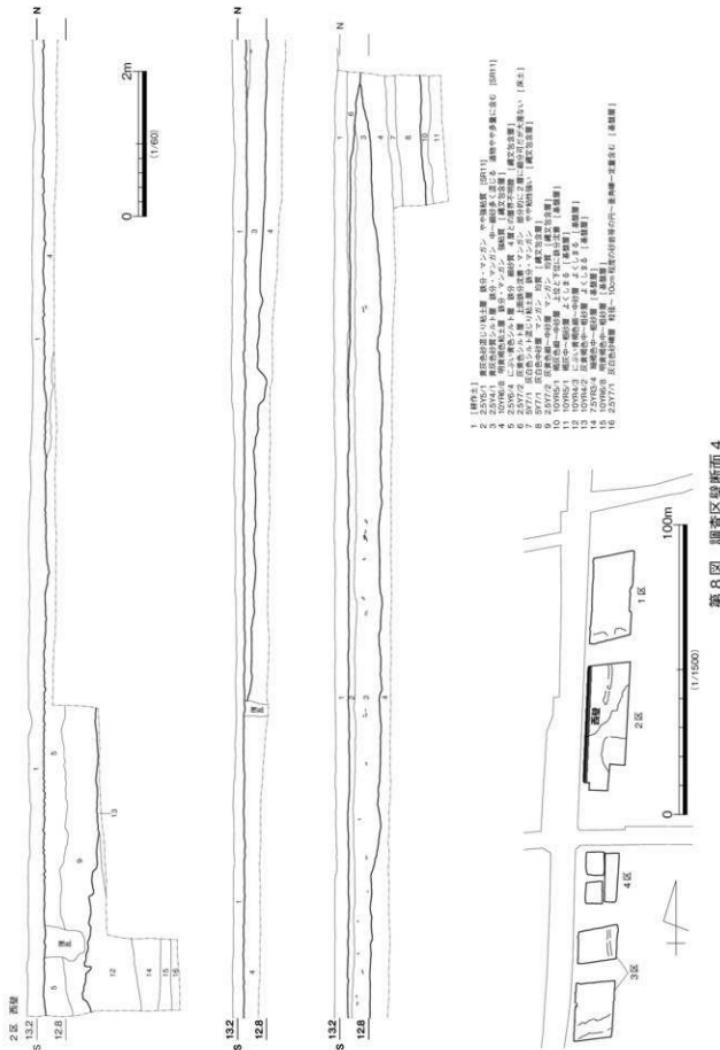
第4図 調査区割図



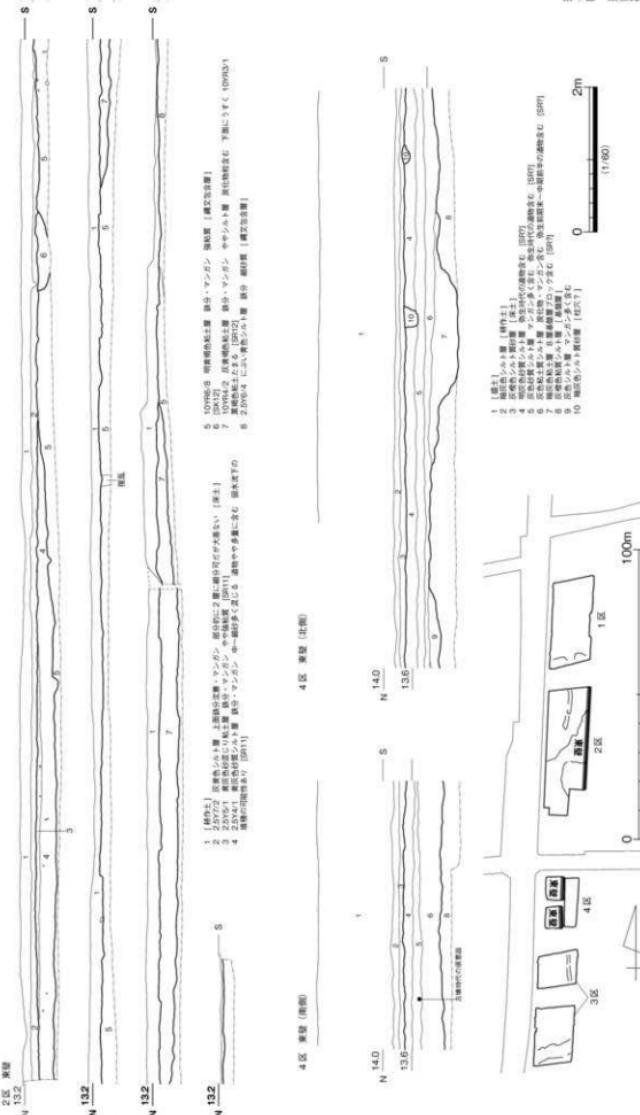


第6圖 調查区壁断面2

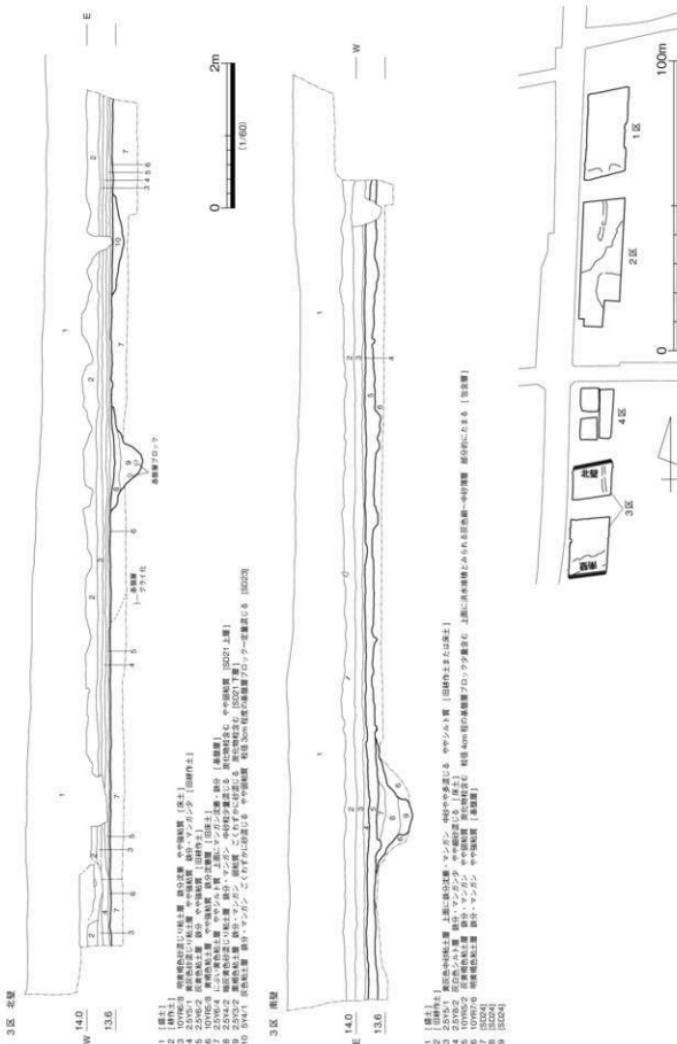




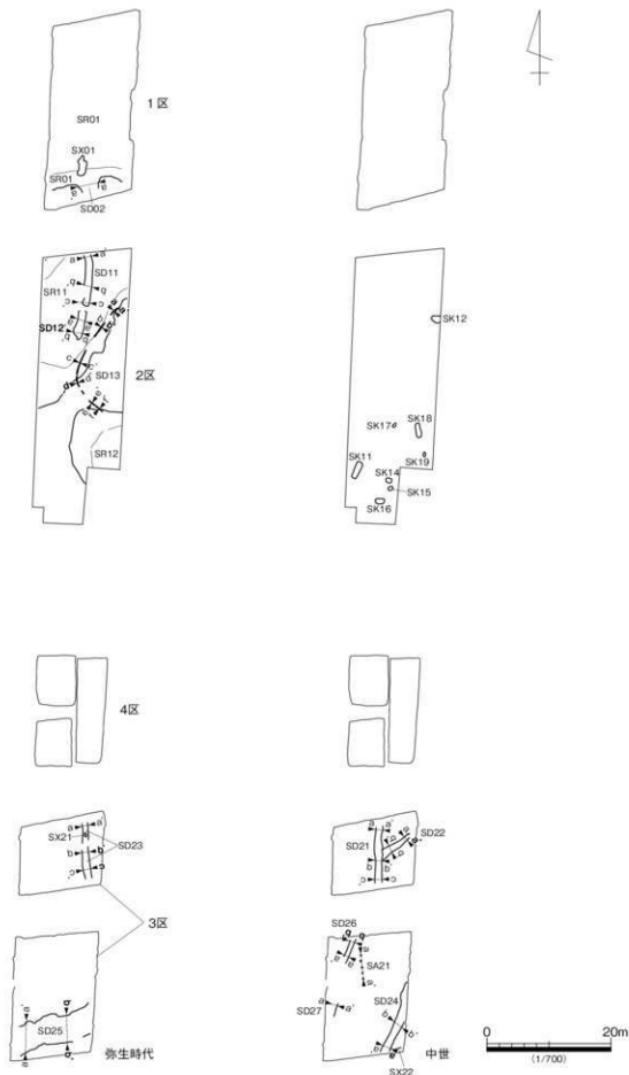
第8回 調査区壁断面4



第9回 調査区域断面5



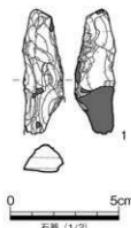
第10回 調査区壁断面6



第11図 時期別遺構配置略図

第3節 旧石器時代の遺物

1はサヌカイト製の角錐状石器である。7～8世紀を中心とするSR01最上層からの出土であるが、旧石器時代に属する遺物だろう。北方約200mの東坂元三ノ池遺跡でも古代の遺構に混じって角錐状石器が2点出土していることから、飯野山東麓には角錐状石器を主体とする石器群が存在すると思われる。



第12図 SR01 出土遺物

第4節 弥生時代の遺構と遺物

溝

SD02（調査時以降名：I区 SD02）

1区南端の流路SR01上層下面で検出した南北方向の溝である。2区の南北方向の溝SD11・12に連続する可能性もある。

遺物 2・3は弥生土器壺である。

時期 2・3から弥生時代中期中葉（中期II-1様式新段階）と考えられる。

SD11・12（調査時遺構名：II区 SD01・02）

2区北部のSR11下面で検出した南北方向の2本の溝で、1区のSD02も合わせて同一溝とも考えられる。

遺物 4～6・11～14は弥生土器壺、7・8・15～17は弥生土器壺、9・10は弥生土器台付鉢である。18はサヌカイト製石鎌で先端は欠損している可能性もある。19の上下端には加工が施され、上端には潰れがある。右側縁にわずかな抜りが認められる。A面左側縁はA面側から衝撃により折れているため、石庭丁の破損品とみられる。

時期 出土した土器から弥生時代中期中葉（中期II-1様式新段階～II-2様式）と判断できる。

SD13（調査時遺構名：II区 SD03）

2区東部のSR11・12下面で検出した幅狭の溝で、弧状にめぐる。

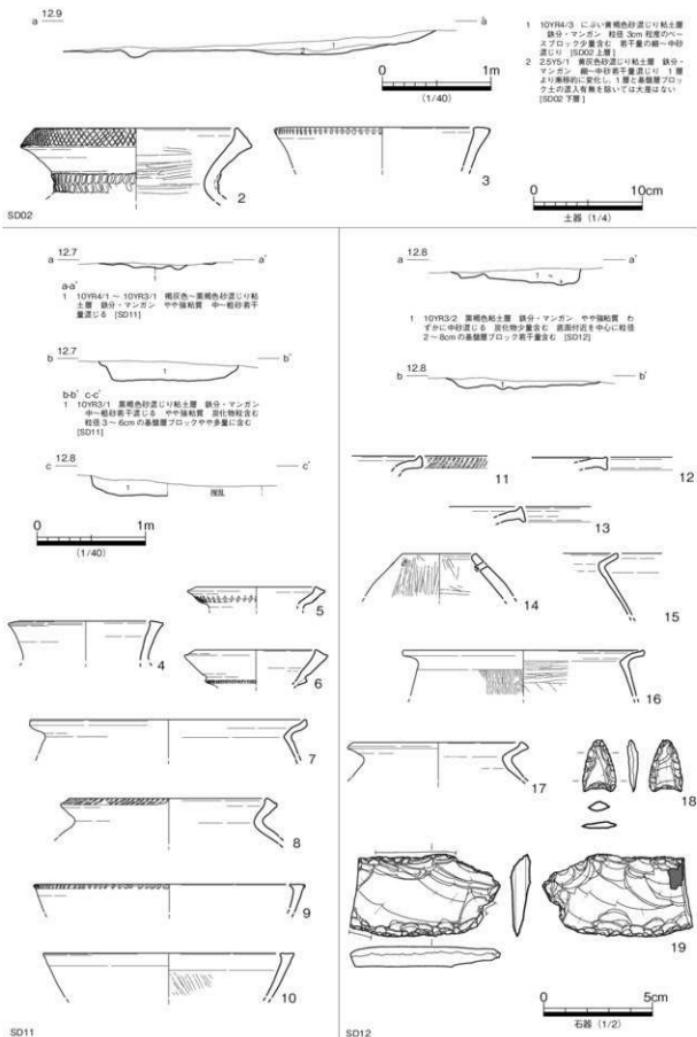
遺物 遺物は出土していない。

時期 弥生時代中期中葉以前であることは確実だが、時期は特定できない。

SD23（調査時遺構名：III区 SD03）

3区北東で検出した南北方向の溝で、検出面から底部まではかなり浅い。SX21はこの溝埋没後に彌り込まれた蓋然性が高い。

遺物 325はB面主要剥離面の打点が残っていないが、おそらく上端の面を打面とする蓋然性が高い。



第13図 SD02・11・12 断面図・出土遺物

A面右側縁の自然面に抉りを入れる。A面上端の左端にはわずかな範囲の潰れが認められ、A面左側縁は折れている。石庖丁の破損品だろう。

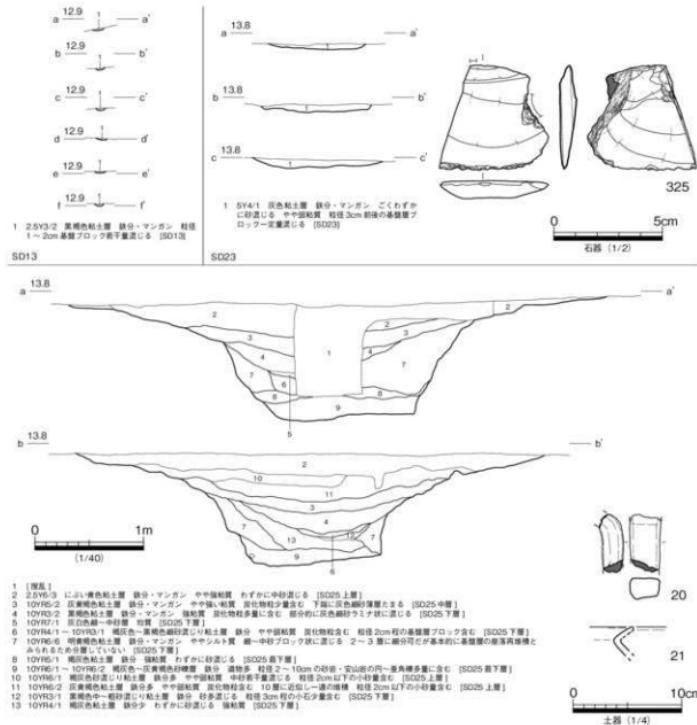
時期 SX21との重複関係および出土遺物から弥生時代中期中葉とみられる。

SD25（調査時遺構名：Ⅲ区 SD05）

3区南端で検出した溝で、断面形は左右両岸から緩やかに落ち込み、途中から台形状となる。西方から東方にかけての溝だろう。遺物はほとんど出土していない。

遺物 20の把手は弥生土器台付鉢の一部だろう。21は弥生土器壺である。

時期 小片ながらも21から弥生時代中期中葉（中期II・I新段階）の溝と判断できる。



第14図 SD13・23・25 平・断面図・出土遺物

流路

SR01（調査時遺構名：I区 SD01）

1区南端から北に向かって緩やかに下り、北側の上がりは確認していない。西から東にかけて流れる浅い窪地状の流路と思われる。弥生時代中期中葉にある程度堆積し（最下層～上層）、8世紀に埋没したのだろう（最上層）。弥生時代中期中葉の最下層～上層からは多量のサスカイト製石器が出土している。石器に完形の成品は少なく、破損品や未成品、剝片などが多い。特に5cm以下の小剝片やチップが出土量の大半を占める。標高の高い西方から流れ込んできた蓋然性が高く、石器に磨耗がほとんど認められないことから流入元は近接した場所と推測できる。

最上層出土遺物 土器は層位別に報告する。22～36・38～41は須恵器である。22～24は杯蓋、25は杯身である。26は高杯だろう。27は壺口縁部片、28は甕、29～35は蓋、36・38～40は杯、41は皿である。37は土師質土器杯か。42は灰釉陶器の椀とみられる。43は灰釉陶器片、44は土師器瓶である。45～112・114～129は弥生土器である。45・46は壺、47は台付鉢である。紡錘車48は甕の胴部片が円形に加工、穿孔されている。

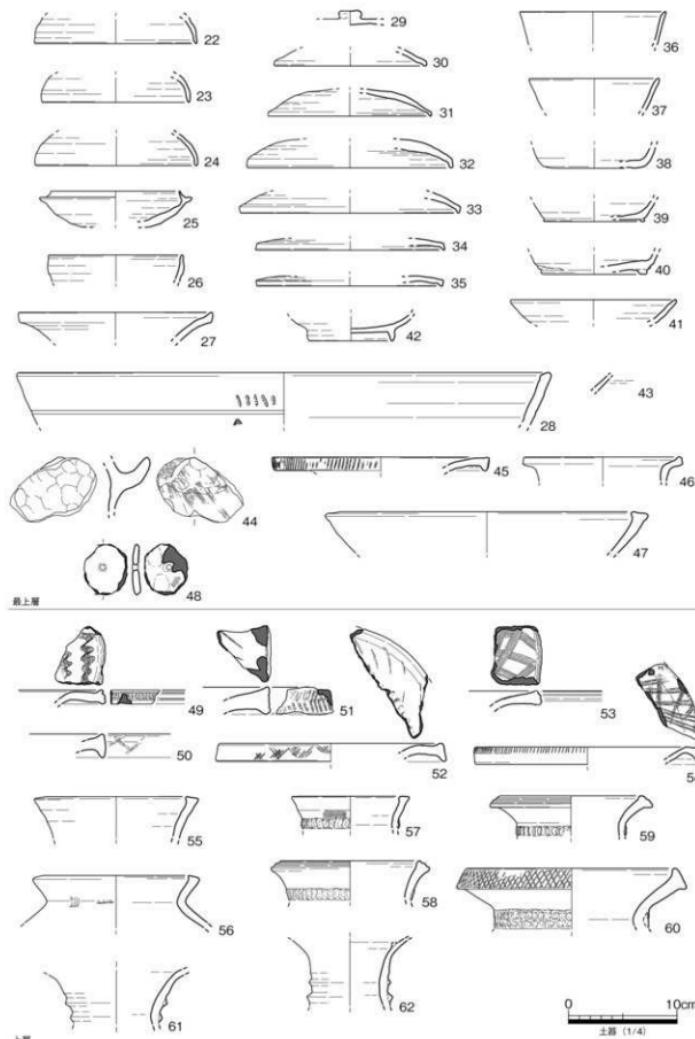
上層出土遺物 49～72は弥生土器壺、73～93は弥生土器甕、である。

下層出土遺物 114は無頭壺、115は壺、116～121は甕、122は台付鉢である。123は台付鉢の高台部分だろう。124の把手は台付鉢に伴う。

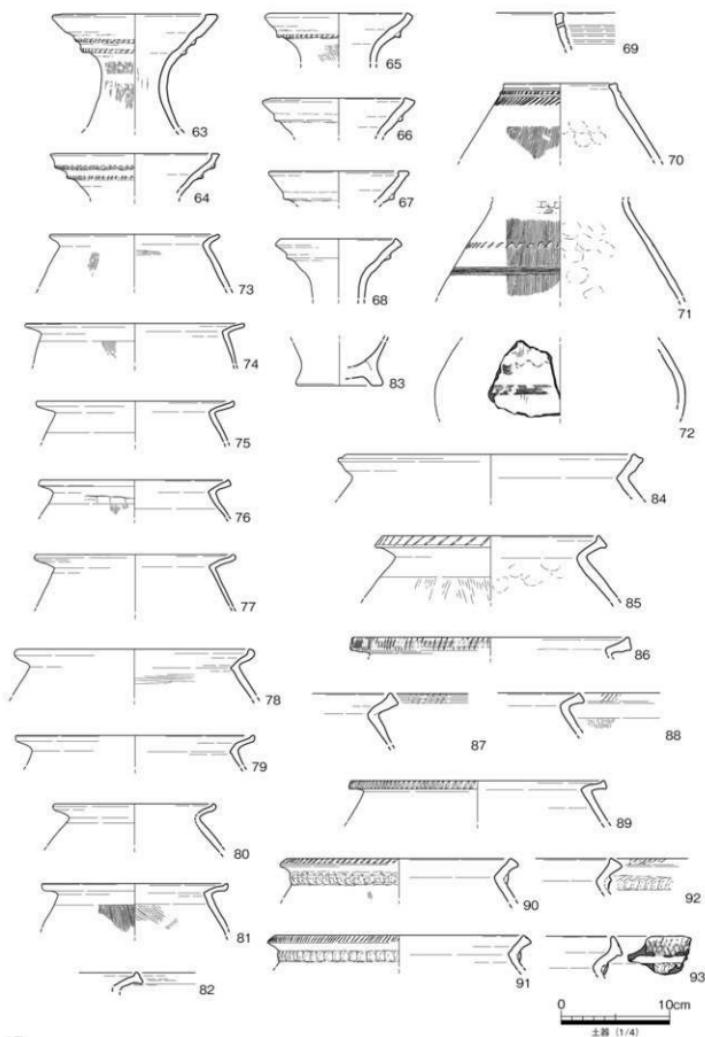
最下層出土遺物 125は壺である。

出土層位不明遺物 126は壺、127は甕である。128は台付鉢と思われる。129は台付鉢口縁部である。管状土錐130は両端部に面をもたない。

石器 石器は出土層位にかかわらず、まとめて報告する。131はA面上端から左右両側縁の抉りに潰れがあり、下端にはA・B両面からの調整が施される。完形の石庖丁で、肉眼観察では使用痕は確認できない。132はA面両側縁に抉りがあり、上端には潰れが確認できる。下端の調整はB面からのみである。石庖丁だろう。133は、133-1と133-2が接合する石庖丁である。上端と抉りを潰し、下端にA・B両面から調整を施している。その後、A面は中央あたりからの衝撃により割れたものとみられる。134はB面上端に打面があり、打面調整の痕跡が認められる。下端にはA・B両面から加工が施され、左右両側縁には抉りが作出される。石庖丁だろう。135はA面左側縁に自然面の残る剝片の周囲に調整を施している。A面上端と下端の一部、それと両側縁のわずかな抉りの部分に潰れが認められる。石庖丁とみていいだろう。136はA面左側縁が折れた剝片で、上端にA・B両面からの加工が認められ、下面の一部も同様である。A面右側縁には右方向からの剥離に伴う若干の窪みがある。この窪みを積極的に評価すれば、加工途中の石庖丁の破損品とみることができる。137は上端に潰れ、下端にはA・B両面からの調整が認められる。A面右側縁の折れている部分の角には潰れ痕が確認され、左側縁は折れていることから、石庖丁の破損品と理解できよう。138は、B面上端にある古い調整が施された面を打面として主要剥離面を形成する。上端には潰れがあり、A面右側縁には抉りが認められる。A面左側縁はB面からの衝撃により折れている。被損した石庖丁だろう。139はA面上端には潰れ、下端にはA・B両面から調整が施される。A面左側縁は折れているが、右側縁に抉りがあるため、石庖丁の破損品と考えられる。140はA面上端と右側縁の抉りに潰れが認められる。下端にはA・B両面から細かな調整が施される。A面左側縁は最後に折れているため、石庖丁の破損品とみたい。141

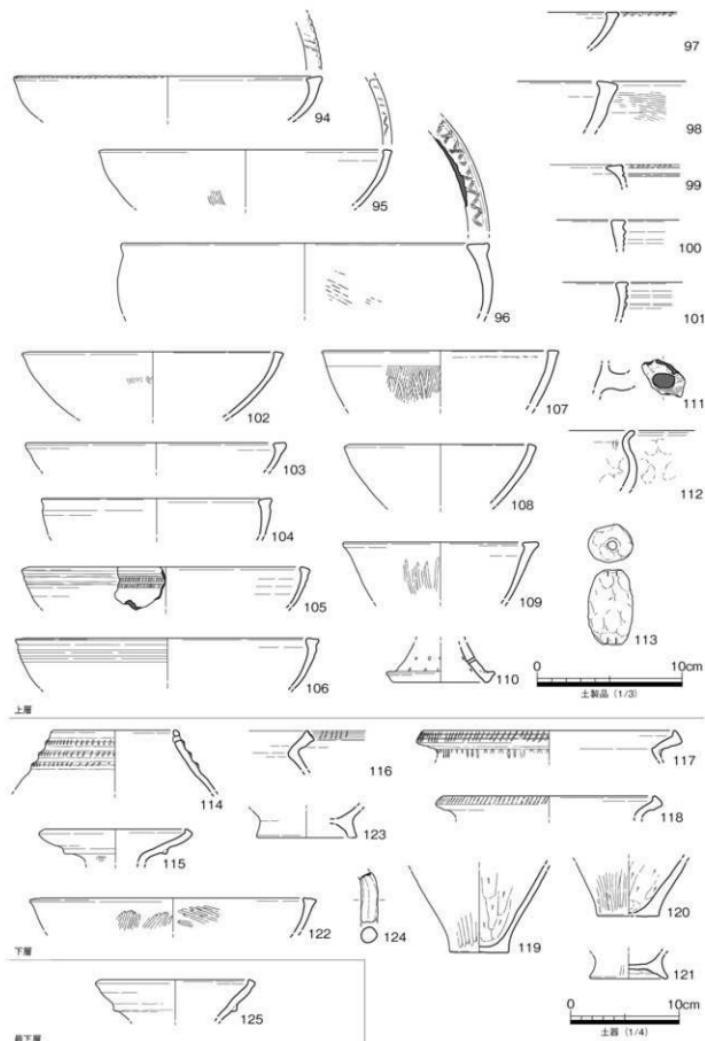


第15図 SR01出土遺物1

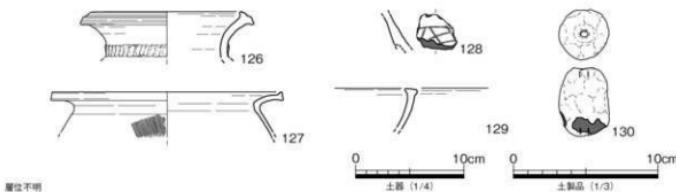


上層

第16図 SR01 出土遺物 2

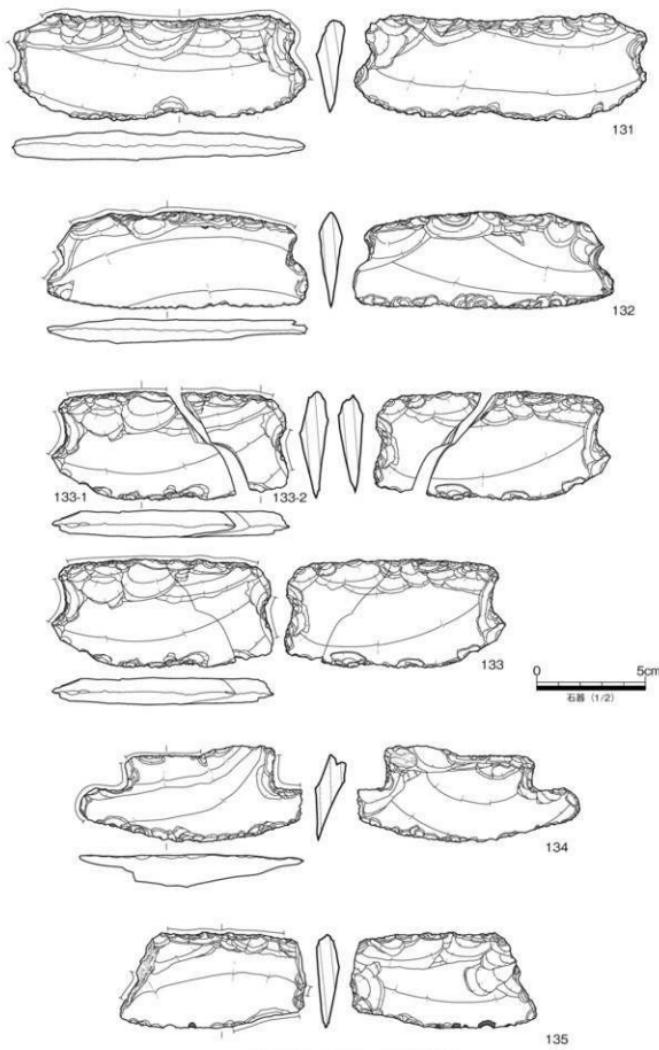


第17図 SR01 出土遺物3

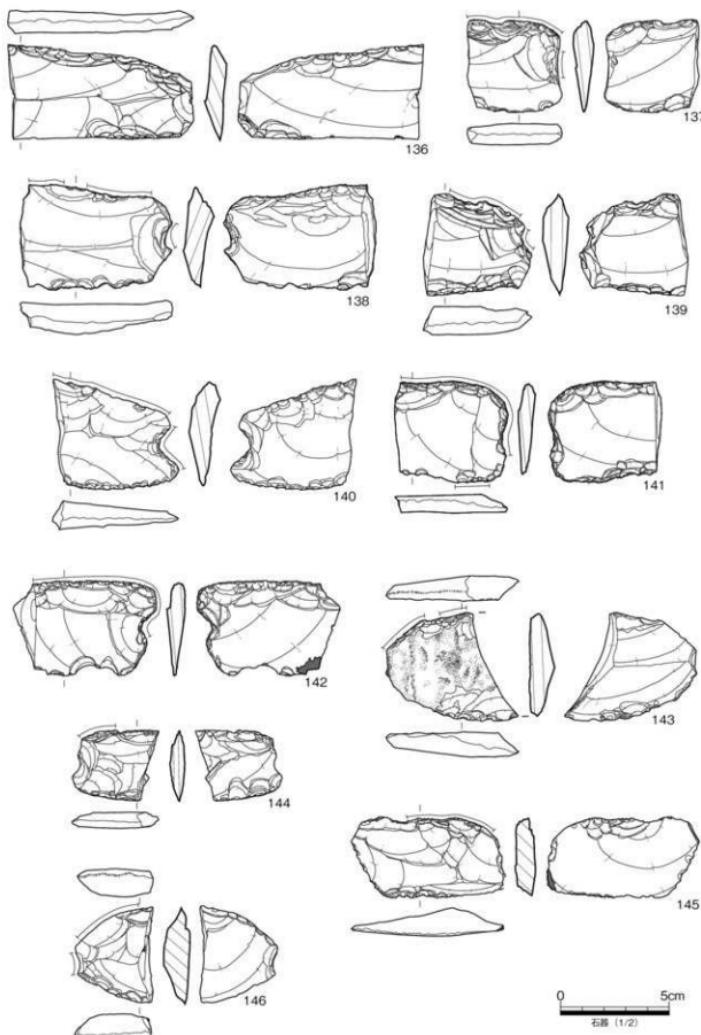


第18図 SR01 出土遺物4

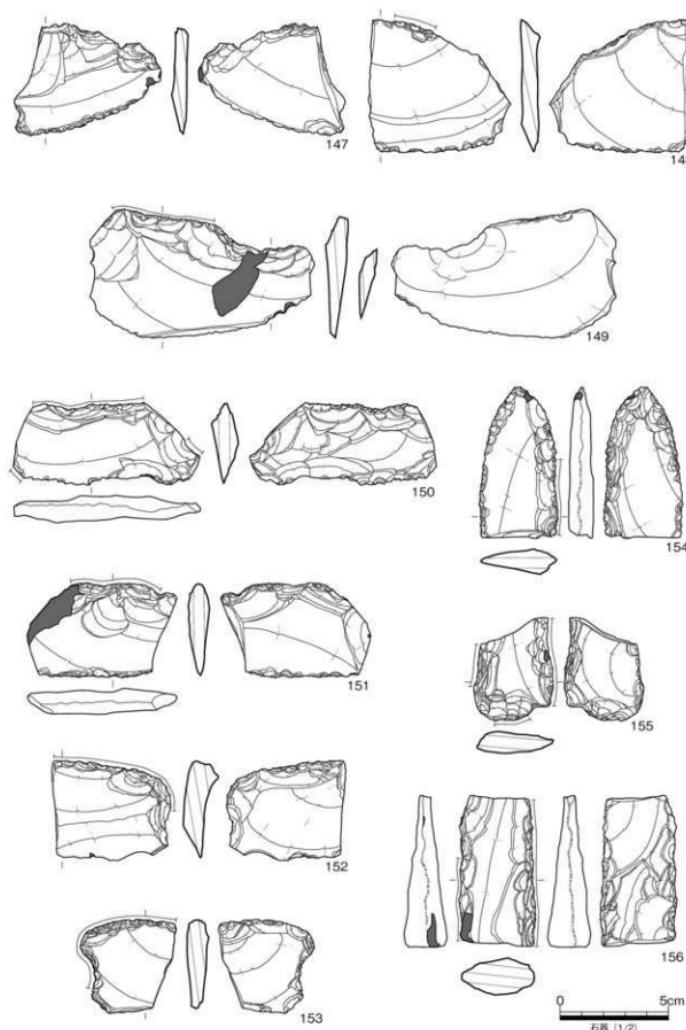
は剥片の周間に加工を施し、A面上端から抉りにかけてと下端の一部を潰している。その後、A面左側縁の中央よりやや上位からの衝撃で割れている。石庖丁の破損品である。142はA面右側縁に抉りがあり、抉りから上端にかけて潰れがある。A面左側縁は最後に折れており、石庖丁が破損したものとみられる。143はA面の多くに自然面を残し、上端部には潰れ、下端部の一部には調整がある。A面左側縁は剝離（折れ？）によりわずかに抉り状を呈し、右側縁は折れている。刃部とみられる下端部の調整が不十分な点から、整形途中で折損した石庖丁と考えられる。144は剥片の上下端にA・B両面から調整を加え、上端の一部を潰している。A面左側縁にはA面からの打撃による剝離で抉りを作出しており、右側縁は折れているため石庖丁の破損品だろう。145は上端に潰れ、下端の一部には調整が認められる。両側縁に抉りはないが、石庖丁の未成品の可能性もある。146は剥片の上端の多くが潰れ、下端にはA面から調整が施される。A面右側縁の折れは最も厚さをもつ部分からの衝撃による。左側縁に抉りがあることから、加工途中の石庖丁が折損したものと考えられる。147の上端にはA・B両面から、下端にはA面から調整が施される。A面左側縁は最後に折れている。A面右側縁のわずかな窪みを抉りとすれば、破損した製作途中的石庖丁と考えられようか。148は下端にA・B両面からの調整が認められ、A面右側縁に抉りがある。上端の潰れが一部にとどまり、A面左側縁が折れいることから、加工途中の石庖丁が折損したものだろう。149は上端の折れ面に打面が推測される剥片で、A面の上端から調整が加えられ、潰れも認められる。下端の一部にも折れ面があり、調整がほとんどない。A面左側縁の剝離面を抉りとみると石庖丁の未成品になるだろう。150は上端に潰れ、A面左側縁に抉りがある。下端の調整が多くないため、石庖丁の未成品とみたい。A面は厚さを減ずるためか、多くの剝離面が認められる。151は剥片の上下端にA・B両面から細かな調整を施し、A面右側縁が折れている。左側縁に抉りはないものの、上端に潰れの痕跡があることから石庖丁未成品が破損したものとした。152はB面に主要剝離面の打面が残る。上端には潰れ、A面右側縁には抉りがあるが、下端の調整は密ではない。左側縁はB面上位からの力により折れている。加工途中の石庖丁が折損したものだろう。153はA面左側縁に抉りがあり、上端から潰れが連続する。下端には折れた後にわずかにA面からの調整が施される。A面右側縁を折損する石庖丁の未成品とみられる。154は周縁にA・B両面から調整を施した剥片で、下端はB面からの衝撃で折れている。A面右側縁の下半には潰れが認められるため、打製石剣の先端部と考えた。155はA面下端の左右が折れ、A・B両面から周縁に調整が施される。周縁調整の後に上端が折れている。上端を欠損する打製石剣の基部と思われる。156は両側縁に調整を施した後、A面右側縁すべてと、B面右側縁の下半に潰れが施される。上下端を折損する打製石剣だろう。A面には階段状剝離痕が残り、厚さも一定しない。157～182はスクリイバー



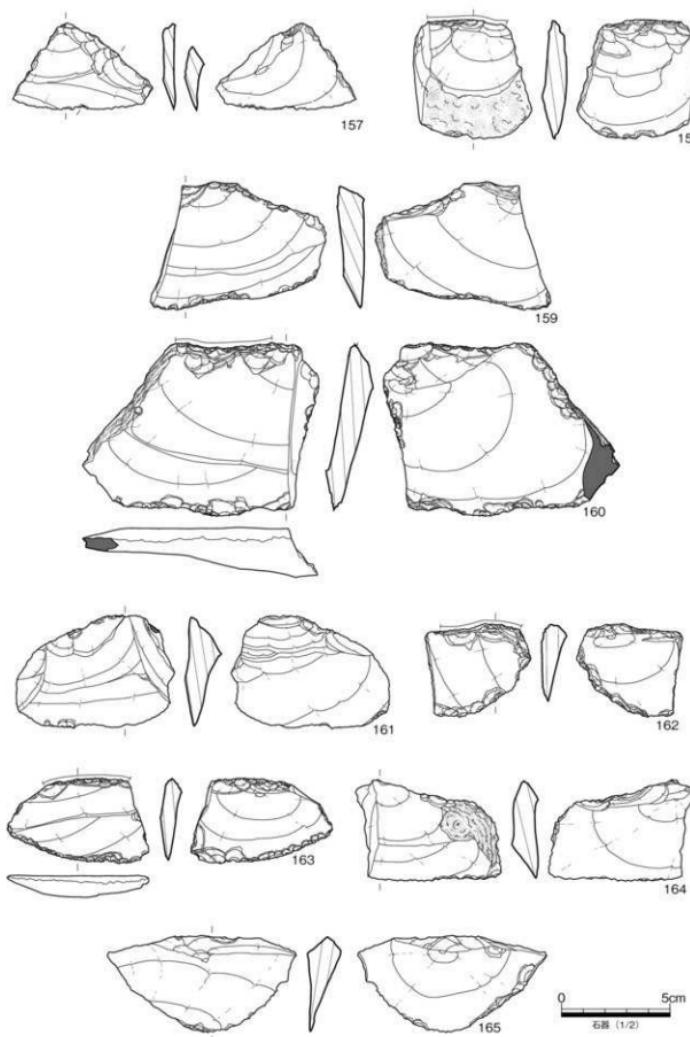
第19図 SR01 出土遺物5



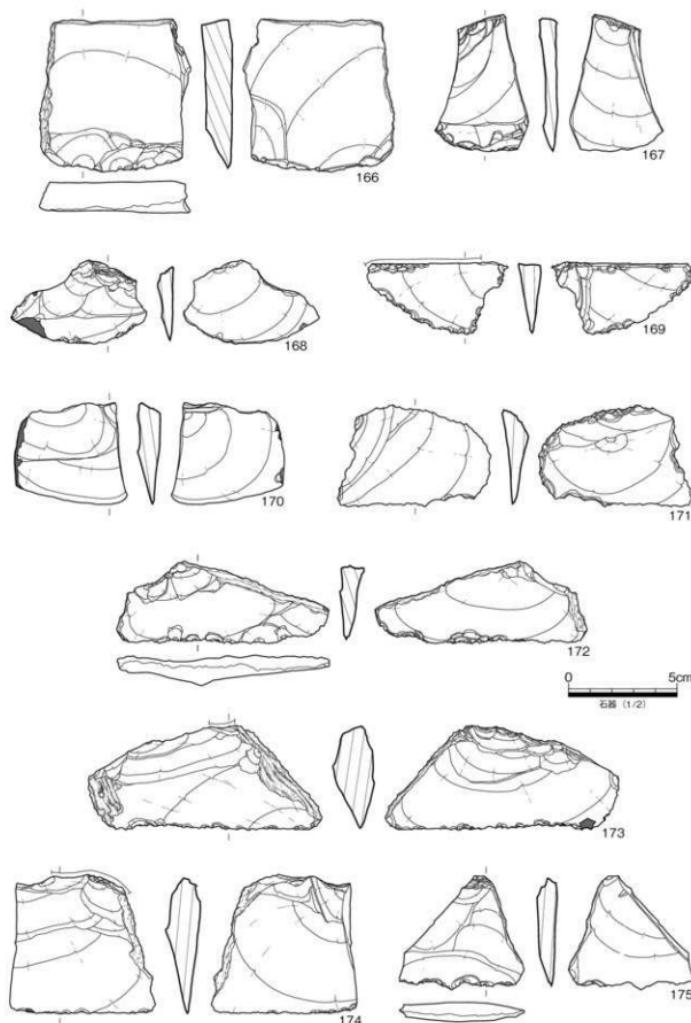
第20図 SR01 出土遺物 6



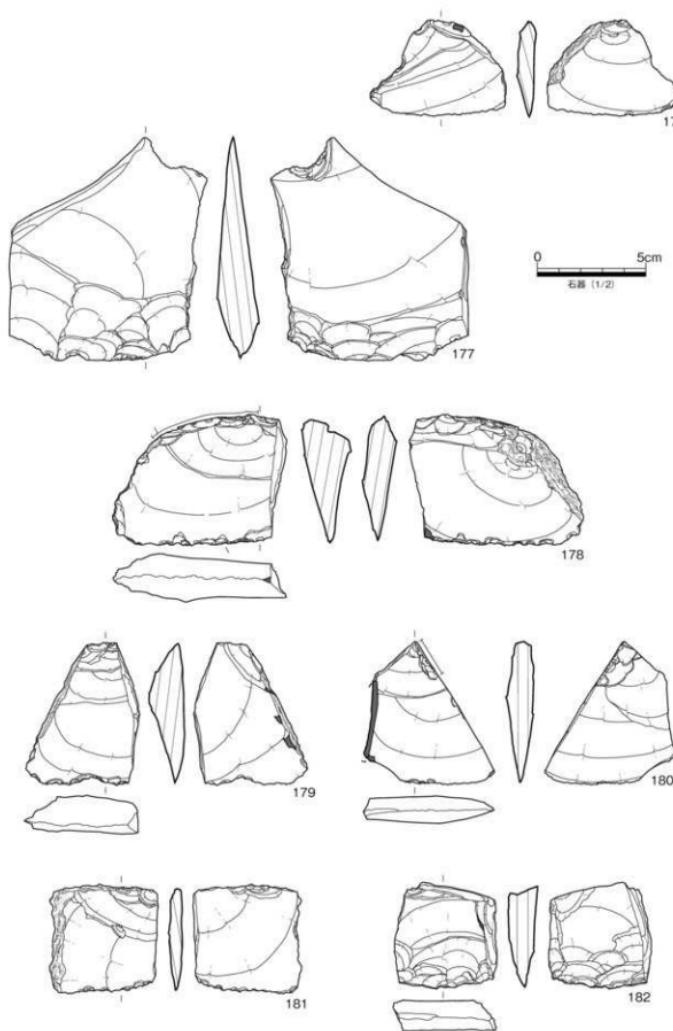
第21図 SR01 出土遺物 7



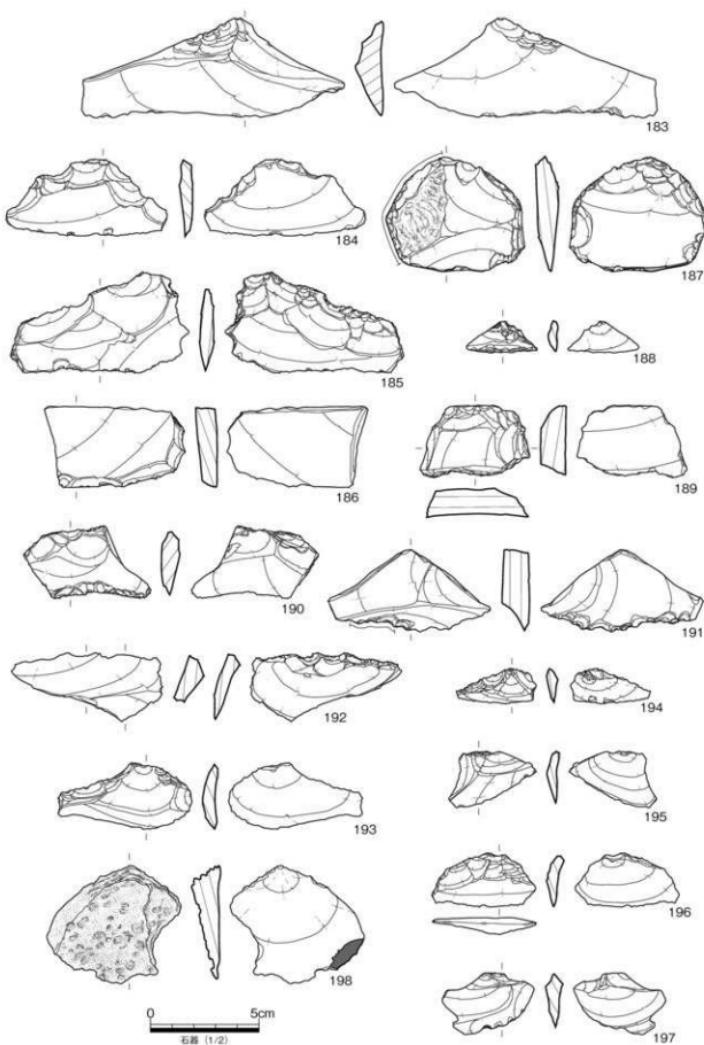
第22図 SR01 出土遺物 8



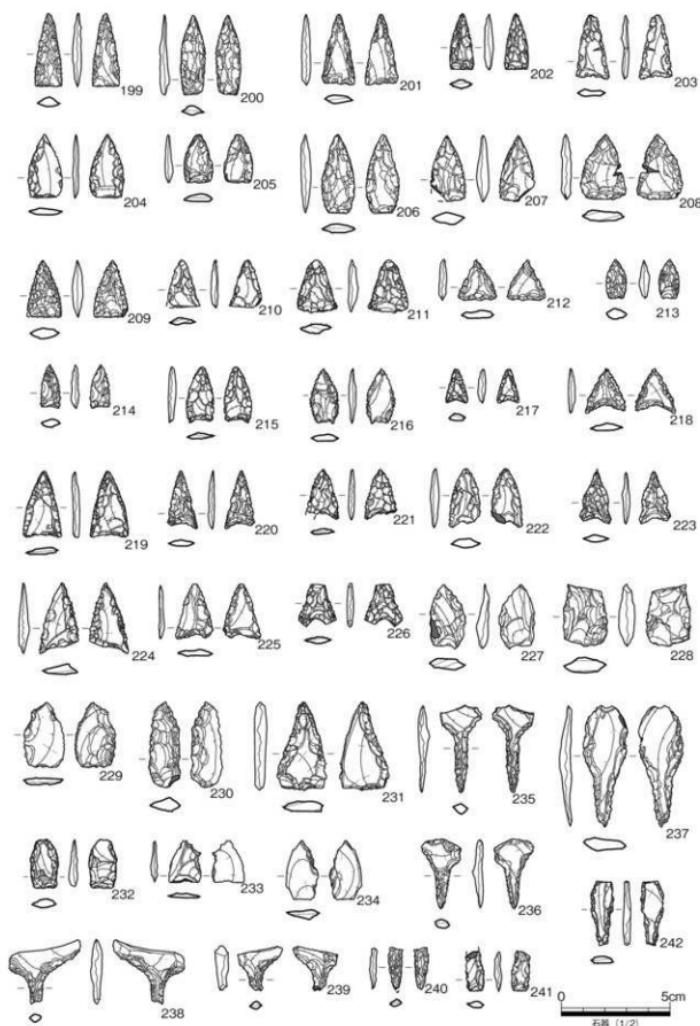
第23図 SR01 出土遺物 9



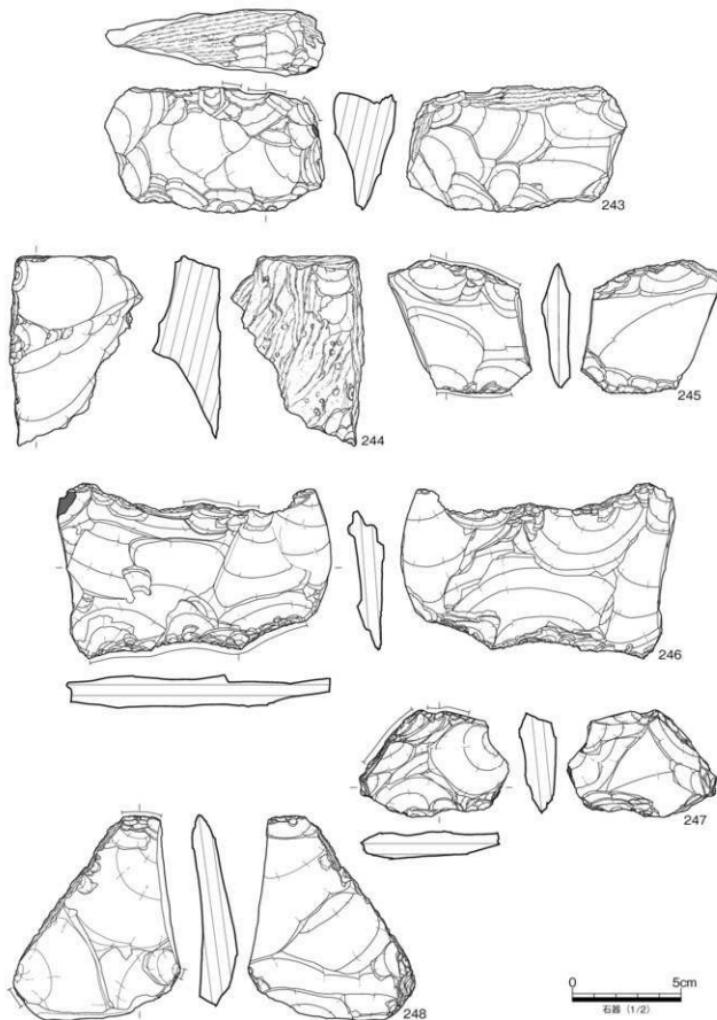
第24図 SR01 出土遺物 10



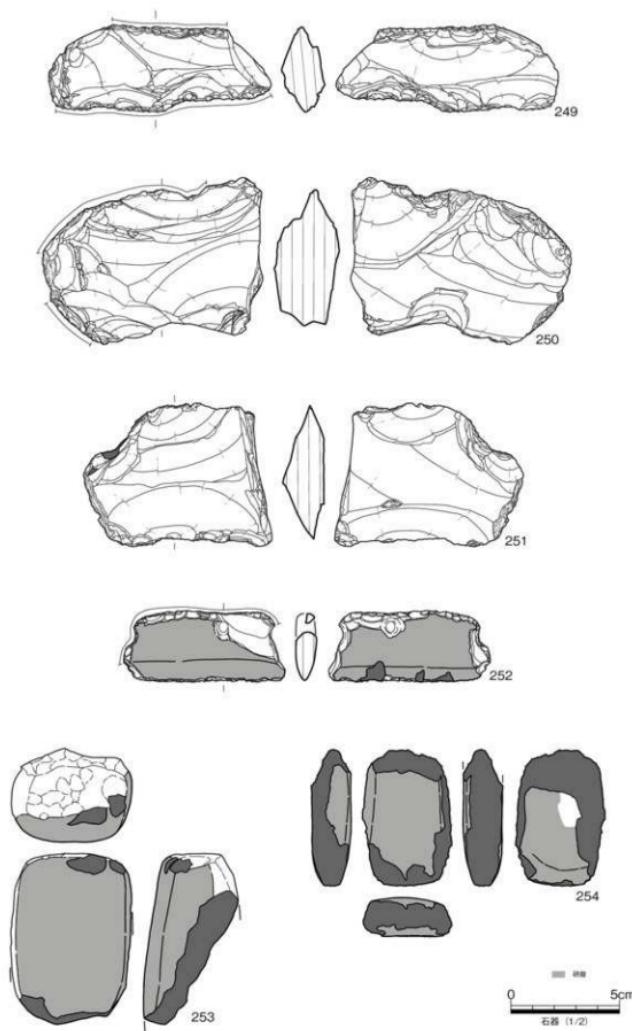
第25図 SR01 出土遺物11



第26図 SR01 出土遺物 12



第27図 SR01 出土遺物 13



第28図 SR01 出土遺物 14

とした。157は平坦な打面を直接打法により剥離した剝片で、A面の一部に調整を加えている。B面には打面作出のための調整が残る。下端の刃部には使用に伴うと考えられる微細な剝離が認められる。158はA面上部につぶれがあり、片面を自然面とする下端を刃部とする。159は自然面を打面として直接打法で作出した剝片の上端と下端に調整を加えている。160はB面上端に先行する複数の剝離面があり、ここを打面として主要剝離面を形成する。A面右側縁の折れは、主要剝離面形成時に同時に生じたものとみられる。上端は細かな剝離痕とともに潰れが認められ、下端はA・B両面から調整が施される。A面左側縁には自然面が残る。161はB面上端を打面として主要剝離面が形成される。A面の大きな剝離面は主要剝離面に先行する。162はB面上端の先行剝離面を主要剝離面の打面とする。上端には潰れがあり、下端にはA・B両面からの加工が施される。A面左側縁は折れているが、どのタイミングで生じたものかは判然としない。163はB面上端に重なり合う剝離面があり、一番古い面を主要剝離面形成に伴う打面とする。新しい剝離面は潰れ以前の加工による。下端にはA・B両面から連続する調整が行われる。A面右側縁の折れはB面からの衝撃によるものだろう。164は打面がわずかに残り、その周囲には調整が施される。下端にある細かな剝離痕は使用に伴うものだろう。165はB面上端を打面とし、主要剝離面形成以前の打面調整痕が確認できる。下端の一部にある細かな剝離面は使用痕だろう。166はA上面端と左側縁に自然面が残り、右側縁は折れている。下端には主にA面から調整が施され刃部を形成する。167は上端に残る自然面を打面とする剝片で、左右両端は折れている。上端と下端はA面からの加工が行われている。168は直接打法により作出された剝片で、上端にはわずかだが打面が残る。169は上端の折れた部分を潰し、下端に細かな調整を施している。170はB面上端を打面とし、左側縁は主要剝離面形成と同時に折れているものとみられる。171は広い打面からの直接打法により作出した剝片の上端に調整を加えている。下端は基本的に未加工である。172はB面上端の自然面に挟まれた剝離面を打面とする剝片で、A上面端には加工が行われる。下端にはA・B両面の一部が調整される。173は両側縁に自然面を残し、残存はしないが打面は限りなく自然面に近い場所と推測できる。上端は主にB面から加工が加えられ、一部には潰れが認められる。下端の微細な剝離痕は使用に伴うものだろう。174はA面右側縁に自然面が残り、左側縁は折れている。上端には潰れがあり、下端には使用痕とみられる微細な剝離がわずかに認められる。175はA面左側縁が折れているが、折れ以前にはB面上端の打面が連続しており、この打面により剝離された剝片と思われる。A面下端の刃部の一部に調整が施される。176はB面上端に調整された打面をもつ剝片で、下端の刃部に使用に伴うとみられる細かな剝離面がわずかにある。177は大型の剝片の下端をA・B両面から調整を施して刃部を作り出している。A面左側縁は最終的に折れた面になっている。178は自然面に打撃を加えて作出した厚い剝片の上部を潰してスクレイパーとしたものである。刃部である下端にはA・B両面からの調整が認められる。179はA面左側縁に自然面を残す剝片の右側縁を折ることで平面台形状に成形されている。刃部にはわずかな調整、もしくは使用に伴う細かな剝離痕がある。180は、A面右側縁部と上部は折れており、左側縁部は欠損する。右側縁上方のA・B両面には潰れと若干の研磨が確認できる。下端部には使用に伴うと思われる細かな剝離がある。横長の剝片の両側縁と上端部を折り、手に持つ部分の棱線を潰して加工したものと思われる。181はA上面端・左側縁に自然面を残す正方形に近い平面形の剝片で、下端には使用痕とみられる細かな剝離痕が認められる。182は未成品とみられる。A面の両側縁を折った剝片の上部をさらに折った後、刃部への調整を施している。刃部への調整はB面とA面の一部にとどまり、先行する折れ面が残る。183は横長の剝片の上端にA・

B両面から調整を施している。下端には使用痕とみられる細かな剥離痕が確認できる。**184**は直接打法による剥片で、わずかに打面が残る。上端には調整が施される。**185**は上端と左側縁にB面からの調整が加えられている。下端の刃部には使用に伴うとみられる細かな剥離痕がある。**186**はA面の上端部と左側縁が折れ、下端部と右側縁の大半には、主要剥離面形成前の剥離面が認められる。また、下端部には使用痕とみられる細かな剥離もある。剥片を作出後に上端部と左側縁を折り、下端部を主に刃部として使用したのだろう。**187**は自然面の残る剥片の周縁に調整を加えている。下端には摩耗したような痕跡が認められる。**188**は上端に小さな打面が残る横長の剥片で、上端から右側縁にかけてと、下端にA面からの調整がある。**189**は断面を台形状に整形した剥片のA面左側縁を除く周縁に片面からの調整を施している。**190**は下端にA面からのみ調整が施され両側縁は折れている。**191**はやや厚めの剥片の下端にA・B両面から調整が施され、一部には潰れのような痕跡もある。加工痕のある剥片だろう。**192～197**は横長の剥片でB面上面を打面とする。いずれもA面上半には先行する複数の剥離面が認められる。打面と底面は平行に近い。打面調整剥片の可能性がある(第5章参照)。**198**はA面全面を自然面とし、B面は剥離面1面である。自然縁からの最初の剥離に伴う剥片だろう。**199～234**は石錐である。**199～228**は石錐である。**199**は縦長の二等辺三角形に近い平面形でA面にみられる周縁の調整は細かい。B面の調整はA面ほど丁寧ではない。**200**はやや縦長で、A面の基部付近に厚い箇所を残している。**201**はB面左側縁の一部を除き周縁に調整が施される。**203**は周縁の調整がやや不十分ではあるものの、一応は成品か。**204**の周縁の細かな凹凸は主にB面からの調整による。**206**はやや大型で、周縁にはA・B両面から施された丁寧な調整が認められる。**207**も調整が丁寧である。**210**は二等辺三角形の平面形をもつ。基部には折れが残り、A面からの周縁調整は認められない。**212**の平面形は正三角形に近く、周縁に調整が認められる。**213**は小型で、やや厚みをもつため横断面形は菱形に近くなっている。**214**はA面右側縁と左側縁の上部にのみ細かな調整が認められる。**215**はA・B両面から調整が施される。**216**は周縁に細かな調整が施されるが、B面の一部にのみ認められない。小型品**217**の調整は丁寧である。**220**はA面左側のかえりを欠損する。調整は細かく丁寧である。**221**はかえりの先端を欠損する。**222**の周縁調整はさほど細かくない。**223**はA面左側のかえりを欠損し、欠損部分は風化している。A面中央部には自然面を残す。**224**は加工途中でA面右側のかえりを欠損したものと思われる。**225**はA面左側縁などに周縁からの調整がないが、形状から石錐とした。**226**は先端部と両かえりの先端を折損する。折損は風化度合いから限りなく弥生時代に近い時期のものとみられる。**227**は未成品である。A面の左上部に周縁部未調整部分が残り、B面では周辺部調整がわずかにとどまる。**228**は先端部が折れている。周縁はある程度調整されているので、欠損のために廃棄されたものか。**229**は形状から石錐と考えられ、主にB面からの調整が施される。A面からはほとんど加工されてないことから、未成品の可能性もある。**230**はB面の右側を除き、周縁加工が施される。細身の石錐の未成品と考えた。**231**は小さな剥片のA面周縁、B面右側縁、B面下端の一部を調整したものである。石錐を志向した未成品か。**232**は未成品とみられ、周縁からの細かな加工はA面のみにとどまる。**233**は薄い剥片の周縁に若干の調整を施される。形状から未成品とみられる。**234**はB面左側縁を打面とする直接打法による小さな剥片で、A面右側縁の上部に周縁からの加工が認められる。形状から石錐の未成品とみられる。**235～240**は石錐である。**235**は基部から刃部にかけて周縁に細かな調整が施される。**237**は薄い剥片の周縁をA・B両面から加工して細い先端が作出される。**238・239**は刃部先端を折損する。**240**はA・B両面に左右からの調整を施して

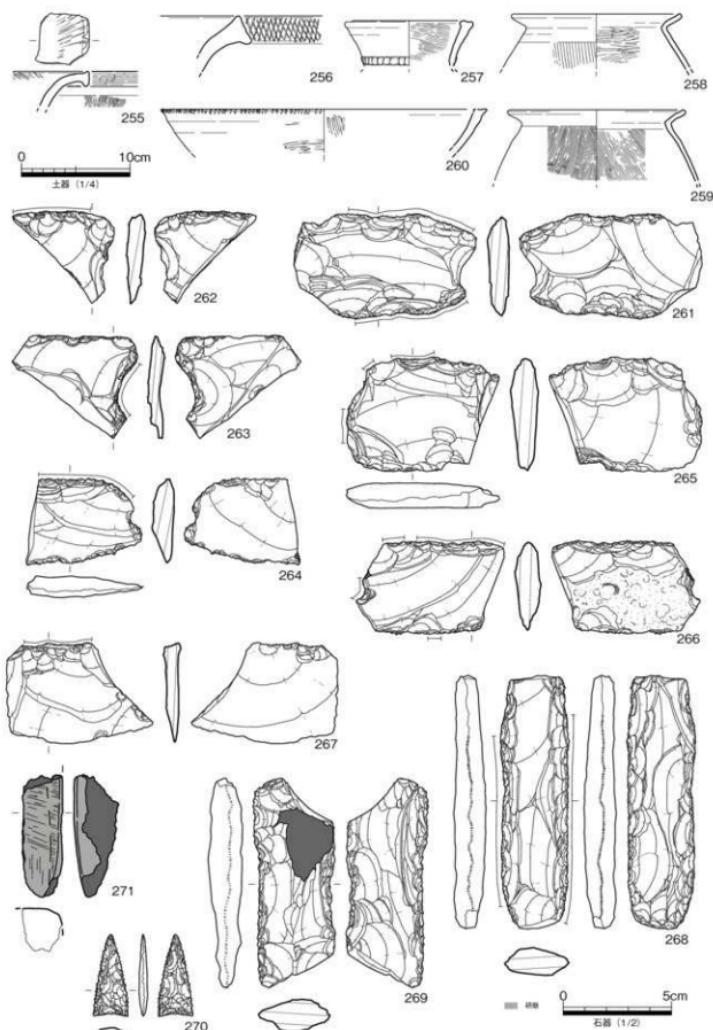
細長く整形された剥片で、上端は折れている。折損した石錐の刃部とした。幅の狭い剥片 241 は A 面左側縁を除いた周縁に調整が施される。上端を欠損するため全体形は不明だが、石錐の未成品か。242 は薄い剥片を細身に加工したもので、上下端を欠損する石錐と考えた。石核 243 は上面と B 面左側縁の一部に自然面を残し、それ以外は周縁方向からのいくつもの剥離痕が確認できるが、剥離に規則性はない。244 は B 面の大半を自然面とする石核である。A 面左側縁・上端から連続して剥離されたことがわかる。おそらく直接打法によるものだろう。245 は上下端に潰れがあり、左右両側縁が折れている。両極打法による石核とみたい。246 は主に上下端から剥離が行われて、A 面左右側縁は折れている。上下方向からの両極打法による石核だろう。石核 247 は A・B 両面にあらゆる方向からの剥離面をもつが、B 面に大きなリングの剥離面が残る。248 には A 面左側縁に自然面が残り、同右側縁と下端に折れが認められる。A・B 面とともに複数方向からの剥離痕があり、幅が狭い上端は潰れている。おそらく石核だろう。249 は B 上端の一部の自然面を除き、主に上下からの剥離痕が認められる。上下端の細かな剥離と潰れから両極打法の石核の可能性を考えたい。A 面右側縁の折れも両極打法によるものだろう。250 は主に上下方向からの剥離痕が A・B 両面に残り、一部を除く上下端には潰れのような痕跡が認められる。A 面左側縁には自然面が残り、同右側縁は折れている。両極打法の石核だろう。251 の石核には A・B 両面に上下方向からの複数の剥離面がある。A 面左側縁には自然面が残り、右側縁は折れている。A・B 両面の剥離、A 面右側縁の折れは両極打法によるものだろう。252 は片側の孔から折れた結晶片岩製磨石庖丁で、上端に潰れ、A 面左側縁に抉りが認められる。下端には細かな剥離が連続する。欠損した磨製石庖丁を、孔の断片を一方の抉りとして打製石庖丁に再加工したのだろう。253 は欠損した砂岩製作採斧とみられ、一部に敲打痕が残る。敲石に転用したものか。254 は結晶片岩製の加工斧で、欠損部を除いて研磨されている。

時期 出土した土器から最上層は 8 世紀後半埋没、上層～最下層は弥生時代中期中葉（中期 II -I 様式新段階～II -2 様式）と判断できる。

SR11（調査時遺構名：Ⅱ区 SR01）

2 区北部を流れる流路で、断面形は浅い皿状を呈する。最深部の検出面からの深さは約 45cm とさほど深くない。SR01・12 と同様、浅い谷状の流路と思われる。

遺物 255～257 は弥生土器壺、258・259 は弥生土器甕、260 は弥生土器台付鉢である。石理方向に沿う剥片 261 の A 面右側縁に抉り状の割れが確認できるが、反対側には認められない。潰れは上縁下縁の大半に及ぶ。抉り状の割れを積極的に評価すれば、石庖丁を目指した剥片の可能性がある。262 は A 面右側縁に抉りがあり、上端は潰れている。A 面左側縁は破断面であるため、折れた石庖丁だろう。263 は A 面右側縁に大きな抉りがあり、左側縁は折れている。石庖丁の破損品とみられるが、A 上端を潰れ未加工とするなら、成形途中ということになる。264 は A 面左側縁で折れ、上端に潰れ、下端に調整が認められる。横長剥片を素材とする石庖丁で折損のために廃棄されたのだろう。265 の剥片は A 面右側縁が折れ、周辺に加工が施されている。上端の一部には潰れがあることから、成形途中の石庖丁が折れたものとしたい。266 は B 面に自然面が残り、上端と下端の一部に A・B 両面からの加工が認められる。上端の大半には潰れがある。破損した石庖丁だろう。267 の主要剥離面は上端の自然面を打面として作出される。A 面右側縁は折れ、上端には潰れがある。下端を刃部とするスクレイパーか。268 は上下端が折れている。両側縁の幅は中央付近では一定で、上下端に近い位置で



第29図 SR11 出土遺物

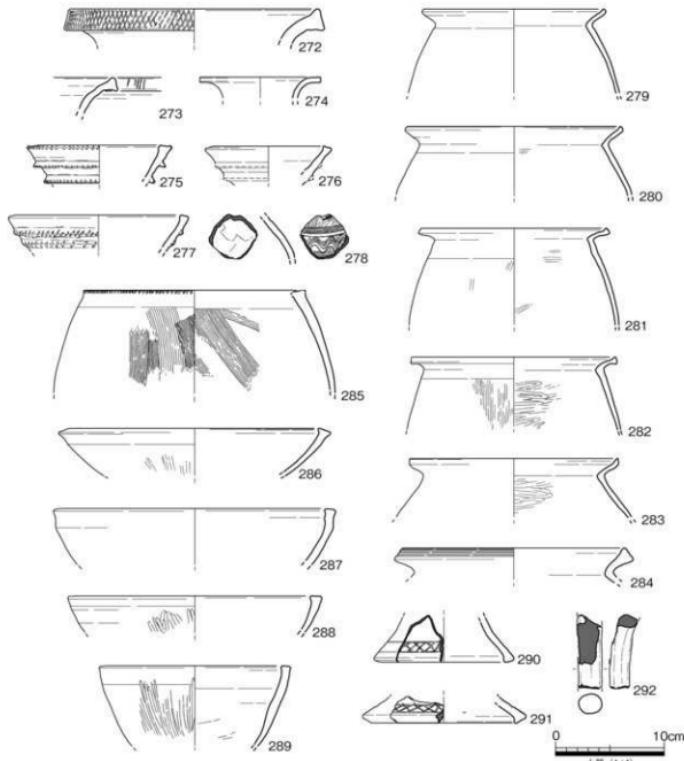
はやや狹くなる。一定幅の箇所にのみ潰れが認められることから、打製石剣の上端部を折損したものとみられる。269は厚みのある剥片を両側縁から加工し、上下端は折れている。打製石剣の基部の可能性がある。270は比較的長さがあり、周縁に細かな調整が施された石鎌である。271は結晶片岩製加工斧の破片である。

時期 255～260から弥生時代中期中葉（中期II-1様式新段階～II-2様式）と判断できる。

SR12（調査時遺構名：Ⅱ区 SR02）

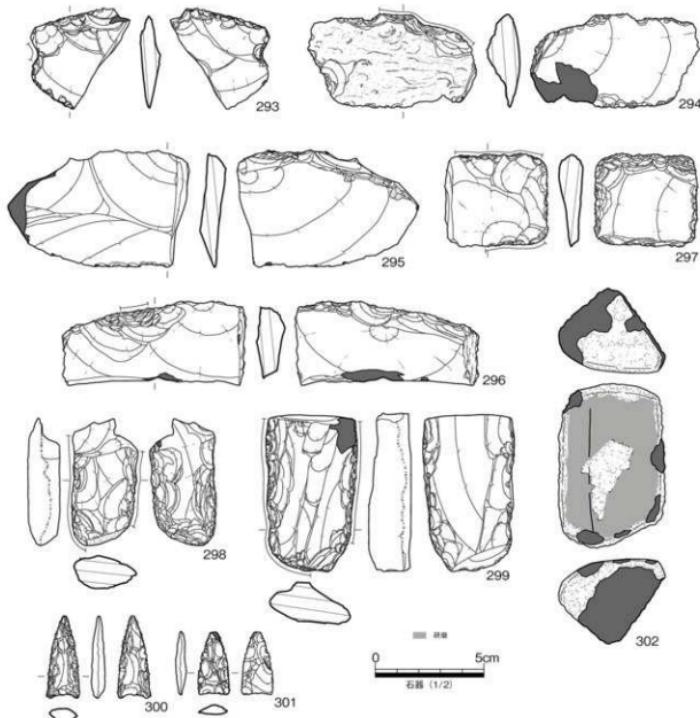
2区南東部で検出した緩やかな落ち込みで、SR11と似た性格の流路と思われる。

遺物 272～278は弥生土器壺、279～284は弥生土器壺、285は弥生土器鉢、286～291は弥

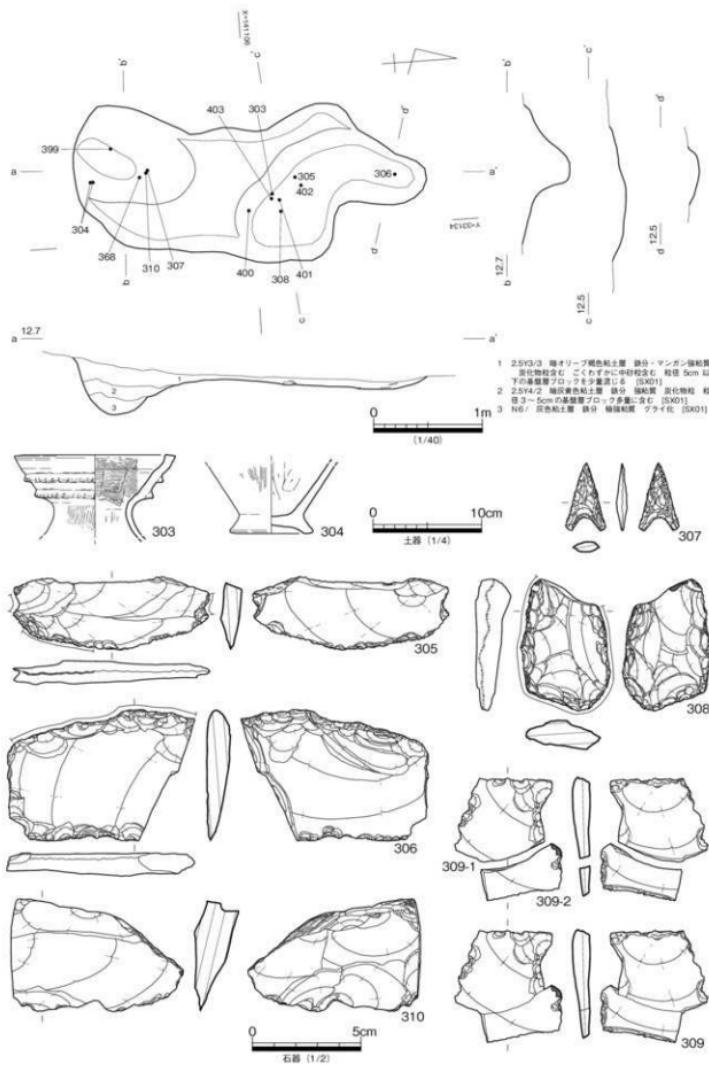


第30図 SR12 出土遺物 1

生土器台付鉢である。292は台付鉢に伴う把手だろう。293はA面左側縁に抉りがあり、上端にはA・B両面から細かな調整が施される。上下端いずれも潰れがみられずA面右側縁が折れているため、最終的な加工途中に折損した石底丁と考えられる。294はA面に自然面を残し、上端に潰れがある。下端を刃部とするスクレイパーか。295はB面上端を打面とする剝片で、同左側縁は折れている。下端の細かな剥離を刃こぼれとするならスクレイパーとみることもできる。296はB面上端右半分に主要剥離面に先行する剥離面が重複している。主要剥離面形成に伴う打面調整痕だろう。同左半部や、A面上端には主要剥離面形成後に調整されている。A面左側縁には自然面が残り、同右側縁と下端は折れている。297は周縁に外側からの加工が施された剝片で、上下端には潰れがある。298は厚みがある剝片で、上端は折れ、下端には自然面が残る。左右両側縁には潰れがあり、打製石剣の基部の可能性がある。299は厚めの剝片の周縁に加工を施したもので、打製石剣の基部と思われる。上端の折れは



第31図 SR12 出土遺物2



第32図 SX01 平・断面図・出土遺物

加工中のものか。300は綫長の石鎚で、周縁から細かな調整が施される。301は石鎚で、A面に比べてB面にはあまり調整が認められない。未成品か。302は緑色岩製伐採斧の破片で、複数個所に敲打痕が認められる。割れた伐採斧を敲石に転用したものだろう。

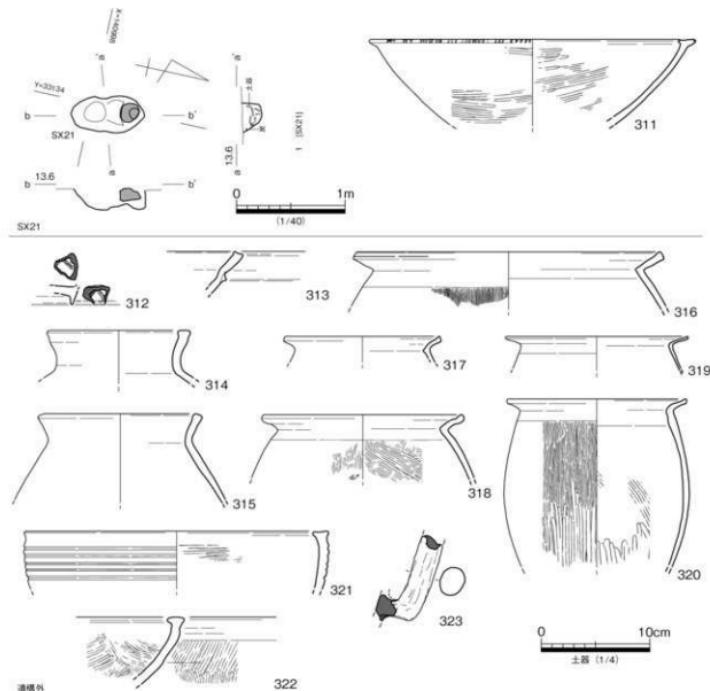
時期 272～292から弥生時代中期中葉(II-1様式新段階～II-2様式)と考えられる。

不明遺構

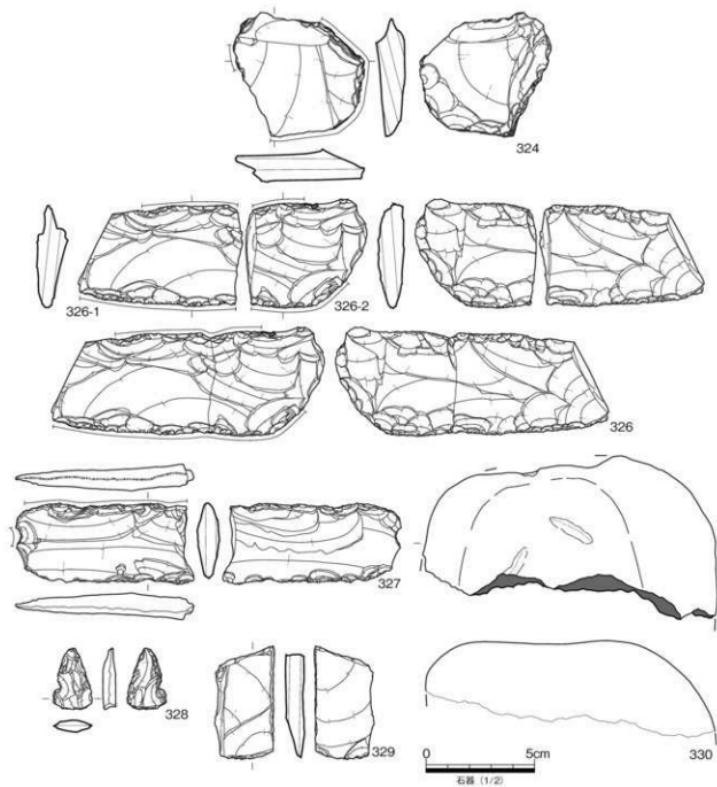
SX01 (調査時遺構名: I区 SX01)

SR01南端の下面で検出した平面形不定形の落ち込み状遺構である。

遺物 303は弥生土器壺、304は弥生土器壺底部である。305は上端が折れた剥片の左右両側縁に抉りを入れ、下端に加工を施した石庖丁である。上端に潰れがないのは折れ面であるからだろう。下端



第33図 SX21 平・断面図・出土遺物・遺構外出土遺物 1



第34図 遺構外出土遺物2

の一部には潰れがある。306はB面右側縁に自然面が残り、左側縁は折れている。側縁に抉りはないが、上端に潰れがあることから成形途中の石庵丁の破損品とみられる。307は石鎚で両かえりの先端を欠損する。308の上端は折れているものの、他には潰れが認められるため、打製石剣の破損品の可能性もある。ふたつの剥片309-1、309-2は折れ面で接合する(309)。310は石核でA面左側縁は折れている。剥離は主に上下方向から行われている。

時期 303から弥生時代中期中葉(中期II-1様式新段階～中期II-2様式)と判断できる。

SX21（調査時遺構名：Ⅲ区 SX01）

SD23 下面で検出したが、遺物の出土状況などから SD23 上面から掘り込まれた遺構とみられる。

北側の落ち込む部分には安山岩塊が埋まっていた。

遺物 311 は弥生土器台付鉢である。

時期 311 と周辺遺構の時期から弥生時代中期中葉（中期Ⅱ-1 様式新段階～Ⅱ-2 様式）としておく。

遺構外出土遺物

312～315 は弥生土器壺、316～320 は弥生土器壺、321～323 は弥生土器台付鉢である。324 はサヌカイト製の石核である。326 は接合する二つの剥片（326-1・326-2）からなる。上端部の多くと下端部に潰れが認められ、左端部は折れている。両剥片は A 面のもっとも高さのある箇所から折れている。現状での剥片の規模から石庖丁の整形途中品としたが、上下端部に潰れがあることから、打製石剣よりも一回り大きな武器形石器の可能性もある。いずれにしても、両剥片に分割される折れにより成品にまでたどりつけなかったのだろう。327 は横長の剥片の上端に潰れ、下端に A・B 面からの調整が認められる。A 面左側縁に抉りが作出されたため、石庖丁が A 面右側縁の折損により廃棄されたものとみられる。石鏨 328 の下端は折れた状態で周縁からの細かな調整は B 面右側縁からしか認められない。加工途中か。329 は中世の溝 SD22 から出土した。A 面右側縁に自然面が残り、左側縁と上端が折れている。下端は断面の角度が小さいため、刃部とみられる。スクレイバーだろう。3 区 SD24 から出土した砂岩製の台石 330 のやや平らな中央部分には、細長い口唇状の浅い窪みが 2 か所確認できる。両極打法に伴って剥片を設置、分割した痕跡と思われる。

第5節 中世の遺構と遺物**柵****SA21（調査時遺構名：Ⅲ区 SA01）**

3 区北端で検出した直線上に並ぶ 5 基の柱穴で、主軸方向は周辺の条里型地割に合う。

遺物 遺物は出土していない。

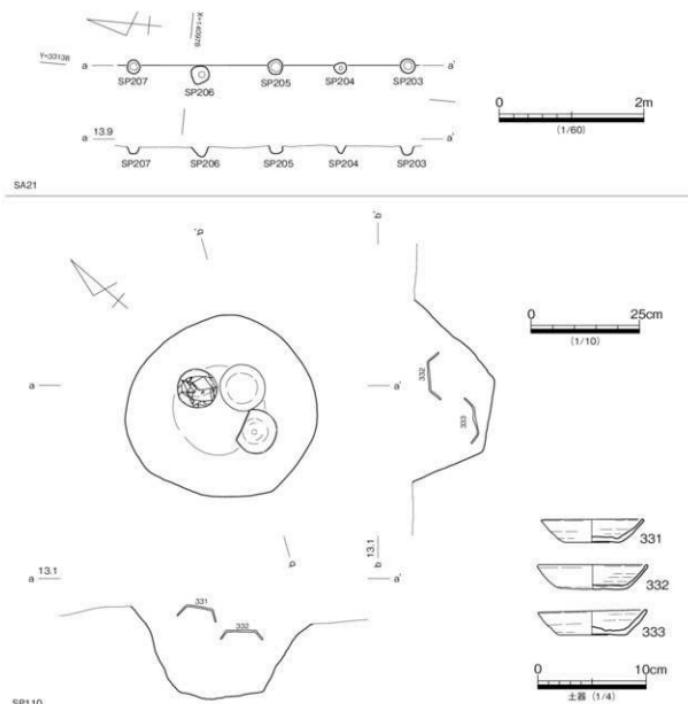
時期 主軸方向から古代以降の柵と判断できる。

柱穴・小穴**SP110（調査時遺構名：Ⅱ区 SP10）**

2 区で検出した柱穴で、土師質土器 3 枚が出土した。口縁部を上方に向かって 333 のやや上位に底部外面を上方にした 331・332 が位置する。出土状況からみて、埋め戻し途中に土師質土器が埋められた蓋然性が高い。

遺物 331～333 は土師質土器である。

時期 331～333 から 13 世紀末～14 世紀前葉（Ⅱ-5 期、以下中世土器の時期は佐藤 [2000] による）



第35図 SA21・SP110 平・断面図・出土遺物

と判断できる。

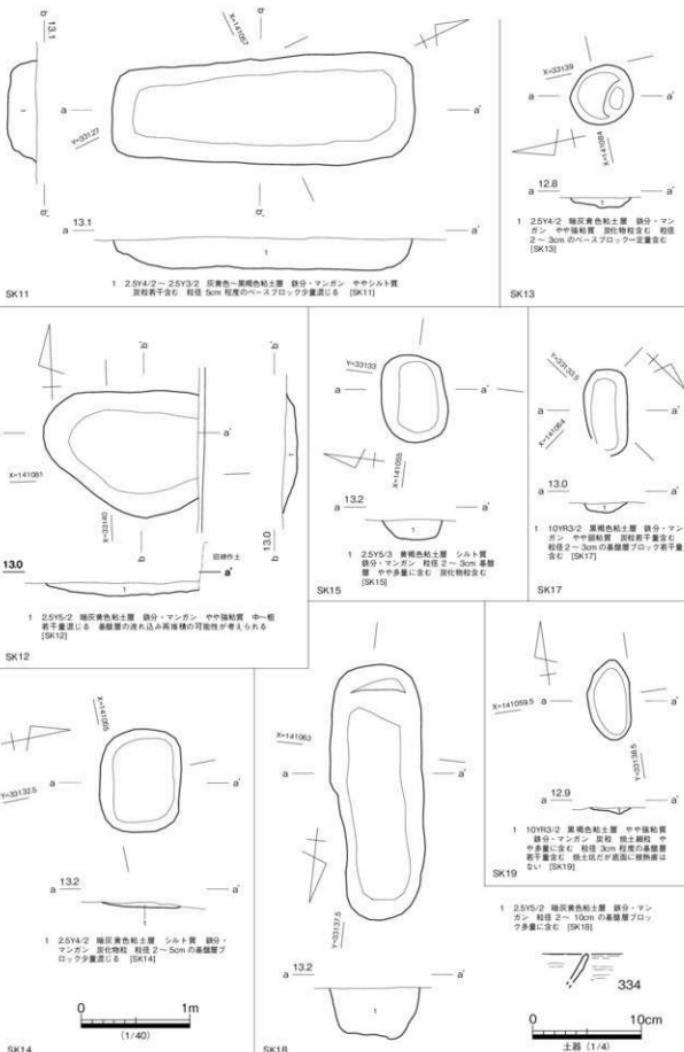
土坑

SK18 (調査時遺構名: II区 SK08)

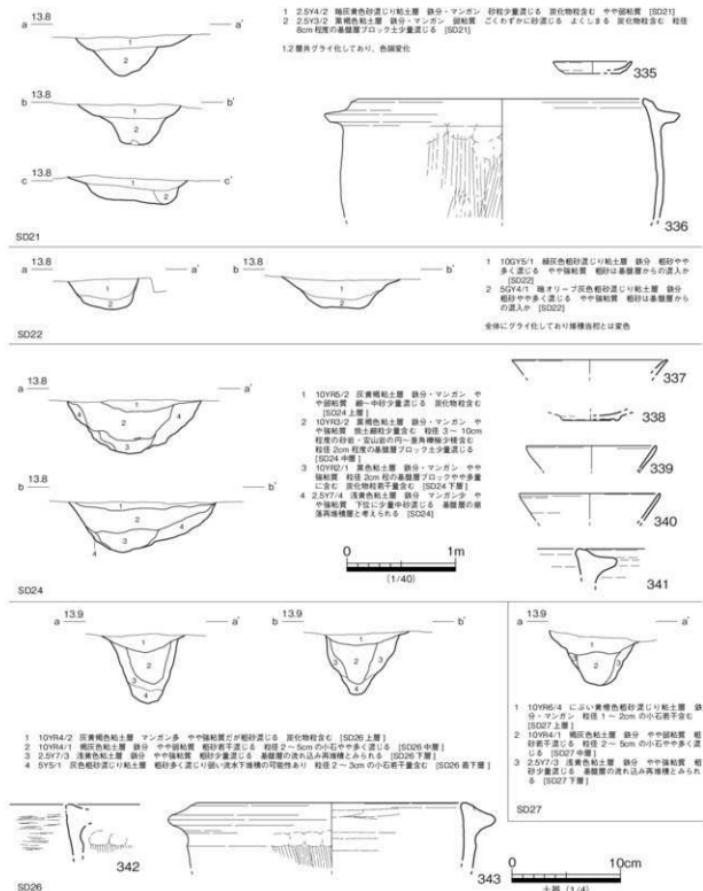
2区 SR12 上面で検出した平面形長方形の土坑である。

遺物 334は十瓶山窯系須恵器椀の口縁部片である。

時期 小片で時期特定は困難だが、334から13世紀(II-2～II-4期)としておく。



第36図 SK11・12・13・14・15・17・18・19 平・断面図・出土遺物

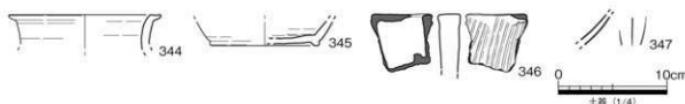


第 37 図 SD21・22・24・26・27 断面図・出土遺物

溝

SD21 (調査時遺構名: III区 SD01)

3 区北部で検出した南北方向の溝で主軸方向は周辺の条型地割に合致する。



第38図 遺構外出土遺物

遺物 335は土師質土器小皿、336は土師質土器羽釜である。

時期 335から12世紀後半～13世紀(II-1～II-4期)と判断できる。336は古い遺構に伴うものだろう。

SD24・26・27 (調査時遺構名:Ⅲ区 SD04・06・07)

3区南部を南西～北東方向に走る溝で、SD26・27は連続する同一溝の可能性がある。また、SD26・27とSD24は並行する。

遺物 337は須恵器皿、338は十瓶山窯系須恵器挽の高台片、339・340は土師質土器杯、341～343は土師器羽釜である。

時期 須恵器皿337は8～9世紀、341～343は11世紀の遺物だが、その他は中世に位置付けられる。338～340からSD24は13世紀中葉～後葉(II-3～II-4期)と推測可能で、3本の溝が関連するのであれば、SD26・27も同時期となる。

遺構外出土遺物

344・345は須恵器壺、346は平瓦片、347は青磁碗である。

第4章 自然科学分析

香川県東坂元北岡遺跡における花粉分析

1はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2 試料

分析試料は、東坂元北岡遺跡の1区西壁より採取された試料1(6層：黄灰色粘土(SR01最上層、6～8世紀))、試料2(7層：にぶい黄褐色粘土(SR01最上層、6～8世紀))、試料3(8層：黒褐色粘土(SR01最上層、6～8世紀))、試料4(9層：灰オリーブ色粘土(SR01上層、弥生時代中期中葉))の計4点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3 方法

花粉の分離抽出は、中村(1973)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え 15 分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- 4) 水洗処理の後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎)
- 5) 再び水酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顯微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行う。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(ー)で結んで示す。イネ属については、中村(1974・1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

4 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉8、草本花粉7、シダ植物胞子2形態の計17である。これらの学名と和名および粒数を第1表に示し、花粉数が100個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花

粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第39図に示す。主要な分類群は写真に示す。また、寄生虫卵についても観察したが検出されない。

以下に出現した分類群を記載する。

[樹木花粉]

ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科—イスガヤ科—ヒノキ科、クマシテ属—アサダ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ

[草本花粉]

イネ科、カヤツリグサ科、チドメグサ亜科、セリ亞科、タンボボ亜科、オナモミ属、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

單条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

下位より花粉構成と花粉組成の変化について特徴を記載する。

1) 試料4(9層)から試料27(層)

花粉密度が極めて低く、ほとんど検出されない。

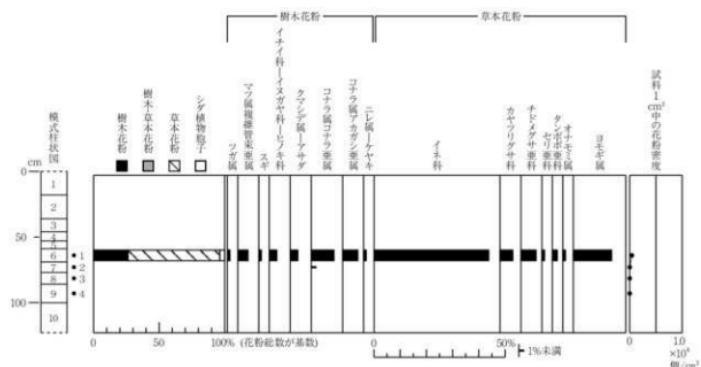
2) 試料1(6層)

花粉密度がわずかに高くなる。樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、イネ科が優占し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、チドメグサ亜科、タンボボ亜科、セリ亞科、オナモミ属が出現する。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、マツ属複維管束亜属、イチイ科—イスガヤ科—ヒノキ科、クマシテ属—アサダ、ツガ属、スギ、ニレ属—ケヤキが低率に出現する。

5 花粉分析から推定される植生と環境

花粉分析の結果から、植生と環境を推定する。

1) 6～8世紀から弥生時代中期中葉の層(試料27層)から試料4(9層))の時期



第39図 東坂元北岡遺跡の1区西壁における花粉ダイアグラム

分類群		1区西壁			
		6層	7層	8層	9層
学名	和名	1	2	3	4
Arboreal pollen	樹木花粉				
<i>Tsuga</i>	ツガ属	1			
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属複維管束亜属	4			
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	1			
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科・イヌガヤ科・ヒノキ科	3			
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属・アサダ	3			
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	9	1		
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	6			
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属・ケヤキ	1			
Nonarboreal pollen	草本花粉				
Gramineae	イネ科	45			
Cyperaceae	カヤツリグサ科	5			
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	6			
Apioidae	セリ亜科	1			
Lactucoideae	タンボボ亜科	2			
<i>Xanthium</i>	オナモミ属	1			
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	15			
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolate type spore	単条溝胞子	1			
Trilate type spore	三条溝胞子	3		1	
Arboreal pollen	樹木花粉	28	1		
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉				
Nonarboreal pollen	草本花粉	75			
Total pollen	花粉总数	103	1		
Pollen frequencies of 1 cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度 ×10 ³	4.2	0.8	×10 ³	
Unknown pollen	未同定花粉	8			
Fern spore	シダ植物胞子	4	1		
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	(-)	(-)	(-)	(-)

第1表 東坂元北岡遺跡における花粉分析結果

花粉がほとんど検出されず、花粉などの有機質微遺体が分解される比較的乾燥した環境が推定される。

26～8世紀(試料16層)の時期

草本が多く、イネ科、ヨモギ属を主にカヤツリグサ科、チドメグサ亜科、タンボボ亜科、セリ亜科、オナモミ属が検出される。いずれも人里植物および畑作雑草であり、典型的な水生植物が伴われないことから、乾燥した環境が示唆される。周辺地域にはコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、クマシデ属・アサダの広葉樹、マツ属複維管束亜属やイチイ科・イヌガヤ科・ヒノキ科の針葉樹が分布する。コナラ属コナラ亜属とマツ属複維管束亜属がやや多いことから、二次林の成立が推定される。

6まとめ

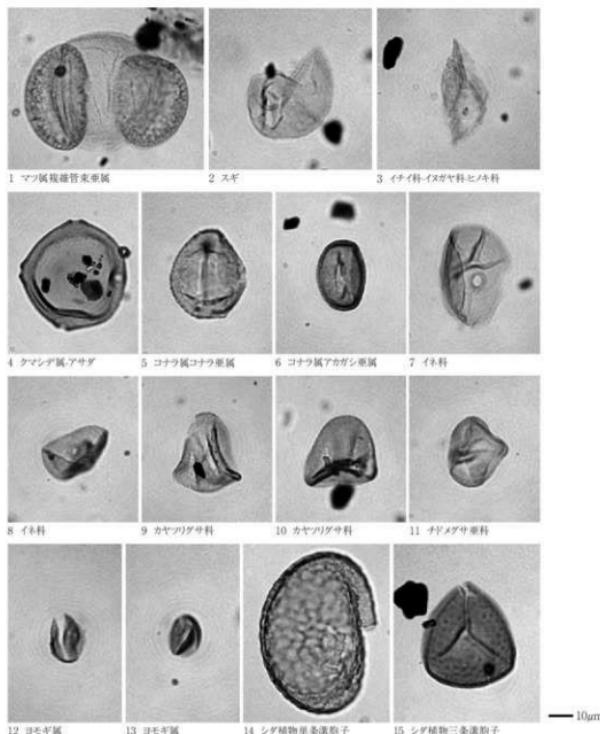
東坂元北岡遺跡の1区西壁において花粉分析を行った。その結果、6～8世紀のうち古い時期から弥

生時代中期中葉(7層から9層)には比較的乾燥した環境が推定され、6~8世紀の新しい(6層)時期になると、イネ科、ヨモギ属を主とする人里植物および畑作雑草が繁茂し、集落や畑の乾燥した人為環境の分布が推定された。

参考文献

- 金原正明 1993 「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本 第10巻古代資料研究の方法』角川書店 p.248-262
 烏倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集』60p
 中村純 1973 「花粉分析」古今書院 p.82-110
 中村純 1974 「イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として」『第四紀研究』13 p.187-193
 中村純 1977 「稻作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号 p.21-30
 中村純 1980 「日本産花粉の概要」『大阪自然史博物館収蔵目録第13集』91p

(株式会社古環境研究所)



第40図 東板元北岡遺跡の花粉・胞子

第5章 総括

第1節 金山型剥片剝離技術の復元

1 金山産サヌカイトと剥片剝離技術

東坂元北岡遺跡ではサヌカイト製の石器が多量に出土している。遺跡から北東約3kmの場所にはサヌカイト原産地の金山（香川県坂出市）があり、金山で産出するサヌカイトは、縄文～弥生時代に利用される主要な石器石材である。東坂元北岡遺跡から出土した石器もほとんどは金山産のサヌカイトとみられる。遺跡内では数種類の石器を生産していたと推測され、なかでも打製石庖丁生産は規格性の高い、剥片剝離技術に支えられていたようだ。金山産サヌカイトを用いた打製石庖丁の製作技術についてはこれまでにも言及されており、製作工程の復元も試みられている。

玉津田中遺跡（兵庫県神戸市）の土坑SK46065からは金山産とみられるサヌカイト製打製石庖丁16点と剥片3点が出土している。藤田淳は、これらの石庖丁の素材となる剥片の一部について「瀬戸内技法」に近い形である程度の連続性をもって剝離・生産された事は十分想定される」と重要な指摘を行った（藤田 1995）。

岡山県南部出土の資料を詳細に観察した高田浩司は、金山産サヌカイト製打製石庖丁について「連続的に規則的な方法によって剝離されており、高度な技術が用いられている」（高田 2001）と述べた。以下、高田が復元する打製石庖丁の生産工程を引用する。「①原石から石庖丁の大きさとあまりかわらない幅15～20cmほどの板状の剥片を剝離する。②その板状の剥片を石核素材として、石庖丁の素材となる定型的な横長剥片を連続的に剝離する。打面は固定するのではなく、剝離状況によって移動させる。③得られた剥片を石庖丁に適した形にするため、石庖丁の背部となる部分の調整を行う。石庖丁の大きさとして適切なものは、両端に自然面を残したまま使用されるか、大きいものは一方または両方の端部を截断する。その後、背部の叩き潰し、刃部調整、抉りの形成を行う。ただし、刃部調整と抉り形成は行われずそのまま使用される場合もある」（高田 2001）。高田は、藤田が推測した「連続的に規則的な方法」による剝離について具体的な工程を示したのである。

金山には複数の石器散布地が存在し、北西麓散布地では横長剥片が卓越する。森下英治は、北西麓に散布する資料の観察を中心として横長剥片を連続して作出する「金山型剥片剝離技術」を提倡した。さらに、原産地の金山以外の遺跡の状況から、金山型剥片剝離技術は弥生時代中期後半（後葉）に限定されたとした（森下 2002）。森下（2005）では金山型剥片剝離技術は次のように説明された。「厚さ5cmほどの板状素材を準備し、ファーストフレイクと目される剥片を剝離して稜線を作出し、稜線部に打面調整を施して打面形状を整えた後、打面中央部を打撃して左右対称の横長剥片を剝出する。その後再び打面調整を施し、一定の作業面を保ちながら連続的に打点を後退させて、同一形状の横長剥片を剝取する技法である。旧石器時代の「瀬戸内技法」によく似た技法だが、打点部で半折したり、剝離が途中で止まっている階段状の剥離面を生じたり、といった敗戻品も多く、必ずしも生産性が高い技法といえない。しかし、豊富な素材を担保に、製品の規格性を重視した技法で、一種の技術革新といえる」。森下は、高田の示した工程のうち横長剥片を作出する②について打面調整の存在に言及し、連続する剝離に際して

打点がほぼ中央に留まることを指摘した。

東坂元北岡遺跡出土のサヌカイト製石器は完成品がわずかで、圧倒的多数を剥片、チップが占める。これらの資料が石器生産に伴う資料であることはほぼ確実だろう。なかでも、剥片中に含まれる製作途中品や打面調整剥片は、東坂元北岡遺跡で金山型剥片剥離技術の一部工程を担っていることを示唆する。金山型剥片剥離技術の工程は森下(2002)の模式図でも示されているが、ここでは主に東坂元遺跡出土資料に基づいて工程を復元したい(註1)。

2 金山型剥片剥離技術の工程

(1) 金山型剥片剥離技術工程

工程1 直方体に近いブロック状の原石を厚さ3cm程度の厚さの板状に分割する。これが石核になる。この工程で得られる板状の石核の厚さは、東坂元北岡遺跡などから出土した金山型剥片剥離技術による剥片の打面から底面までの高さと等しい。打製石庖丁では背部調整により剥片剥離時の打面が削除されているため、底面から垂直に立ち上がる高さ + a が板状石核の厚さになる。打製石庖丁の両側縁には自然面の残るものがあるため、板状素材の幅はおむね打製石庖丁の最大幅(15cm程度)に対応するだろう。

工程2-1 板状石核を稜線に沿って割る。接合資料によって本工程を確認できているわけではないが、稜線が剥離の導線となる事例(上峯2013)を参考にすれば、直方体の稜線を取り込める角の部分が最初の剥離箇所になる。長者原遺跡(香川県坂出市)出土資料には、自然面で覆われた原石の稜線を取り込んで剥離された剥片が確認できる(第42図348)。直方体(かそれに近い形状)の素材の角を剥離する本工程の存在を示唆しているといえよう。349の剥片は、サイズからみて板状素材を剥離したものではないが、直方体に近い原石を同様に割っていることを示している。

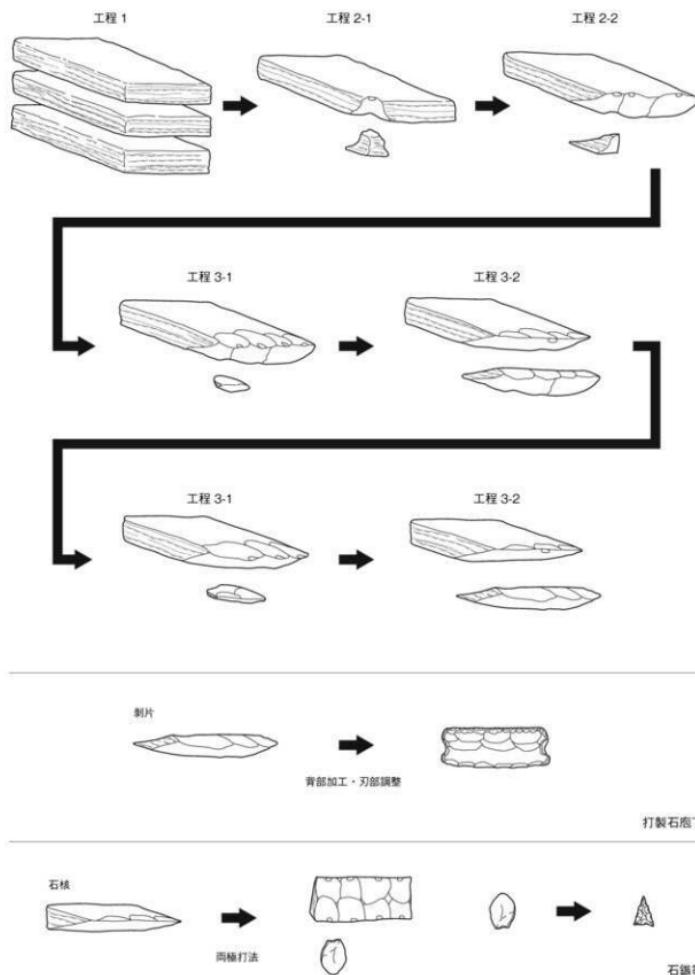
工程2-2 工程2-1で生じた稜線を利用して、板状素材の天井面から加撃して銳角になる作業面を作出する。工程2-2で剥離された剥片も未確認だが、工程3-2で得られる剥片の形状を鑑みれば、本工程の存在は十分に推測可能である。

工程3-1 板状石核上端に調整を施し、打面を整える。東坂元北岡遺跡ではこの工程で生じたと推測される剥片が多量に出土している(192~197など)。この剥片は、A面上半に先行する複数の剥離面をもち、B面上端の狭小な平坦面を打面とする。この打面とA面下半の剥離面の延長線に挟まれる角は角度の小さな鋭角になる(註2)。石理方向はA面下半の剥離面にはほぼ並行する。A面の上端の小さな先行剥離面は、当該剥片の剥離以前に打面調整が連続して行われていることを表している。

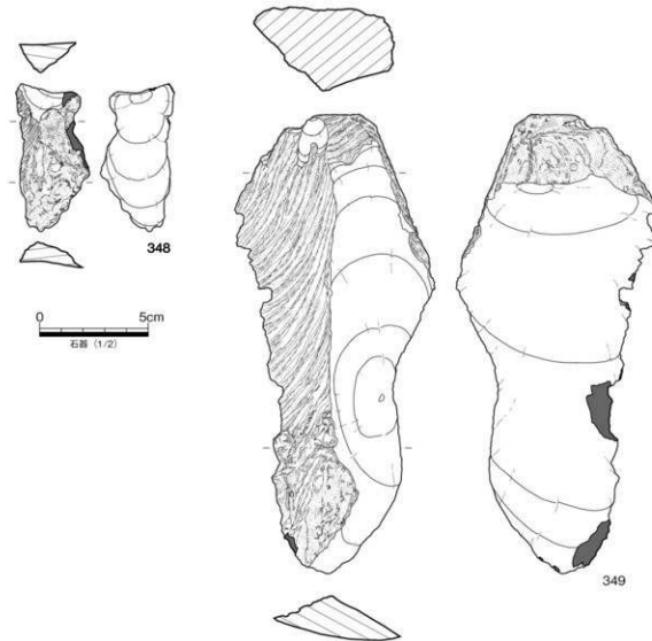
工程3-2 板状素材の中央付近に打撃を加えて横長の剥片を得る。以下、この横長剥片を「金山型剥片」とする(註3)。工程3-1~3-2を繰り返して金山型剥片を複数枚得る。工程3-1の打面調整とともに、必要であれば作業面の調整も行われるだろう。

(2) 打製石庖丁製作工程

金山型剥片は長軸10~15cm、短軸5~8cm程度と推測される。この剥片を打製石庖丁に加工する場合、銳角の剥片末端が刃部、打点側が背部となる。金山型剥片は直接打法による剥片のためバルブが発達するが、石庖丁の背部に隆起があると手で握る際に不都合が生じることもあるだろう。このため、



第 41 図 金山型剥片剥離技術模式図



第42図 長者原遺跡出土の角の棱線を取り込んだ剥片

打製石庖丁を目指す金山型剥片の加工ではバルブの除去が必要になる。併せて背部の形状を整える作業も行われるようだ。背部にバルブが残る石庖丁も稀にみられるが、これはバルブの発達度合が小さいことに起因すると思われる。さらに、左右の抉り形成と刃部調整が施されて打製石庖丁となる。

(3) 残核処理

工程3-1～3-2の繰り返しの後に残った石核(残核)を、両極打法で加撃して薄く打面の発達しない剥片などを得る。台石(330)に残る深い長楕円形の窪みは、台石上に設置された石核に打撃が加えられた痕跡と思われる(註4)。

註

- 1 工程復元にあたっては、朝井琢也・上峯篤史・森下英治各氏から教示を受けた。
- 2 打面と古い剥離面が平行する資料もある。こういった資料がどういう工程で出現するのかを明らかにすることは今後の課題である。
- 3 金山型剥片削離技術による目的剥片を指す。森下はこの剥片を「金山型横長剥片」としたが、横長剥片にはばば既定されるため、ここでは「横長」を取って金山型剥片と呼ぶ。
- 4 残核処理と台石の使用方法は、朝井琢也・上峯篤史両氏の教示による。

第2節 東坂元北岡遺跡における石器生産

1 金山型剥片剝離技術による打製石庖丁の生産

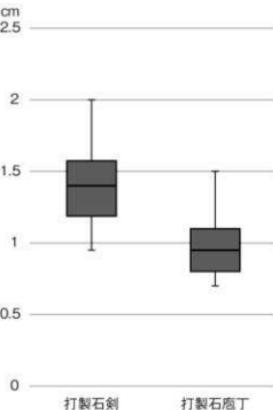
東坂元北岡遺跡では、工程 3-1 に伴う打面調整剥片が多量に出土していることから、第1節で復元した金山型剥片剝離技術の一連の工程のうち、工程 3-1 以降を行っていることが確実である。工程 2-1 で生じる直方体の角と棱線を打ち欠いた可能性のある剥片もわずかながら存在することから、東坂元北岡遺跡で担っていたのは工程 2-1 にまでさかのばるかもしれない。また、工程 3-2 で作出された金山型剥片から打製石庖丁への加工途中で折損した資料が複数出土している。これらの資料は東坂元北岡遺跡で打製石庖丁を完成させる作業を行っていたことを示している。東坂元北岡遺跡では、板状石核、または板状石核の作業面を作出した状態のものが持ち込まれ、打製石庖丁を仕上げるまでの工程がなされているようだ。

2 その他の石器生産

(1) 打製石剣の生産

岡山県南部では、打製石庖丁を転用した打製石剣が少なくないうえ、打製石庖丁の素材となる金山型剥片が打製石剣に加工された可能性も指摘されている。このため、打製石剣の製作については「打製石庖丁の存在を前提として、そこから派生する技術体系」と考えられている（高田 2001）。

東坂元北岡遺跡では製作途中品も複数出土していることから (154 ~ 156、268・269・298・299)、打製石剣の製作もほぼ確実である。いずれも、背面、腹面に周縁調整以前の剝離面が多数認められ、形状を整える段階で厚みを減ずる行為も行われている。それにもかかわらず、打製石剣は金山型剥片を素材とする打製石庖丁よりも厚い傾向にある（第43図）。東坂元北岡遺跡に限れば、打製石庖丁、打製石剣それぞれの素材となる剥片の厚さには差が認められるのである。打製石剣製作にあたり、石庖丁を目的とする剥片よりも厚い金山型剥片を素材とするのか、金山型剥片とは異なる剥片を素材とするのかは今後の検討課題だが、岡山県南部の打製石剣と素材のあり方が異なる点には言及できそうだ。



第43図 打製石剣と打製石庖丁の厚さ

(2) スクレイパーの生産

平面形が台形で、広幅の剥片末端を刃部とし、対向する狭幅の刃を背部とするスクレイパーが複数出土している（174・175・179・180・329）。このスクレイパーの両側縁は折り取られているケースが目立つ。石理方向が背面、腹面どちらかに沿わず、刃部に対して直交することから、これらのスクレイパーの素材は金山型剥片ではないようだ。工程の復元にまでいたらなかつたが、こういったスクレイパーを念頭に置いた素材剥片獲得技術を東坂元北岡遺跡が有していた蓋然性は高い。

(3) 石鎌・石錐の生産

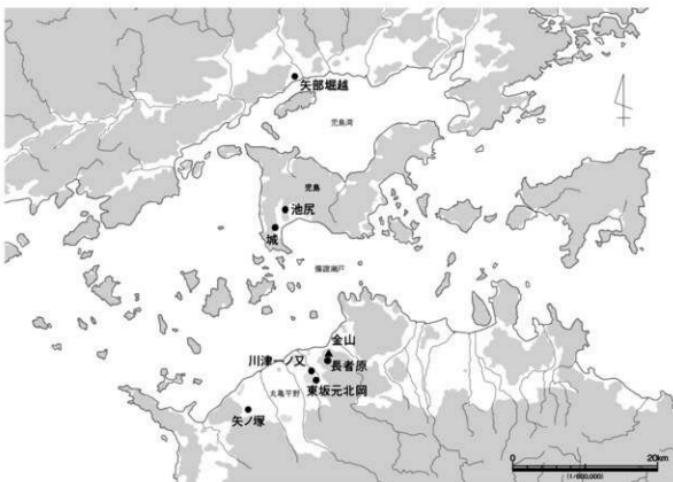
点数は多くないが、石鎌や石錐の製作途中品も出土している。これら小型品の素材は両極打法によつて得られる剥片とみられ（上峰 2012）、東坂元北岡遺跡では両極打法での剥片作成と、石鎌・石錐の生産が確実である。第1節で触れたように、金山型剥片剥ぎ取り後の残核は両極打法の石核にもなったとみられるうえ、それ以外の両極打法の石核も存在する。これらの石核から得られる剥片を元に石鎌や石錐が製作されていたのだろう。

第3節 原産地金山と周辺地域におけるサヌカイト製石器の状況

1 サヌカイトの移動と加工

第2節では、東坂元北岡遺跡において、工程1で得られた板状石核、または板状石核に多少の加工を施したもの（工程2-1を終えたもの）を持ち込んで打製石庵丁を生産し、加えて打製石剣やスクレイパー、石鎌、石錐も製作していたことを明らかにした。東坂元北岡遺跡に搬入された板状石核は、原産地の金山付近で加工された蓋然性が高い。一方、東坂元北岡遺跡で生産された打製石庵丁や打製石剣などの完成品は別の集落に運ばれたと考えるのが自然だ。打製石庵丁や打製石剣を受け入れる集落では、完成品を再加工することはあっても、素材から完成品にまで仕上げるケースは少ないと考えられる。すなわち、原石から完成品にいたるまでには、サヌカイトが移動しながら複数の集落で加工され、さらには完成品の再加工も別の集落によってなされることになる。この場合、持ち込んだサヌカイトの状態と加工の目的によっては、集落ごとに剥離技術が異なる可能性もある。本節では、原産地である金山の遺跡と、原産地から離れた複数の遺跡から出土したサヌカイト製石器を検討することで、それぞれの遺跡における剥離技術の相対的なあり方を確認しておきたい。

本節での検討対象資料として、東坂元北岡遺跡に加えて、長者原遺跡、川津一ノ又遺跡、矢ノ塚遺跡、城遺跡、池尻遺跡、矢部堀越遺跡出土のサヌカイト製石器を取り上げる。これらの遺跡からは剥片やチップを含む資料がかなりの点数で出土しており、恵まれた資料数を活かしての定量分析が可能と考えたためである。小剥片も検討対象とするが、こういった資料は報告書に掲載されていない場合が多いため、所蔵機関の協力を得て未報告資料の剥片の数量・重量を計測した（註1）。以下、検討対象遺跡の概要を記す。



第44図 関連遺跡位置図

長者原遺跡（香川県坂出市）

金山南麓中腹の谷に挟まれた緩斜面に立地する。遺構は堅穴住居と推測される弧状の掘り込みが確認されているのみである。遺構に伴わない包含層から多量のサスカイト製石器と少量の弥生土器が出土している。弥生土器は中期後葉（中期Ⅲ）に限られるため、石器も同時期と考えていいだろう。

川津一ノ又遺跡（香川県坂出市）

丸龜平野東部を流下する大東川左岸、金山から南西約1.5kmの場所に位置する。一角に弥生時代中期中葉（中期Ⅱ）の堅穴住居数棟と掘立柱建物が集中し、その周間に走る溝（SD59/100）や近傍の低地部から多量のサスカイト製石器が出土している。後期後半の資料を除けば、弥生土器の時期は中期中葉に限定されるため、石器は中期中葉の遺構に伴うとみて間違いないだろう。

矢ノ塚遺跡（香川県善通寺市）

丸龜平野北西部、金山から約14kmの場所に位置する。弥生時代中期中葉～後葉（中期Ⅱ～Ⅲ）の集落で、堅穴住居と掘立柱建物が点在する。サスカイト製石器は遺構や包含層からまんべんなく出土している。

城遺跡（岡山県倉敷市）

備讃瀬戸北岸、児島南西部の小高い丘陵上に立地する集落で、金山からの直線距離は約20kmである。尾根上を中心に弥生時代中期後葉（中期Ⅲ）の堅穴住居が展開する。包含層からサスカイト製石器が多く

く出土している。

池尻遺跡（岡山県倉敷市）

児島西部、現在の児島市街地に向かって開ける谷の奥部に位置する。確認されている遺構はわずかだが、包含層から多量の弥生土器とサヌカイト製石器が出土しており、付近に集落があるのはほぼ確実である。弥生土器は中期後葉（中期Ⅲ）を主体とし、中期中葉（中期Ⅱ）までの幅をもつ。弥生土器はこの時期に限定されるため、石器の時期も中期後葉を中心とする中期中葉～後葉とみていいただろう。

矢部堀越遺跡（岡山県倉敷市）

児島湾北岸の標高 20m 前後の丘陵斜面に立地する集落である。20 棟近く堅穴住居が確認されており、遺構や包含層から多くの石器と土器が出土している。土器は中期後葉（中期Ⅲ）であるため、石器も同時期とみたい。

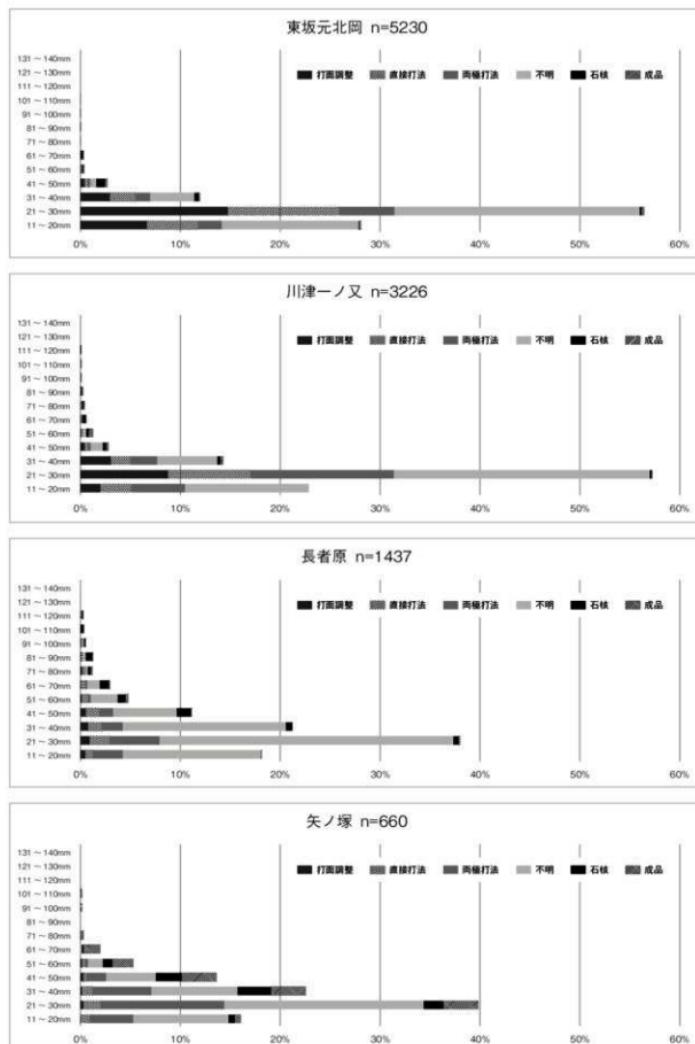
2 遺跡間における石器のサイズと打撃法の比較

(I) サイズと打撃法の比較

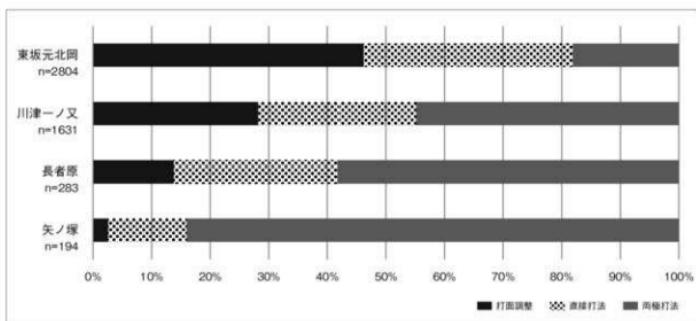
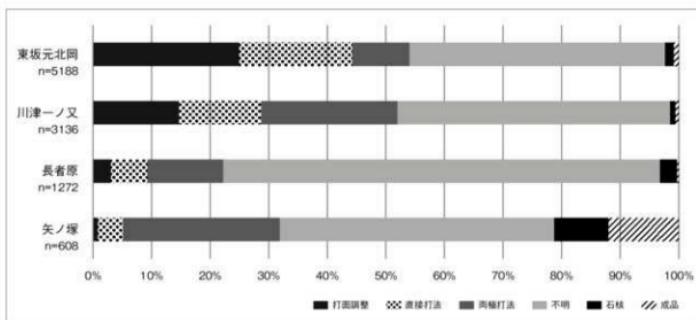
遺跡間での石器製作手法（石器、石材への加工手法）の差異をみるために、各遺跡から出土したサヌカイト製石器の完成品、製作途中品、剥片、問わず分析対象とした。分析対象の石器をまず、「剥片」、「石核」、「成品」に分類した。剥片については、上峯（2012）に示された分類と打撃法の同定の図に基づいて、「直接打法」と「両極打法」に細分を試みたが、打面が残っていない、または末端形状が判明しないものについては「不明」とした。「直接打法」による剥片のうち、金山型剥片剥離技術の工程 3-1 によって生じたと推測される小剥片を「打面調整」として抽出した。「成品」には、石庖丁や石鎌などの定型化した道具の完成品に加えて、製作途中品や加工痕のある剥片、使用痕のある剥片も含める。なお、長さ 10mm 以下の剥片については検討対象から外した。小剥片やチップは調査精度によっては見落とされる場合もありうるが、こういった調査成果物と、土壤の水洗選別により得られた多量の小剥片やチップを有する資料とを比較しても有意なデータは得られない。以上の状況をなるべく回避し、発掘調査により出土した現存資料をより近い条件で扱うため、便宜上 10mm を超える資料について検討する。

第 45 図は石器の 10mm 単位での度数分布の割合を示したグラフである。度数ごとに分類の内訳も表している。東坂元北岡遺跡と川津一ノ又遺跡では 21 ~ 30mm の石器が 50% 以上を占め、11 ~ 20mm も含めると 80% 程度になる。東坂元北岡遺跡では 30mm 以下の 4 割以上を「打面調整」と「直接打法」で占める。長者原遺跡でも 21 ~ 30mm の割合が最多ではあるが、比率は 40% 以下にとどまる。東坂元北岡遺跡や川津一ノ又遺跡に比べて 31mm 以上のサイズが多く、71mm 以上の石器も少量ながら存在する。矢ノ塚遺跡も東坂元北岡遺跡や川津一ノ又遺跡に比べて 21 ~ 30mm のサイズが少ない点など、11 ~ 50mm では長者原遺跡に近い度数分布を示す。一方、分類別の内訳を見るとき、矢ノ塚遺跡では長者原遺跡に比べて「成品」の比率が高く、両極打法の占める割合もやや高い。

次に、遺跡内で行われた打法・工程をより明確にするため、11 ~ 50mm の資料に限って石器の種類別比率を出した。サイズが大きなものは、「剥片」や「石核」とはいえ、現状（出土状態）が遺跡に持ち込まれた状態と同一の可能性も十分にあり、そうであればこれらは遺跡内では加工されていないこと



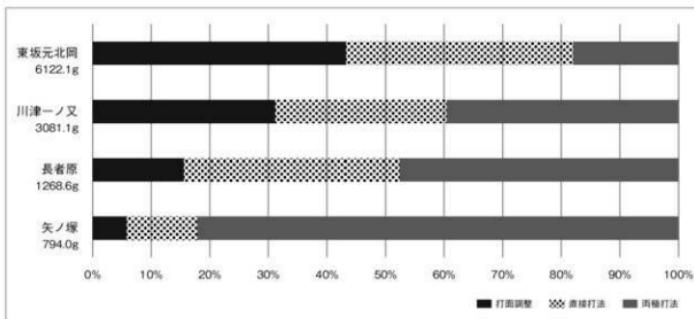
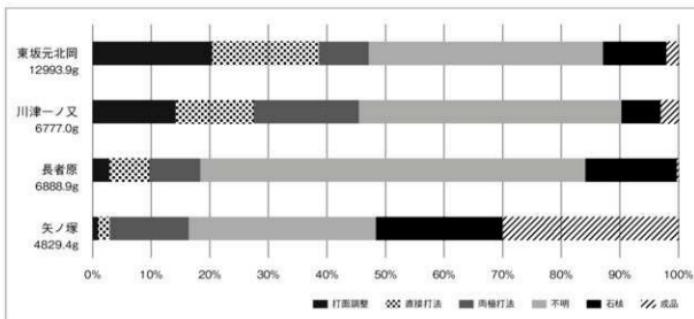
第45図 石器サイズ別数量比(11mm～)



第46図 石器分類別数量比 (11 ~ 50mm)

になる。この可能性をなるべく排除するために、対象資料の線引きを 50mm とした。10mm 以下の資料を扱わないのは前述のことおりである。この方針に基づいて東坂元北岡、川津一ノ又、長者原、矢ノ塚の各遺跡の内訳を示したのが第46図のグラフである。上段はすべての分類ごとの比率、下段は遺跡内の打法の特徴を鮮明にするために「不明」、「石核」、「成品」を除いた比率のグラフになっている。上段から順に見てみよう。まず、4 遺跡とも「不明」が多数を占めている。東坂元北岡、川津一ノ又、矢ノ塚の各遺跡では 40% 前後だが、長者原遺跡では 70% 強と「不明」が突出している。また、矢ノ塚遺跡の「石核」、「成品」の比率の高さが目立ち、長者原遺跡の「石核」も東坂元北岡遺跡や川津一ノ又遺跡よりはやや多い。「成品」の占める割合は長者原遺跡がもっとも少ない。下段では、東坂元北岡遺跡、川津一ノ又遺跡、長者原遺跡、矢ノ塚遺跡の順に「打面調整」、「直接打法」の比率が減少し、「両極打法」の比率が増加する。「直接打法」に比べて「打面調整」のほうが遺跡間の差異はより顕著である。

さらに、数量に加えて重量でも同様の比較を試みた(第47図)。重量比較では「石核」、「成品」の割合が大きくなっているが(上段)、これは、「石核」や「成品」1 点あたりの重量が「打面調整」、「両極



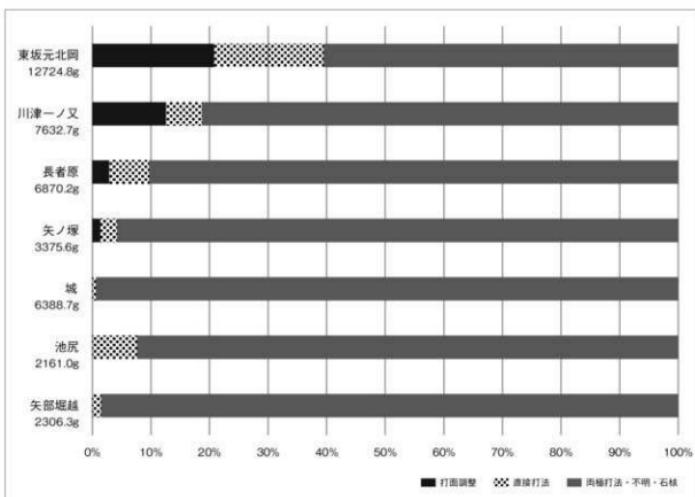
第47図 石器分類別重量比(11~50mm) 1

などに比べて重い（サイズが大きい）ためだろう。これに起因するのか、長者原遺跡における「成品」比率の少なさは重量分析のほうが顕著に表れている。ただ、矢ノ塚遺跡での「石核」、「成品」比率の高さ、長者原遺跡での「石核」がやや多い点は、数量分析の傾向と似ている。下段にいたっては、「打面調整」、「直接打法」、「両極打法」のサイズと重量に差がないためか、数量比較のグラフ（第46図下段）とかなり近い。

(2) 打面調整剝片と直接打法による剝片の比較

第48図は、これまで分析した丸亀平野の4遺跡に、備讃瀬戸北岸に位置する城遺跡、池尻遺跡、矢部堀越遺跡を加えたグラフである（註2）。このグラフでは11~50mmの資料についての「打面調整」、「直接打法」、「両極打法」、「不明」、「石核」の重量比を表している。

備讃瀬戸北岸の3遺跡では「打面調整」は確認できなかった。また、「直接打法」の比率は池尻遺跡が長者原遺跡に迫るもの、城遺跡や矢部堀越遺跡では矢ノ塚遺跡を下回る数%にしかすぎない。池



第48図 石器分類別重量比 (11 ~ 50mm) 2

尻遺跡の評価は難しいが、他の2遺跡の状況を踏まえれば、備讃瀬戸北岸では金山型剥片剥離技術は用いられず、直接打法もさほど認められないと言えそうだ。

註

- 分析対象資料は保管資料の一部であるが、遺跡によっては1/2程度の資料を計測しており、おおまかな傾向は把握できると考える。以下に対象とした遺構名を記しておく。 東坂元北岡遺跡-SR01報告・未報告資料 / 川津一ノ又遺跡-SD59/100未報告資料 / 長者原遺跡：包含層未報告資料 / 矢ノ塙遺跡-SD8503b・85101・85102・85124報告資料(1/2)・未報告資料 / 城遺跡：包含層と推測される未報告資料 / 池尻遺跡：倉敷市教育委員会調査南区包含層、南区複疊 / 矢部塙越遺跡：包含層を中心とする資料
- 備讃瀬戸北岸の3遺跡については、各所蔵機関の協力を得て乗松が計測した。今回は「打面調整」、「直接打法」の剥片の抽出にとどまったため、「両椎打法」、「不明」、「石核」は分類できておらず、一部「成品」が含まれる可能性も否定できない。

第4節 中繼地としての東坂元北岡遺跡

1 遺跡の類型

本節では、第3節を踏まえた他遺跡との比較から東坂元北岡遺跡の評価を試みる。

分析した8遺跡は、石器の分類やサイズ、比率などからa～fの類型に分けられ、原産地である金山との位置関係も念頭に置きながら、それぞれの性格を読み解いてみたい。

類型	遺跡	石器のサイズ	11～50mm の比	11～50mm の「打面調整」「直接打法」「両極打法」の重量比	「成品」を除く重量比
a	東坂元北岡	・21～30mm の比率が突出して高い。	・c・d に比べて「不明」「石核」「成品」の比率は低く、打法の判明する剝片で50%前後を占める。	・「打面調整」の比率が高い。 ・「打面調整」「直接打法」で80%強を占める。	・「打面調整」「直接打法」で40%弱を占める。 ・「打面調整」が20%強を占める。
b	川津一ノ又	・21～30mm の比率が突出して高い。	・c・d に比べて「不明」「石核」「成品」の比率は低く、打法の判明する剝片で50%前後を占める。	・「打面調整」「直接打法」で60%強を占める。	・「打面調整」「直接打法」で20%弱を占める。
c	長者原	・21～30mm の比率が高い。 ・31～40mm の比率も20%強である。 ・71～140mm の個体がa・b・d に比べると多い。	・a・b・d に比べて「不明」の比率が高い。 ・a・b に比べて「石核」「成品」の比率が高い。	・a ほどではないが「打面調整」の比率が高い。 ・「打面調整」「直接打法」で半数前後である。	・「打面調整」「直接打法」は10%弱である。 ・「打面調整」は2%前後にとどまる。
d	矢ノ塚	・21～30mm の比率が高い。 ・31～40mm の比率も20%強ある。	・a・b・c に比べて「成品」の比率が高い。 ・a・b・c に比べて「石核」の比率が高い。	・「打面調整」は少量。 ・「打面調整」と「直接打法」を合わせても20%弱にとどまる。 ・「両極打法」が80%以上を占める。	・「打面調整」「直接打法」は4%前後である。 ・「打面調整」は1%前後にとどまる。
e	城、矢部堀越				・「打面調整」はない。 ・「直接打法」は8%程度である。
f	池尻				・「打面調整」はない。 ・「直接打法」は1%程度にとどまる。

第2表 遺跡類型

a 東坂元北岡遺跡

東坂元北岡遺跡では、板状石核から金山型剝片剝離技術を用いて石庖丁を生産し、さらには打製石剣やスクリイバー、石鎚なども製作もしている（第2節）。加えて、高比率の「打面調整」は金山型剝片の刺ぎ取り（工程を進めた打製石庖丁の仕上げも含む）を高い頻度で行っていることを示している。両極打法から石鎚や石錐への加工も復元したが、「両極打法」の比率の低さから、b～d に比べればその生産割合は限られるものと思われる。

このような、金山産サヌカイトの板状剝片（やそれに近い状態）入手し、主に金山型剝片剝離技術を用いて成品や金山型剝片に加工する集落をaとする。出土した石庖丁などの成品にはほとんど使用痕（打製石庖丁の磨耗など）が認められないことから、加工された石器の多くは別の集落に搬出されるものと考えたい。

b 川津一ノ又遺跡

aほどではないが、川津一ノ又遺跡における「打面調整」の一定量の存在は、金山型剝片剝離技術による加工を示唆している。それを裏付けるように打製石庖丁の失敗品とみられる剝片も散見される。工程3-1～3-2、さらには打製石庖丁の完成までを行っていたことは確実である。aを参考にすれば工程2-1～2-2もありうる。一方、「両極打法」はaよりも多く、バルブの発達しない剝片を素材とする石鎚などの生産もある程度行っていたと考えられる。

金山型剝片やそれを素材とする成品を生産しているのがbの集落である。サヌカイトは原石ではなく、板状素材程度に加工したものを持ち込んでいる可能性を考えておきたい。また、両極打法によって得られる剝片も成品に加工していた。ここで生産していた石器が自らの集落で使用されるものか、他へ持ち

出される目的なのかの断定は難しい。川津一ノ又遺跡では居住痕跡が確認できているため前者に限られる可能性もあるが、無理にどちらかに当てはめるよりも、石器生産の目的を並存してとらえるほうが自然だろう。

c 長者原遺跡

長者原遺跡はサヌカイト原産地である金山の一角に位置しており、容易に入手できる原石から加工を始めていることは疑いないだろう。71mm以上のサイズの大きな石器が多いのは、素直に原産地ならではの現象ととらえたい。a・b・dに比べて「不明」の割合が圧倒的に多いのは、この原石からの加工(たとえば、板状素材に分割できるまでの整形など)が理由として考えられる。多くはないが「打面調整」の存在や、折損した打製石庵丁の製作途中品の出土からは、金山型剥片剥離技術の全工程を行っているといえる。「不明・石核・成品」を除くと50%前後を占める「両極打法」は、一定量の両極打法による剥片剥離も推測させる。

原産地に位置するcは、金山型剥片剥離技術の全工程から成品の生産までを担い、金山型剥片剥離技術以外の手法による加工もある程度行う集落である。原産地での加工ということから、生産された石器のほとんどは他集落に搬出されるとみる。

d 矢ノ塚遺跡

a～cに比べて比率の高さがやや目立つ「石核」は、ほとんどが両極打法の石核(いわゆる「楔形石器」を含む)である。この点は「両極打法」の圧倒的多数と相関関係にあり、両極打法による加工が主体である。わずかに「打面調整」も認められることから、金山型剥片剥離技術の一部工程も行われていないわけではないが、頻度は限られるだろう。「成品」が多く出土しているが、金山型剥片を素材とする打製石庵丁などは外から持ち込まれた蓋然性が高い。打製石庵丁を両極打法の石核とする例もまま見受けられる。

dは、他集落から成品や剥片を持ち込み、必要な場合にはこれらを石核とする両極打法での加工を主体とする集落である。金山型剥片剥離技術については限定的に用いられている。

e 城遺跡 矢部堀越遺跡

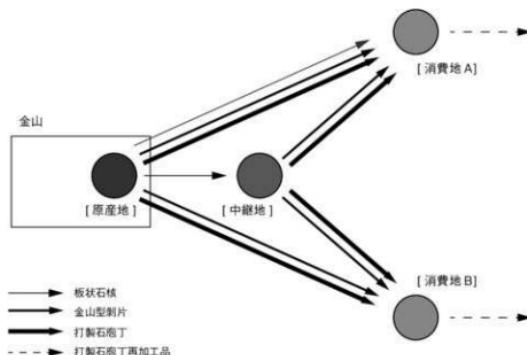
城遺跡、矢部堀越遺跡で「打面調整」が認められず、「直接打法」比率も少ないので、金山型剥片剥離技術が行われていないことを示している。「両極打法」がどの程度を占めるのかは不明だが、おそらくは両極打法による加工が主になっているのだろう。

搬入した成品や剥片を加工するにあたり、金山型剥片剥離技術を用いないのがeの集落になる。

f 池尻遺跡

eと同様に「打面調整」がないため金山型剥片剥離技術は行われていないだろう。「直接打法」の比率はd・e(「打面調整」含む)よりも多い。「両極打法・不明・石核」の比率が不明ではあるが、eに比べると両極打法への傾斜が少ないのかもしれない。

fの集落でも金山型剥片剥離技術は用いられないが、eよりも直接打法の志向性が高い。



第49図 金山産サヌカイト製石器流通模式図

2 金山産サヌカイト製石器の流通

金山産サヌカイト製石器、特に金山型剥片剥離技術による打製石庖丁（註1）の加工と流通という視点から遺跡の類型は次のようにまとめることができる。

c : [原産地] / a・b : [中繼地] / d : [消費地 A] / e・f : [消費地 B]

[原産地]は金山に位置する集落で、原石から成品までの加工を行う。成品はもちろん、加工途中の金山型剥片などを搬出している可能性も十分考えられる。百間川兼基遺跡（岡山市）や玉津田中遺跡では、背部と刃部に加工が施され、抉りが入らない状態の「打製石庖丁」が数点出土している。[中繼地]に位置付けられる東坂元北岡遺跡出土の失敗品の状況も加味して考慮すると、金山周辺の[原産地]や[中繼地]で生産される打製石庖丁は、抉りを伴って完成品にいたると推測できる。そうであれば、完成品手前の状態のものも流通しているとみたほうがよい（註2）。

[中繼地]は原石から加工が進んだ板状素材やそれに類する状態のものを[原産地]から入手し、金山型剥片剥離技術や他の手法を用いて完成品にまで仕上げる。生産品は、自らの集落で消費される場合もあるが、多くは他の集落に搬出されるのだろう。[原産地]で述べたように、加工途中の金山型剥片などを流通ルートに乗せている可能性もある。

[消費地]では基本的に[原産地]や[中繼地]での生産品を受け入れて使用する。受け入れた石器を再加工し、さらに流通させていることもありうる（高田 2001）。限定的だが金山型剥片剥離技術を伴うのが[消費地 A]、伴わないのが[消費地 B]である。

以上のことから、東坂元北岡遺跡は金山型剥片剥離技術に傾斜した[中繼地]と評価できる。こういった集落はこれまで明らかにされておらず、東坂元北岡遺跡で確認されたサヌカイト製石器は、弥生時代中期中葉～後葉における金山産サヌカイト製石器の生産と流通について一歩踏み込んで理解できる良好

な資料と評価できよう。

註

- 1 第2節で触れたように、東坂元北岡道路では打製石剣の素材に金山型剣片を使用していない可能性もあるため、打製石底丁を基本とした流通状況を述べることとする。
- 2 金山型剣片が出土されていたのか、金山型剣片に刃部調整と背部調整（またはどちらかのみ）が施されて流通していたのかは不明である。調整前の金山型剣片のほうが汎用性があるとみれば、前者の流通が主だったとも考えられる。

参考文献

- 上巣房史 2012 「縄文・弥生時代石器研究の技術論的転回」『雄山閣』
- 上巣房史 2013 「縄文・弥生時代の石器製作における剣片形状の予測と制御」『立命館大学考古学論集 VI』田畠晴吾先生定年退職記念論集
- 高田浩司 2001 「吉備における石器の生産と流通」『古代吉備』23
- 乗松真也 2006 「弥生時代中期における漁業システムの変革と「高地性集落」」『古代文化』58-2
- 藤田 淳 1996 「石器」兵庫県教育委員会編『兵庫県埋蔵文化財発掘調査報告 135-5 玉津田中遺跡—第5分冊一』
- 森下英治 2002 「石器の生産と流通―弥生器の概要と金山サヌカイトー」『第16回古代学会四国支部研究大会 弥生時代開幕未・中期初頭の動態―研究発表旨一』
- 森下英治 2005 「弥生時代における金山サヌカイト原産地の利用状況について―弥生時代中期における金山型剣片剥離技術出現の意義―」『第19回古代学会四国支部研究大会 原産地遺跡から時代を読む 発表資料集』

発掘調査報告書

- 青ノ山遺跡：丸亀市教育委員会編 1984 「青ノ山 8・9号墳発掘調査報告書—香川県丸亀市青ノ山山頂所在の後期、終末期古墳—」
- 池尻南遺跡：間壁斎子 1969 「丸島・上之町保育園内遺跡」『倉敷考古館研究集報 6 / 倉敷埋蔵文化財センター編 1997 「池尻遺跡 倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第6集』
- 川津一ノ又遺跡：香川県埋蔵文化財調査センター編 1997 「中小河津大東川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告川津一ノ又遺跡」 / 香川県埋蔵文化財調査センター編 1997 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 26 号 川津一ノ又遺跡-1」 / 香川県埋蔵文化財調査センター編 1998 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 30 号 川津一ノ又遺跡 II」
- 川津川西遺跡：香川県埋蔵文化財調査センター編 1990 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告第 33 号 川津川西遺跡・飯山一本松遺跡」 / 香川県埋蔵文化財調査センター編 2000 「国道 438 号川津橋樋櫻堂改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告川津川西遺跡」
- 川津六反地遺跡：香川県埋蔵文化財調査センター編 2014 「国道 438 号道路改良工事・県道富熊字多津線道路改良工事・城山川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告川津六反地遺跡」
- 川津東山田遺跡：香川県埋蔵文化財調査センター編 2001 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 38 号 川津東山田遺跡」 / 香川県埋蔵文化財調査センター編 2002 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 41 号 川津東山田遺跡 II」
- 北岸南遺跡：香川県埋蔵文化財センター編 2012 「香川県埋蔵文化財センター一年報 平成 23 年度」
- 城遺跡：岡山県教育委員会編 1977 「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(19) 倉敷市(児島)城遺跡発掘調査報告—県立児島高校移転用地造成に伴う発掘調査—」
- 郡家大林上遺跡：香川県埋蔵文化財調査センター編 1998 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 17 号 郡家大林上遺跡」
- 長者原遺跡：香川県教育委員会編 1979 「香川県埋蔵文化財調査報告 一般国道 11 号坂出・丸龜バイパス建設に伴う」 / 香川県教育委員会編 1979 「香川県埋蔵文化財調査年報」
- 玉津田中遺跡：兵庫県教育委員会編 1996 「玉津田中遺跡」
- 飯山北土原遺跡(本郷)：東坂元秋常遺跡：香川県埋蔵文化財センター編 2008 「国道 438 号道路改築事業(飯山工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 1 号 東坂元秋常遺跡 I」 / 香川県埋蔵文化財センター編 2012 「国道 438 号道路改築事業(飯山工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 3 号 東坂元秋常遺跡 II」
- 東坂元三ノ池遺跡：香川県埋蔵文化財センター編 2008 「国道 438 号道路改築事業(飯山工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 2 号 東坂元三ノ池遺跡」
- 矢部塙越遺跡：岡山県古代吉備文化財センター編 1993 「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 R2 矢部古墳群 A・矢部古墳群 B・矢部大ぐろ遺跡・矢部奥田遺跡・矢部塙越遺跡・山陽自動車道建設に伴う発掘調査 6」

調査区	遺構名	調査時遺構名	時期	時期根拠
1 区	SR01	SD01	最上層：8c 後葉、上層～最下層：弥生中期中葉	出土遺物
1 区	SD02	SD02	弥生中期中葉	出土遺物
1 区	SX01	SX01	弥生中期中葉	出土遺物
2 区	SD01	SD01	弥生中期中葉	出土遺物
2 区	SD02	SD02	弥生中期中葉	出土遺物
2 区	SD03	SD03	～弥生中期中葉	SB11・12に先行
2 区	SK01	SK01	13c 中葉～後葉	SK18と理上類似
2 区	SK02	SK02	13c 中葉～後葉	SK18と理上類似
2 区	SK03	SK03	13c 中葉～後葉	SK18と理上類似
2 区	SK04	SK04	13c 中葉～後葉	SK18と理上類似
2 区	SK05	SK05	13c 中葉～後葉	SK18と理上類似
2 区	SK06	SK06	13c 中葉～後葉	SK18と理上類似
2 区	SK07	SK07	13c 中葉～後葉	SK18と理上類似
2 区	SK08	SK08	13c 中葉～後葉	出土遺物
2 区	SK09	SK09	13c 中葉～後葉	SK18と理上類似
2 区	SP101	SP01	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP102	SP02	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP103	SP03	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP104	SP04	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP105	SP05	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP106	SP06	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP107	SP07	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP108	SP08	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP109	SP09	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP110	SP10	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP111	SP11	13c 末～14c 前葉	出土遺物
2 区	SP112	SP12	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP113	SP13	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP114	SP14	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP117	SP17	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP119	SP19	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP120	SP20	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP121	SP21	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP122	SP22	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP123	SP23	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP124	SP24	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP125	SP25	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP126	SP26	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP127	SP27	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP130	SP30	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP131	SP31	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP132	SP32	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SP133	SP33	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
2 区	SR11	SR01	弥生中期中葉	出土遺物
2 区	SR12	SR02	弥生中期中葉	出土遺物
3 区	SD01	SD01	13c 中葉～後葉	出土遺物
3 区	SD02	SD02	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
3 区	SD03	SD03	～弥生中期中葉	SM21に先行
3 区	SD04	SD04	13c 中葉～後葉	出土遺物
3 区	SD05	SD05	弥生中期中葉	出土遺物
3 区	SD06	SD06	13c 中葉～後葉	SD24と関連
3 区	SD07	SD07	13c 中葉～後葉	SD24と関連
3 区	SA21	SA01	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
3 区	SP201	SP01	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
3 区	SP202	SP02	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
3 区	SP203	SP03	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
3 区	SP204	SP04	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
3 区	SP205	SP05	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
3 区	SP206	SP06	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
3 区	SP207	SP07	13c 中葉～14c 前葉？	周辺遺構
3 区	SA21	SA01	弥生中期中葉	出土遺物
3 区	SX22	SX02	？	出土遺物

第3表 東坂元北岡遺跡 遺構一覧表

番号	調査区名	地物名	種類	調査(外)	調整(内)	色調(外)・輪	色調(内)・輪	石英 長石	赤色粒 角閃石	雲母 斜長石	砂粒	口径 cm	厚高 cm	底径 cm	その他の 現象	備考
2	1区	SD02	休憩土器	壺	ヨコナガ?	ヨリYR2'2に,5±1,黄橙	ヨリYR2'2に,5±1,黄橙	相・多	相・多	相・多	相・少	(186)	1.8	未調		
3	1区	SD02	休憩土器	壺	ヨコナガ?	ヨリYR3'3に,5±1,黄橙	ヨリYR3'3に,5±1,黄橙	相・多	相・多	相・多	相・多	(199)	1.8	未調		
4	2区	SD01	休憩土器	壺	ヨコナガ?	7.5YR8'6灰黄輪	7.5YR8'6灰黄輪	中・差	中・差	中・差	中・少	(122)	1.8	未調		
5	2区	SD01	休憩土器	壺	ヨコナガ?	7.5YR8'6灰黄輪	7.5YR8'6灰黄輪	中・差	中・差	中・差	中・少	(119)	1.8	未調		
6	2区	SD01	休憩土器	壺	ヨコナガ?	7.5YR8'6灰黄輪	7.5YR8'6灰黄輪	中・差	中・差	中・差	中・少	(111)	1.8	未調		
7	2区	SD01	休憩土器	壺	ヨコナガ?	7.5YR7'2に,5±1,黄橙	7.5YR7'2に,5±1,黄橙	中・差	中・差	中・差	中・少	(153)	1.8	未調		
8	2区	SD01	休憩土器	壺	ヨコナガ?	7.5YR5'4に,5±1,黄橙	7.5YR5'4に,5±1,黄橙	中・差	中・差	中・差	中・少	(182)	1.8	未調		
9	2区	SD01	休憩土器	壺	ヨコナガ?	7.5YR5'4に,5±1,黄橙	7.5YR5'4に,5±1,黄橙	中・差	中・差	中・差	中・少	(231)	1.8	未調		
10	2区	SD01	休憩土器	壺	ヨコナガ?	7.5YR6'1灰灰	7.5YR6'1灰灰	中・差	中・差	中・差	中・少	(230)	1.8	未調		
11	2区	SD02	休憩土器	壺	ヨコナガ?	7.5YR7'3に,5±1,黄橙	7.5YR7'3に,5±1,黄橙	中・差	中・差	中・差	中・少	(229)	1.8	未調		
12	2区	SD02	休憩土器	壺	ヨコナガ?	7.5YR7'3に,5±1,黄橙	7.5YR7'3に,5±1,黄橙	中・差	中・差	中・差	中・少	(228)	1.8	未調		
13	2区	SD02	休憩土器	壺	ヨコナガ?	7.5YR6'2灰黄輪	7.5YR6'2灰黄輪	中・差	中・差	中・差	中・少	(227)	1.8	未調		
14	2区	SD02	休憩土器	壺	ヨコナガ?	7.5YR4'2灰黄輪	7.5YR4'2灰黄輪	中・差	中・差	中・差	中・少	(226)	1.8	未調		
15	2区	SD02	休憩土器	壺	ヨコナガ?	ヨリYR2'2に,5±1,黄橙	ヨリYR2'2に,5±1,黄橙	中・差	中・差	中・差	中・少	(225)	1.8	未調		
16	2区	SD02	休憩土器	壺	ヨコナガ?	ヨリYR2'2に,5±1,黄橙	ヨリYR2'2に,5±1,黄橙	中・差	中・差	中・差	中・少	(224)	1.8	未調		
17	2区	SD02	休憩土器	壺	ヨコナガ?	7.5YR7'2灰黄	7.5YR7'2灰黄	中・差	中・差	中・差	中・少	(153)	1.8	未調		
20	3区	SD03	休憩土器	壺	ナガ?	7.5YR5'4に,5±1,黄	7.5YR5'4に,5±1,黄	相・多	相・多	相・多	相・少	(68)	1.8	未調		
21	3区	SD03	休憩土器	壺	ナガ?	7.5YR7'4に,5±1,黄橙	7.5YR7'4に,5±1,黄橙	中・差	中・差	中・差	中・少	(148)	1.8	未調		
22	1区	SB01	須磨器	杵	ヨリホナガ?	Ns.灰	Ns.灰	中・少	中・少	中・少	中・少	(134)	1.8	未調		
23	1区	SB01	須磨器	杵	ヨリホナガ?	ヨリホナガ?	ヨリホナガ?	中・少	中・少	中・少	中・少	(148)	1.8	未調		
24	1区	SB01	須磨器	杵	ヨリホナガ?	ヨリホナガ?	ヨリホナガ?	中・少	中・少	中・少	中・少	(118)	1.8	未調		
25	1区	SB01	須磨器	杵	ヨリホナガ?	ヨリホナガ?	ヨリホナガ?	中・少	中・少	中・少	中・少	(122)	1.8	未調		
26	1区	SB01	須磨器	杵	ヨリホナガ?	ヨリホナガ?	ヨリホナガ?	中・少	中・少	中・少	中・少	(176)	1.8	未調		
27	1区	SB01	須磨器	杵	ヨリホナガ?	ヨリホナガ?	ヨリホナガ?	中・少	中・少	中・少	中・少	(486)	1.8	未調		
28	1区	SB01	須磨器	杵	ヨリホナガ?	ヨリホナガ?	ヨリホナガ?	中・少	中・少	中・少	中・少	(140)	1.8	未調		
29	1区	SB01	須磨器	杵	ヨリホナガ?	ヨリホナガ?	ヨリホナガ?	中・少	中・少	中・少	中・少	(149)	1.8	未調		
30	1区	SB01	須磨器	杵	ヨリホナガ?	ヨリホナガ?	ヨリホナガ?	中・少	中・少	中・少	中・少	(189)	1.8	未調		
31	1区	SB01	須磨器	杵	ヨリホナガ?	ヨリホナガ?	ヨリホナガ?	中・少	中・少	中・少	中・少	(149)	1.8	未調		
32	1区	SB01	須磨器	杵	ヨリホナガ?	ヨリホナガ?	ヨリホナガ?	中・少	中・少	中・少	中・少	(189)	1.8	未調		

第4表 土器調査表

王舌體聚義表之五

番号	調査区名	地盤名	種類	透視	調整(外)	調整(内)	色調(外) 柄	色調(内) 柄	石英 長石	赤色粒 黄白色	鈍母 角閃石	砂粒	口径 mm	豊高 mm	底径 mm	その他の 現象	保存 状態	備考
67	1区 SB01	供生土器 便	不規(ハクタタ)	ヨコナデ	10YR6/6 明黄褐	10YR6/6 明黄褐	中・多・少	中・少	(12.5)	1.8	未調	未調	2.8	1.8	未調	未調	未調	
68	1区 SB01	供生土器 便	ヨコナデ	ヨコナデ	52Y5/4 14.5-15.5 小塊	10YR6/3 にぶい 黄褐	相・並	相・並	(15.5)	1.8	未調	未調	2.8	1.8	未調	未調	未調	
69	1区 SB01	供生土器 便	ヨコナデ	ヨコナデ	52Y5/4 14.5-15.5 小塊	10YR6/3 にぶい 黄褐	相・並	相・並	(10.2)	2.8	未調	未調	2.8	1.8	未調	未調	未調	
70	1区 SB01	供生土器 便	ハケ後ヨコナデ	ヨコナデ	52Y5/4 14.5-15.5 小塊	10YR6/2 灰黄褐	中・差	中・差	中・差	中・少	中・少	中・少	中・少	1.8	1.8	未調	未調	
71	1区 SB01	供生土器 便	ハケ	ハケ	25Y8/1 灰白	25Y8/1 灰白	相・多	相・多	相・多	相・並	相・並	相・並	相・並	1.8	1.8	未調	未調	未調
72	1区 SB01	供生土器 便	ハケ	ハケ	52Y5/2 灰白	25Y5/1 黑灰	中・差	中・差	中・差	中・少	中・少	中・少	中・少	1.8	1.8	未調	未調	未調
73	1区 SB01	供生土器 便	ハケ	ハケ	52Y5/1 黑灰	25Y5/1 黑灰	中・差・中・並	中・差・中・並	中・差・中・並	中・多・細	中・多・細	中・多・細	中・多・細	1.8	1.8	未調	未調	未調
74	1区 SB01	供生土器 便	ハケ後ヨコナデ	ヨコナデ	25Y6/2 灰白	25Y8/2 灰白	相・多	相・多	相・多	相・少	相・少	相・少	相・少	1.8	1.8	未調	未調	未調
75	1区 SB01	供生土器 便	ヨコナデ	ヨコナデ	25Y6/6 明赤褐	25Y6/6 明赤褐	中・多	中・多	中・多	中・少	中・少	中・少	中・少	1.8	1.8	未調	未調	未調
76	1区 SB01	供生土器 便	ハケ後ヨコナデ	ヨコナデ	10YR7/3 にぶい 黄褐	52Y5/2 にぶい 黄褐	中・多	中・多	中・多	中・少	中・少	中・少	中・少	1.8	1.8	未調	未調	未調
77	1区 SB01	供生土器 便	ハケ後ヨコナデ	ヨコナデ	25Y7R4/4 14.5-15.5 黑	25Y7/2 灰白	相・多	相・多	相・多	相・少	相・少	相・少	相・少	1.8	1.8	未調	未調	未調
78	1区 SB01	供生土器 便	ヨコナデ	ヨコナデ	25Y8/2 灰白	25Y8/2 灰白	相・並	相・並	相・並	相・多	相・多	相・多	相・多	1.8	1.8	未調	未調	未調
79	1区 SB01	供生土器 便	ヨコナデ	ヨコナデ	52Y5/4 14.5-15.5 小塊	52Y5/4 14.5-15.5 小塊	中・差	中・差	中・差	中・少	中・少	中・少	中・少	1.8	1.8	未調	未調	未調
80	1区 SB01	供生土器 便	ヨコナデ	ヨコナデ	25Y8/2 にぶい 黄褐	25Y8/2 にぶい 黄褐	相・多	相・多	相・多	相・少	相・少	相・少	相・少	1.8	1.8	未調	未調	未調
81	1区 SB01	供生土器 便	ハケ後ヨコナデ	ヨコナデ	52Y7/4 14.5-15.5	52Y7/4 14.5-15.5	中・差	中・差	中・差	中・少	中・少	中・少	中・少	1.8	1.8	未調	未調	未調
82	1区 SB01	供生土器 便	ヨコナデ	ヨコナデ	25Y3/4 4.5-5 黑	25Y3/4 4.5-5 黑	相・多	相・多	相・多	相・少	相・少	相・少	相・少	1.8	1.8	未調	未調	未調
83	1区 SB01	供生土器 便	ハケミガキ?	ヨコナデ	25Y5/6 6 級	10YR6/2 灰黄褐	相・多	相・多	相・多	相・少	相・少	相・少	相・少	2.8	2.8	未調	未調	未調
84	1区 SB01	供生土器 便	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR7/2 にぶい 黄褐	25Y/R7/4 にぶい 黄褐	中・差	中・差	中・差	中・少	中・少	中・少	中・少	1.8	1.8	未調	未調	未調
85	1区 SB01	供生土器 便	ハケ後ヨコナデ	ヨコナデ	52Y7/2 にぶい 黄褐	52Y7/2 にぶい 黄褐	中・差	中・差	中・差	中・少	中・少	中・少	中・少	1.8	1.8	未調	未調	未調
86	1区 SB01	供生土器 便	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR7/3 にぶい 黄褐	10YR7/3 にぶい 黄褐	中・差	中・差	中・差	中・少	中・少	中・少	中・少	1.8	1.8	未調	未調	未調
87	1区 SB01	供生土器 便	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR7/4 にぶい 黄褐	10YR7/4 にぶい 黄褐	中・差	中・差	中・差	中・少	中・少	中・少	中・少	1.8	1.8	未調	未調	未調
88	1区 SB01	供生土器 便	ハケ後ヨコナデ	ヨコナデ	52Y6/4 14.5-15.5	25Y7/3 灰黃	中・差	中・差	中・差	中・少	中・少	中・少	中・少	1.8	1.8	未調	未調	未調
89	1区 SB01	供生土器 便	ヨコナデ	ヨコナデ	25Y7/2 灰黃	25Y7/2 灰黃	相・多	相・多	相・多	相・少	相・少	相・少	相・少	2.8	2.8	未調	未調	未調
90	1区 SB01	供生土器 便	ヨコナデ	ヨコナデ	25Y/R4/3 級	25Y/R4/3 級	相・多	相・多	相・多	相・少	相・少	相・少	相・少	1.8	1.8	未調	未調	未調
91	1区 SB01	供生土器 便	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR5/6 級	10YR5/6 級	相・多	相・多	相・多	相・少	相・少	相・少	相・少	1.8	1.8	未調	未調	未調
92	1区 SB01	供生土器 便	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR7/3 にぶい 黄褐	25Y/R4 にぶい 黄褐	中・差	中・差	中・差	中・少	中・少	中・少	中・少	1.8	1.8	未調	未調	未調
93	1区 SB01	供生土器 便	ヨコナデ	ヨコナデ	25Y6/2 灰白	25Y6/2 灰白	相・多	相・多	相・多	相・少	相・少	相・少	相・少	1.8	1.8	未調	未調	未調
94	1区 SB01	供生土器 便	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5YR6/6 級	10YR7/4 にぶい 黄褐	中・多・細	中・多・細	中・多・細	中・少	中・少	中・少	中・少	2.8	2.8	未調	未調	未調
95	1区 SB01	供生土器 便	ハケ	ヨコナデ	25Y8/2 灰白	25Y8/2 灰白	中・差	中・差	中・差	中・少	中・少	中・少	中・少	1.8	1.8	未調	未調	未調
96	1区 SB01	供生土器 便	ヨコナデ	ヨコナデ	25Y8/2 灰白	25Y7/2 灰白	中・多・細	中・多・細	中・多・細	中・少	中・少	中・少	中・少	1.8	1.8	未調	未調	未調
97	1区 SB01	供生土器 便	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR6/2 灰黃	10YR6/2 灰黃	中・差	中・差	中・差	中・少	中・少	中・少	中・少	1.8	1.8	未調	未調	未調

第6表 土器調索表 3

第7表 土器觀察表 4

番号	調査地名	地物名	種類	調査(外)	調整(内)	色調(外)・輪	色調(内)・輪	石英 長石	赤色粒 黄白色	鈍母 角閃石	砂粒	口径 mm	盤高 mm	底径 mm	その他の 現象	現存 高さ cm	備考
130 1.K SR01	土製品	管状・圓柱	油サエ・ナヂ	ヨコナデ?	ヨコナデ?	10YR2.3に5.5の黄橙	SYR6.6 輪	中・基盤・並	中・基盤・少	細・少	4.8	3.5	1.8	丸孔5.5cm 直さ45.5cm	1.8		
255 2.K SR11	供生土器	壺	ハケ後ヨコナデ?	ヨコナデ?	ヨコナデ?	10YR2.4に5.5の黄橙	SYR6.6 輪	中・基盤・並	中・基盤・少	細・少				未調	1.8		
256 2.K SR11	供生土器	壺	ヨコナデ?	ヨコナデ?	ヨコナデ?	10YR2.2に5.5の黄橙	SYR6.6 輪	中・多・細・多	中・多・細・少	粗・少				未調	1.8		
257 2.K SR11	供生土器	壺	ヨコナデ?	ヨコナデ・ハナズ	ヨコナデ・ハナズ	10YR6.3に5.5の黄橙	SYR6.6 輪	中・基盤・少	中・基盤・少	粗・少				未調	1.8		
258 2.K SR11	供生土器	壺	ヨコナデ?	ヨコナデ・ハナズ	ヨコナデ・ハナズ	10YR6.3に5.5の黄橙	SYR4.3に5.5の黄橙	粗・多・細・少	粗・多・細・少	粗・少				未調	1.8		
259 2.K SR11	供生土器	壺	ハケ後ヨコナデ?	ハケ後ヨコナデ?	ハケ後ヨコナデ?	10YR5.4に5.5の黄橙	SYR5.4に5.5の黄橙	中・並	中・並	粗・少				未調	1.8		
260 2.K SR11	供生土器	竹付	ヘタミガキ	ヘタミガキ	ヘタミガキ	7.5YR2.3新輪	25Y3.1 新輪	粗・多・粗・多細・少	粗・多・粗・多細・少	粗・少				未調	1.8		
272 2.K SR12	供生土器	壺	ヨコナデ?	ヨコナデ?	ヨコナデ?	7.5YR7.3に5.5の黄	7.5YR6.6 輪	粗・基・中・多	粗・基・中・多	粗・少				未調	1.8		
273 2.K SR12	供生土器	壺	ヨコナデ?	ヨコナデ?	ヨコナデ?	7.5YR7.4に5.5の黄	7.5YR7.4に5.5の黄	中・基	中・基	粗・少				未調	1.8		
274 2.K SR12	供生土器	壺	ヨコナデ?	ヨコナデ?	ヨコナデ?	10YR6.3に5.5の黄橙	10YR6.3に5.5の黄橙	中・基盤・少	中・基盤・少	粗・多・細・少	粗・多・細・少	少		1.1.0	1.1.0		
275 2.K SR12	供生土器	壺	ヨコナデ?	ヨコナデ?	ヨコナデ?	10YR6.2新輪	25Y8.2新輪	粗・多・細・少	粗・多・細・少	粗・少				未調	1.8		
276 2.K SR12	供生土器	壺	ヨコナデ?	ヨコナデ?	ヨコナデ?	10YR6.3に5.5の黄橙	10YR6.3に5.5の黄橙	中・並	中・並	粗・少				未調	1.8		
277 2.K SR12	供生土器	壺	ヨコナデ?	ヨコナデ?	ヨコナデ?	7.5YR6.4に5.5の黄	7.5YR6.4に5.5の黄	中・基盤・少	中・基盤・少	粗・少				未調	1.8		
278 2.K SR12	供生土器	壺	ハナズ	ハナズ	ハナズ	7.5YR6.4に5.5の黄	7.5YR6.4に5.5の黄	粗・基	粗・基	粗・少				未調	1.8		
279 2.K SR12	供生土器	壺	ヨコナデ(マツツ)	ヨコナデ(マツツ)	ヨコナデ(マツツ)	SYR5.8 新輪	SYR6.6 輪	中・多・中・並	中・多・中・並	粗・多				未調	2.8		
280 2.K SR12	供生土器	壺	ヨコナデ?	ヨコナデ?	ヨコナデ?	SYR6.6 輪	SYR6.6 輪	粗・多	粗・多	粗・少				未調	1.8		
281 2.K SR12	供生土器	壺	ハケ後ヨコナデ?	ハケ後ヨコナデ?	ハケ後ヨコナデ?	SYR6.4に5.5の黄	SYR6.4に5.5の黄	粗・多	粗・多	粗・少				未調	1.8		
282 2.K SR12	供生土器	壺	ヨコナデ?	ヨコナデ?	ヨコナデ?	10YR6.4に5.5の黄	7.5YR6.4に5.5の黄	中・基盤・中・並	中・基盤・中・並	粗・少				未調	1.8		
283 2.K SR12	供生土器	壺	ヨコナデ?	ヨコナデ?	ヨコナデ?	7.5YR6.4に5.5の黄	7.5YR6.4に5.5の黄	中・多	中・多	粗・少				未調	1.8		
284 2.K SR12	供生土器	壺	ヨコナデ?	ヨコナデ?	ヨコナデ?	SYR6.6 輪	SYR6.6 輪	中・多・細・並	中・多・細・並	粗・少				未調	1.8		
285 2.K SR12	供生土器	壺	ヨコナデ・ハナズ?	ヨコナデ・ハナズ?	ヨコナデ・ハナズ?	7.5YR6.3に5.5の黄	7.5YR6.4に5.5の黄	粗・多	粗・多	粗・少				未調	1.8		
286 2.K SR12	供生土器	竹付	ヨコナデ・ハナズ?	ヨコナデ・ハナズ?	ヨコナデ・ハナズ?	10YR6.2新輪	25Y7.7 新輪	粗・基・中・並	粗・基・中・並	粗・少				未調	1.8		
287 2.K SR12	供生土器	竹付	ヨコナデ?	ヨコナデ?	ヨコナデ?	10YR6.2新輪	10YR4.1 新輪	中・基盤・少	中・基盤・少	粗・少				未調	1.8		
288 2.K SR12	供生土器	竹付	ヨコナデ?	ヨコナデ?	ヨコナデ?	7.5YR6.4に5.5の黄	25Y7.7 新輪	中・多・細・少	中・多・細・少	粗・少				未調	1.8		
289 2.K SR12	供生土器	竹付	ヨコナデ?	ヨコナデ?	ヨコナデ?	10YR7.3に5.5の黄	25Y7.7 新輪	中・多・中・多	中・多・中・多	粗・多・中・少				未調	1.8		
290 2.K SR12	供生土器	竹付	ヨコナデ?	ヨコナデ?	ヨコナデ?	SYR6.6 輪	SYR6.6 輪	粗・多・中・少	粗・多・中・少	粗・少				未調	1.8		
291 2.K SR12	供生土器	竹付	ナゾ?	ナゾ?	ナゾ?	7.5YR7.4に5.5の黄	10YR6.3に5.5の黄	粗・多	粗・多	粗・少				未調	1.8		
303 1.K SX01	供生土器	壺	ハケ後ヨコナデ?	ハケ後ヨコナデ?	ハケ後ヨコナデ?	10YR6.3新輪	25Y7.3新輪	粗・多・中・並	粗・多・中・並	粗・少				未調	2.8		
304 1.K SX01	供生土器	壺	ヘタミガキ?	ヘタミガキ?	ヘタミガキ?	SYR5.8.2新輪	SYR5.8.2新輪	中・多・中・少	中・多・中・少	粗・少				未調	1.8		
311 3.K SX21	供生土器	竹付	ヨコナデ?	ヨコナデ?	ヨコナデ?	10YR3.1 黒輪	10YR3.1 黑輪	粗・多・中・少	粗・多・中・少	粗・少				未調	1.8		

第8表 土器調査表 5

第9表 土器觀察表 6

第11表 石器觀察表 1

番号	測定名	測量名	器械	調整(凹面)		調整(凸面)		白色形(凸面)		黑色形(凹面)		底存箱(底存箱)		底存箱(底存箱)		参考
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	底 (mm)									
346	4区 通路外	平瓦 マツダ	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凸面)	13.62	1.90	1.20	1.36	1.54	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	14.99
18	2区 S012	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凹面)	1.90	1.20	1.15	0.40	0.40	0.69	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	17.05
19	2区 S012	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凸面)	1.90	1.20	1.15	0.40	0.40	0.69	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	17.05
13	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凹面)	13.45	1.90	1.30	0.95	0.95	1.13	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	24.36
13	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凸面)	13.45	1.90	1.30	0.95	0.95	1.13	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	24.36
12	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凹面)	12.00	1.50	1.10	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	28.67
13	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凸面)	10.10	1.50	1.10	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
133	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凹面)	7.98	1.50	1.10	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
133	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凸面)	7.98	1.50	1.10	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
133.1	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凹面)	5.80	1.50	1.10	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
133.2	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凸面)	5.80	1.50	1.10	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
134	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凹面)	5.20	1.50	1.10	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
135	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凸面)	5.20	1.50	1.10	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
136	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凹面)	4.40	1.00	0.70	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
137	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凸面)	4.40	1.00	0.70	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
138	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凹面)	7.00	1.50	1.20	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
139	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凸面)	5.00	1.50	1.20	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
140	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凹面)	5.80	1.50	1.10	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
141	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凸面)	5.20	1.50	1.10	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
142	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凹面)	6.60	1.40	0.95	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
143	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凸面)	6.10	1.50	1.15	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
144	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凹面)	4.00	1.00	0.75	0.70	0.70	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
145	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凸面)	3.00	1.00	0.75	0.70	0.70	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
146	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凹面)	4.50	1.50	1.20	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
147	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凸面)	6.80	1.50	1.20	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
148	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凹面)	6.55	1.50	1.20	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
149	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凸面)	10.35	1.50	1.20	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
150	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凹面)	8.60	1.45	1.20	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
151	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凸面)	7.00	1.40	1.00	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
152	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凹面)	5.50	1.60	1.40	0.75	0.75	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
153	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凸面)	4.40	1.50	1.20	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
154	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凹面)	7.00	1.50	1.20	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
155	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凸面)	4.80	1.50	1.20	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
156	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凹面)	7.05	1.50	1.20	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
157	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凸面)	6.50	1.40	0.90	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
158	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凹面)	5.50	1.45	1.05	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
159	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凸面)	8.10	5.90	1.20	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
160	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凹面)	11.00	8.05	1.30	0.75	0.75	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
161	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凸面)	7.30	5.30	1.50	0.75	0.75	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
162	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凹面)	4.85	4.30	1.10	0.60	0.60	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
163	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凸面)	6.50	5.95	0.75	0.75	0.75	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
164	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凹面)	6.70	4.70	1.15	0.75	0.75	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
165	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凸面)	8.70	4.40	1.50	0.75	0.75	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
166	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凹面)	7.05	6.90	1.40	0.75	0.75	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87
167	1区 S001	石塊	1/18 5/17864 11:55:18	調整(凸面)	6.40	4.30	0.90	0.75	0.75	1.09	1.18	1.18	1.18	1.18	1.18	31.87

番号	調査区名	地標名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (kg)	石材	標号	調査区名	地標名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (kg)	石材	標号	
204	1 [K]	S801 石塊	3.90	1.60	0.20	0.38	石块		251	1 [K]	S801 石塊	8.70	6.60	1.90	3267	ナガライ	
205	1 [K]	S801 石塊	2.25	1.30	0.35	0.97	石块		252	1 [K]	S801 石塊	7.45	5.60	0.95	3366	結晶片岩	
206	1 [K]	S801 石塊	3.65	1.50	0.40	1.59	石块		254	1 [K]	S801 石塊	6.30	4.10	1.90	83.5	結晶片岩	
207	1 [K]	S801 石塊	3.00	1.50	0.35	2.22	石块		261	2 [K]	S811 石塊	8.40	4.85	1.00	5260	中粒岩	
208	1 [K]	S801 石塊	3.00	2.10	0.50	2.76	石块		262	2 [K]	S811 石塊	4.65	4.20	0.85	1384	ナガライ	
209	1 [K]	S801 石塊	2.90	1.60	0.50	1.60	石块		263	2 [K]	S811 石塊	5.75	4.80	0.65	1173	ナガライ	
210	1 [K]	S801 石塊	1.90	1.55	0.30	0.89	石块		264	2 [K]	S811 石塊	5.20	4.00	0.95	2148	ナガライ	
211	1 [K]	S801 石塊	2.05	1.85	0.35	1.52	石块		265	2 [K]	S811 石塊	7.10	5.30	1.30	56.91	中粒岩	
212	1 [K]	S801 石塊	1.90	1.75	0.35	0.98	石块		266	2 [K]	S811 石塊	4.30	3.10	0.95	43.27	ナガライ	
213	1 [K]	S801 石塊	1.80	1.50	0.45	0.65	石块		267	2 [K]	S811 タレイ	6.75	4.70	0.70	24.43	ナガライ	
214	1 [K]	S801 石塊	2.00	1.90	0.35	0.92	石块		268	2 [K]	S811 タレイ	11.80	3.80	1.30	7374	ナガライ	
215	1 [K]	S801 石塊	2.60	1.15	0.25	1.94	石块		269	2 [K]	S811 打裂石	3.90	1.50	0.98	59.48	ナガライ	
216	1 [K]	S801 石塊	2.50	1.30	0.30	0.83	石块		270	2 [K]	S811 打裂石	3.80	1.60	0.60	2.16	ナガライ	
217	1 [K]	S801 石塊	1.55	1.00	0.30	0.47	石块		271	2 [K]	S811 打裂石	1.26	0.65	1.90	31.71	結晶片岩	
218	1 [K]	S801 石塊	2.05	1.85	0.30	0.79	石块		272	2 [K]	S812 石塊	7.80	4.75	0.90	16.75	ナガライ	
219	1 [K]	S801 石塊	3.05	1.75	0.30	1.70	石块		273	2 [K]	S812 石塊	2.00	1.25	0.85	4.35	ナガライ	
220	1 [K]	S801 石塊	2.70	1.35	0.30	0.68	石块		274	2 [K]	S812 タレイ	7.80	4.75	1.50	48.01	ナガライ	
221	1 [K]	S801 石塊	2.35	1.65	0.25	0.82	石块		275	2 [K]	S812 タレイ	2.00	1.25	0.85	62.06	ナガライ	
222	1 [K]	S801 石塊	2.75	1.65	0.40	1.45	石块		276	2 [K]	S812 刷子	8.65	3.20	1.20	36.65	ナガライ	
223	1 [K]	S801 石塊	2.45	1.65	0.30	0.94	石块		277	2 [K]	S812 刷子	4.80	4.30	1.10	26.91	ナガライ	
224	1 [K]	S801 石塊	3.25	1.80	0.45	1.83	石块		278	2 [K]	S812 刷子	5.80	3.10	1.50	29.80	ナガライ	
225	1 [K]	S801 石塊	2.55	1.70	0.30	0.94	石块		279	2 [K]	S812 刷子	2.95	2.10	1.80	31.86	ナガライ	
226	1 [K]	S801 石塊	1.95	1.75	0.30	0.86	石块		280	2 [K]	S812 刷子	7.25	3.70	1.55	1.69	ナガライ	
227	1 [K]	S801 石塊	2.90	1.70	0.50	1.28	石块		281	2 [K]	S812 刷子	2.90	1.50	0.40	1.77	ナガライ	
228	1 [K]	S801 石塊	2.85	2.00	0.70	4.77	石块		282	2 [K]	S812 刷子	7.60	4.90	3.80	28.00	結晶片岩	
229	1 [K]	S801 石塊	3.00	1.85	0.30	1.25	石块		283	1 [K]	S801 石塊	9.00	3.40	0.90	29.98	ナガライ	
230	1 [K]	S801 石塊	3.05	1.85	0.40	1.60	石块		284	2 [K]	S801 石塊	8.70	6.10	1.00	62.80	ナガライ	
231	1 [K]	S801 石塊	4.10	2.30	0.50	5.08	石块		285	1 [K]	S801 石塊	3.10	1.80	0.50	1.50	ナガライ	
232	1 [K]	S801 石塊	2.20	1.80	0.40	0.96	石块		286	1 [K]	S801 石塊	3.07	1.15	0.40	30.61	ナガライ	
233	1 [K]	S801 石塊	1.90	1.45	0.30	0.77	石块		287	1 [K]	S801 石塊	5.20	4.45	0.80	30.14	ナガライ	
234	1 [K]	S801 石塊	2.75	1.50	0.45	1.18	石块		288	1 [K]	S801 石塊	3.20	2.90	0.80	15.62	ナガライ	
235	1 [K]	S801 石塊	4.05	1.90	0.55	1.88	石块		289	1 [K]	S801 石塊	3.10	2.10	0.75	1.52	ナガライ	
236	1 [K]	S801 石塊	3.20	1.80	0.40	1.42	石块		290	1 [K]	S801 石塊	7.90	5.20	1.80	72.37	ナガライ	
237	1 [K]	S801 石塊	5.60	2.10	0.60	5.17	石块		291	1 [K]	S801 石塊	6.05	5.75	1.35	51.38	ナガライ	
238	1 [K]	S801 石塊	2.95	3.30	0.50	3.00	石块		292	1 [K]	S801 石塊	5.00	4.85	0.80	21.21	ナガライ	
239	1 [K]	S801 石塊	2.05	2.05	0.60	1.74	石块		293	1 [K]	S801 石塊	11.15	5.50	1.40	11.46	ナガライ	
240	1 [K]	S801 石塊	1.90	0.70	0.30	0.38	石块		294	1 [K]	S801 石塊	7.60	4.75	1.40	46.14	ナガライ	
241	1 [K]	S801 石塊	1.80	0.85	0.35	0.61	石块		295	1 [K]	S801 石塊	5.55	5.30	1.15	47.32	ナガライ	
242	1 [K]	S801 石塊	2.05	1.65	0.30	1.17	石块		296	1 [K]	S801 石塊	7.80	3.80	1.00	36.67	ナガライ	
243	1 [K]	S801 石塊	10.15	5.65	3.10	1.17	石块		297	1 [K]	S801 石塊	2.90	1.40	0.60	1.99	ナガライ	
244	1 [K]	S801 石塊	8.80	6.10	3.10	5.21	石块		298	1 [K]	S801 石塊	6.05	5.75	1.35	19.65	ナガライ	
245	1 [K]	S801 石塊	6.20	6.15	1.30	6.71	石块		299	3 [K]	S822 石塊	12.73	8.00	1.80	59.92	ナガライ	
246	1 [K]	S801 石塊	12.70	6.15	1.30	7.47	石块		300	3 [K]	S822 石塊	11.36	7.60	3.50	53.06	ナガライ	
247	1 [K]	S801 石塊	6.90	8.10	1.50	7.80	石块		301	1 [K]	S801 石塊	6.49	1.60	0.35	22.22	ナガライ	
248	1 [K]	S801 石塊	9.50	5.00	1.55	5.78	石块		302	1 [K]	S801 石塊	5.19	4.60	1.35	39.73	ナガライ	
249	1 [K]	S801 石塊	10.25	6.65	1.65	8.50	石块		303	1 [K]	S801 石塊	2.15	1.70	0.35	1.33	ナガライ	
250	1 [K]	S801 石塊	10.20	7.20	3.00	26.24	石块		304	1 [K]	S801 石塊	3.45	2.25	0.70	4.57	ナガライ	

第12表 石器觀察表 2

番号	標本名	通称名	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石種	備考
353	1.8	SB01	石鏡	1.90	0.90	0.40	0.60	サスカイ	
354	1.8	SB01	石鏡	1.80	1.20	0.50	0.84	サスカイ	
355	1.8	SB01	石鏡	2.60	1.20	0.50	1.15	サスカイ	
356	1.6	SB01	削片	6.50	4.70	1.00	47.91	結晶片岩	
357	1.6	SB01	石鏡	1.65	1.20	0.30	0.67	サスカイ	
358	1.6	SB01	石鏡?	6.10	1.00	0.90	23.71	サスカイ	未完品
359	1.8	SB01	スカラバード	4.00	2.40	0.45	6.72	サスカイ	
360	1.8	SB01	石鏡	1.40	1.20	0.30	0.36	サスカイ	研磨品
361	1.8	SB01	打製石鏡	5.30	3.10	0.80	16.77	サスカイ	研磨品
362	1.8	SB01	石鏡?	5.30	3.70	1.15	20.49	サスカイ	未完品
363	1.8	SB01	石鏡	6.40	2.40	0.65	10.26	サスカイ	未完品
364	1.8	SB01	石鏡	2.35	1.60	0.35	0.75	サスカイ	研磨品
365	1.8	SB01	石鏡?	7.30	4.60	1.30	39.61	サスカイ	研磨品
366	1.8	SB01	削片	3.05	1.90	0.60	7.27	結晶片岩	
367	1.8	SB01	加工品	2.60	2.70	0.75	28.09	結晶片岩	
368	1.8	SB01	削片	2.20	1.50	0.50	3.84	結晶片岩	
369	1.8	SB01	石鏡	1.95	1.40	0.25	0.57	サスカイ	研磨品
370	1.8	SB01	石鏡	2.40	1.65	0.40	1.18	サスカイ	
371	1.8	SB01	石鏡	1.80	1.15	0.35	0.65	サスカイ	
372	1.8	SB01	石鏡	2.00	1.25	0.40	0.80	サスカイ	
373	1.8	SB01	石鏡	2.40	1.25	0.30	1.05	サスカイ	
374	1.8	SB01	石鏡?	4.80	4.50	1.30	34.21	サスカイ	未完品
375	1.8	SB01	石鏡	2.50	1.20	0.30	0.78	サスカイ	研磨品
376	1.8	SB01	石鏡	1.80	1.10	0.30	0.49	サスカイ	研磨品
377	1.8	SB01	石鏡	9.50	4.90	2.00	119.95	サスカイ	
378	1.6	SB01	スカラバード	2.60	1.50	0.80	16.21	サスカイ	
379	1.8	SB01	石鏡?	2.00	1.10	0.30	0.90	サスカイ	未完品
380	1.8	SB01	石鏡	2.20	1.80	0.40	0.72	サスカイ	研磨品
381	1.8	SB01	石鏡	2.90	1.20	0.40	1.34	サスカイ	
382	1.8	SB01	石鏡	2.20	1.20	0.30	0.96	サスカイ	

第13表 石器觀察表3

番号	標本名	通称名	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石種	備考
383	1.8	SB01	石鏡	1.80	0.90	0.40	0.60	サスカイ	
384	1.8	SB02	石鏡	2.05	3.15	0.40	1.50	サスカイ	研磨品
385	1.8	SB04	石鏡	2.05	3.15	0.40	1.60	サスカイ	研磨品
386	1.8	SB04	石鏡	2.05	3.15	0.40	1.60	サスカイ	研磨品
387	1.8	SB05	石鏡	2.05	3.15	0.40	1.60	サスカイ	研磨品
388	1.8	SB05	石鏡	2.05	3.15	0.40	1.60	サスカイ	研磨品
389	1.8	SB05	石鏡	2.05	3.15	0.40	1.60	サスカイ	研磨品
390	1.8	SB05	石鏡	2.05	3.15	0.40	1.60	サスカイ	研磨品
391	1.8	SB11	石鏡	2.05	3.15	0.40	1.60	サスカイ	研磨品
392	1.8	SB11	石鏡	2.05	3.15	0.40	1.60	サスカイ	研磨品
393	1.8	SB11	石鏡	2.05	3.15	0.40	1.60	サスカイ	研磨品
394	2.8	SB12	石鏡	2.05	3.15	0.40	1.60	サスカイ	研磨品
395	2.8	SB12	石鏡	2.05	3.15	0.40	1.60	サスカイ	研磨品
396	2.8	SB12	石鏡	2.05	3.15	0.40	1.60	サスカイ	研磨品
397	2.8	SB12	石鏡	2.05	3.15	0.40	1.60	サスカイ	研磨品
398	2.8	SB12	石鏡	2.05	3.15	0.40	1.60	サスカイ	研磨品
399	2.8	SB12	石鏡	2.05	3.15	0.40	1.60	サスカイ	研磨品
400	1.8	SN01	他用のものある 削片	2.05	3.15	0.40	1.60	サスカイ	
401	1.8	SN01	他用のものある 削片	2.05	3.15	0.40	1.60	サスカイ	
402	1.8	SN01	他用のものある 削片	2.05	3.15	0.40	1.60	サスカイ	
403	1.8	SN01	他用のものある 削片	2.05	3.15	0.40	1.60	サスカイ	
404	1.8	SN01	他用のものある 削片	2.05	3.15	0.40	1.60	サスカイ	
405	4.8	SN01	他用のものある 削片	2.05	3.15	0.40	1.60	サスカイ	
406	4.8	SN01	他用のものある 削片	2.05	3.15	0.40	1.60	サスカイ	

第2部 飯山北土居遺跡

第1章 調査にいたる経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯

国道438号は、坂出市市街地と徳島県徳島市とを結ぶ主要幹線道路である。近年の交通量の増加による慢性的な渋滞の緩和や交通事故の軽減などを目的として、香川県土木部道路建設課(現・道路課)では、同路線の改修工事を計画した。これをうけて香川県教育委員会では、同路線周辺には多くの埋蔵文化財埋蔵地が所在していることから、平成5年度より道路建設課と協議を進め、その適切な保護に努めてきた。

今回発掘調査を行った飯山北土居遺跡は、空中写真に写る異質な地割から中世平地城館の可能性が指摘され、その北辺における町道工事の際に堀跡の可能性のある遺構が一部検出されたことから周知の遺跡として知られている。国道438号の新規路線は飯山北土居遺跡の東南隅をかすめるように南進するが、遺跡の南部を東西に横かる県道普通寺守府中線(県道18号)と交差し、県道の右折路線を新設するために県道北側の一部拡幅が計画されていた。このため香川県教育委員会は、平成19年秋に該当範囲の試掘調査を行い、遺構の存在を確認したことから、協議を進め、発掘調査を行うこととなった。なお、試掘調査の内容については『埋蔵文化財試掘調査報告書XⅠ 香川県内遺跡発掘調査』(香川県教育委員会編 2008)に報告されている。



第50図 遺跡の位置

第2節 調査の経過

発掘調査は、258m²を対象に平成21年12月に実施した。調査は香川県土木部から依頼をうけて、香川県教育委員会が調査主体となり、香川県埋蔵文化財センターが担当した。調査地は、県道北側の幅3~6mと狭く、商業施設の出入り口にあたるところである。試掘調査の結果をうけて、1区(1.6×5.0m), 2区(2.0×12m), 3区(3.9×9.0m), 4区(3.5×5.0m)の4箇所が設定された。

整理作業は平成26年12月に実施した。

発掘調査の体制は以下のとおりである。

平成21年度発掘調査体制一覧表

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課		香川県埋蔵文化財センター	
総括		総括	
課長	泰山 浩康	所長	大山 真充
課長補佐	武井 寿紀	次長	深谷 右
秘書・生涯学習推進グループ 副主幹	香西としみ	副主幹	林 文夫
主任	林 照代	主任	宮田久美子
文化財グループ 主幹(兼)課長補佐	藤野 史郎	調査課 課長	古市 和子
主任文化財専門員	森 格也	文化財専門員	西岡 達哉
文化財専門員	小野 秀幸	文化財専門員 嘱託	森下 友子
		文化財専門員 嘱託	木下 晴一
		嘱託	木全加珠美

整理作業の体制は、以下のとおりである。

平成26年度整理作業体制一覧表

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課		香川県埋蔵文化財センター	
総括		総括	
課長	増田 宏	所長	真鍋 昌宏
課長補佐	川上 泰	次長	前田 和也
秘書・生涯学習推進グループ 副主幹	松下由美子	秘書課 課長(兼務)	前田 和也
主任	和木 麻佳	主任	佐野 美二
文化財グループ 副課長	片桐 孝浩	主任	寺岡 仁美
主任文化財専門員	山下 平重	主任	中川 美江
文化財専門員	松本 和彦	主任	高木 秀哉
		資料書記課 課長	岩崎 昌平
		文化財専門員	森 格也
		嘱託	乗松 真也
		嘱託	大林真沙代
		嘱託	岡本 光代
		嘱託	甲斐美智子
		嘱託	葛西 薫
		嘱託	佐々木博子
		嘱託	西本 智子
		嘱託	森田 愛子

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 飯山北土居遺跡の認識

飯山北土居遺跡は、空中写真に写る異質地割から存在が推定されるようになった。異質地割とは歴史地理学の金田章裕氏などが用いる用語で、「すでに機能を失って廃絶した歴史的な構築物の跡が水田化される場合、その部分の水田化自体が遅れる場合が多く、しかもわずかな土地の高低をも完全に平坦化した単位ごとに、小面積の地筆として畦畔で囲われた結果、一筆耕地の形状と地筆界、つまり地割形態に造構のアウトラインがとどめられる（後略）」ために形成されると説明される（註1）。これは都城のような遺跡をも念頭に置くものであるが、中世平地城館のように周間に堀や土塁を伴うことが多い遺跡にも適用されるものである。

香川県内の平野部の空中写真を観察すると、中世平地城館の跡ではないかと考えられる異質地割を見出すことがある。そのなかで丸亀平野における異質地割について、その内容のほか、地名（通称地名）、石造物、出土遺物等の検討を加え、中世平地城館の可能性を論じたことがある（木下1995）。飯山北土居遺跡もこのときに見出されたものである。

第51図は、国土地理院が1962年に撮影した空中写真の一部である（SI-62-4 C10B-16）。この写真について木下（1995）の記述を引用する。

「（前略）上（北）側に写っているのは飯野山の山裾で、水田地帯には全般的に条里型地割が認められる。写真中央のやや左に条里型地割を乱して北流する明瞭な旧河道がある。これが飯野山にあたって東に向きを変える屈曲部の南東側に、周囲とはやや異質な長方形になる地割の集合が認められる。規模は地図上の計測で長辺約170～175m、短辺約110mを測る。この長方形の地割の北辺と東辺の北部には、細長い形状の水田が周囲の地割とを画すように存在している。また、地割ではないが、長方形の西南部には周囲よりも暗い色調の帯（ソイルマーク）が白く写る道路の南側と東側に認められ、これらは堀の存在を示していると考えられる。北辺は空中写真撮影後の道路造成によって壊されているが、最近行われた水路改修の際に、この部分から溜水によって形成されたと考えられる茶灰色粘質土によって埋積した溝状造構の上面が現れた。水路工事がこの下部には及ばないことから埋蔵文化財調査は行われなかつたが、中世に属すると考えられる土器片が採集されている。このことから細長い地割は堀跡と考えて間違なく、出土土器が年代の一端を示していると考えられる（後略）」

今回の発掘調査は、上記のように認識されていた中世平地城館の可能性が考えられる地割の妥当性を検証するものとなった。

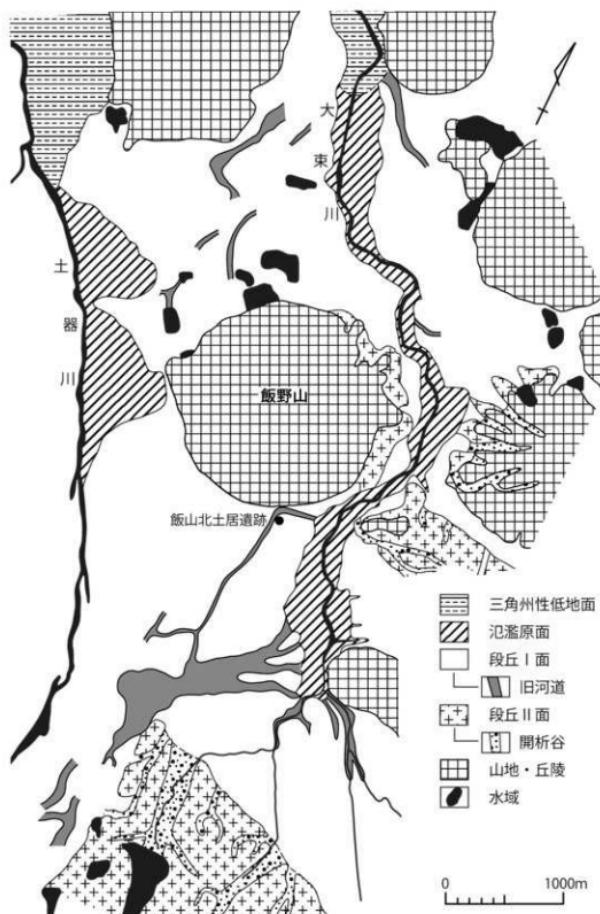
第2節 遺跡周辺の地形

遺跡周辺の地形について、第52図をもとに解説する。

遺跡は、飯野山の南側に拡がる平野中に位置する。この平野は、現在の土器川と大東川の流路に挟ま



第51図 遺跡付近 空中写真（国土地理院昭和37年撮影）及び位置図（丸亀市都市計画図）





第53図 遺跡周辺の条里地割

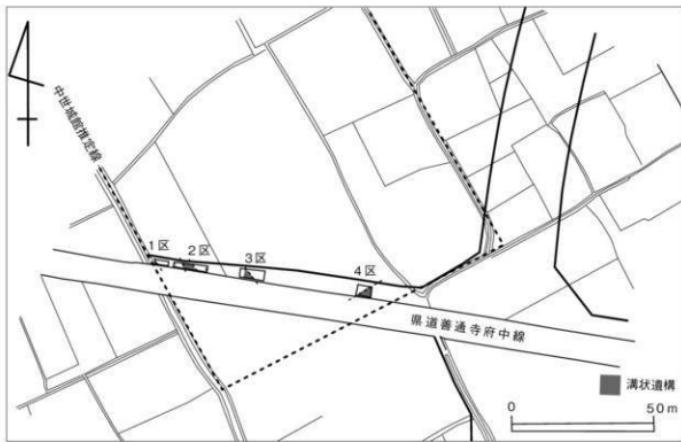
れているが、地表面は土器川から大東川方向へ傾斜している。これは、周辺に掘る条里型地割を乱す旧河道の流路によっても確かめられる。

遺跡の南には土器川から大東川方向へ向かう大規模な旧河道の存在が知られるが、この旧河道を挟んで条里型地割にズレが認められることが、当センターが実施している讃岐国府跡探索事業の一貫であるボランティア調査員の活動によって確かめられた。ボランティア活動は、県内の条里型地割を分析することにより余剰帶を抽出し、古代官道である南海道の経路を探る事業であったが、その活動によって方向の異なる条里地割の接触部分に河川が流れる例が多いこと、同一方向の条里地割の中にもズレがあり河川が関係していると考えられると考えられることが確かめられた。そして、条里地割にズレが生じるのは当時の河道によって分断される平地ごとに地割の造成を行った結果であるという結論に至った(水谷ほか2014)。

以上の観点からすると、遺跡の南側の旧河道は、条里地割造成時の有力な河道ということになる。なお、飯山北土居遺跡周辺には、条里的坪界線が不明瞭となるが、その原因是よくわからない。

大東川沿岸には比高 0.5 ~ 1.5 m ほどの段丘崖が形成されている。これは、下流の坂出市川津町一帯で実施された発掘調査成果から、古代末に形成された完新世段丘崖に認定される(香川県教育委員会編 1995)。完新世段丘崖は丸亀市飯山町下法軍寺鳥田付近まで追跡でき、先述の条里地割造成時の有力な河道には段丘崖は見られない。また、現在の土器川の河道に沿う部分(例えば丸亀市飯野町)にも完新世段丘崖が見られることから、古代末以降の土器川は現在の河道を流れているとみなされる。飯山北土居遺跡は、平野の主要な河川が時代によって変遷した地域に位置する。遺跡の評価や周辺地域の土地開発の問題等を検討するにあたって留意すべき点である。

註
金田 1976 など。



第54図 調査区割図

第3章 発掘調査の成果

調査区は、県道善通寺府中線（香川県道18号線）の北側に接する幅3～6mの範囲であるが、調査着手段階で官民境界の水路およびフェンスが設置されていた関係で、掘削幅は1.6～3.5mである。東西幅は、試掘調査によって遺構の存在が確認された範囲で、西から1区（1.6×5m）、2区（2×12m）、3区（3×9m）、4区（3.5×5m）を設定した。

1区の調査

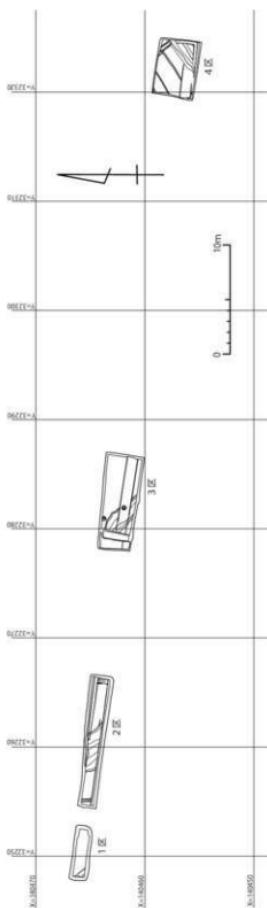
調査対象地の西端に位置する調査区である。造成土の下に水田耕作土層が遺存し、旧耕土と考えられる20cmほど堆積層の下が遺構面となる。遺構面は5層、6層上面であるが、5・6層は明黄褐色粘質シルトの地山上面が土壤化等により変質したものと理解する。

遺構は5層上面から掘り込まれた凹地である。肩は座標北から39度西に振る直線で、検出長12mを測る。掘削範囲の直近西側に電信柱が立つ関係で調査区の拡張が不可能であったので、肩部が直線を呈することから溝と考えたが遺構の性格を特定できていない。なお、座標北から39度西に振る方向は、周辺の条里地割の方向（N-30°-W）とは合致しない。遺物は出土しなかった。なお、1区では上層の包含層から10・11が出土している。10は土師質土器碗の底部片である。形骸化した高台が付されている。11は青磁壺等の高台部の細片である。疊付きも含め全面に施釉している。

2区の調査

1区の東側に現有の排水溝をはさんで接する調査区である。3条の溝状遺構を検出した。

SD02は2区西端で検出した溝状遺構である。溝幅0.2～0.3m、深さ0.25mで、断面形はU字形を呈する。埋土は地山ブロックをわずかに含む褐灰色粘質シルトで、流向はN-3°-Wを測る。遺物は出土しなかった。SD03は溝幅3.2m、深さ1.0mの比較的大規模な溝状遺構である。断面形は上半が緩やかな斜面、下半がU字形を呈する。検出長が短いため正確な流向は不明であるが、周辺に拡がる条里地割の方



第55図 調査区全体図

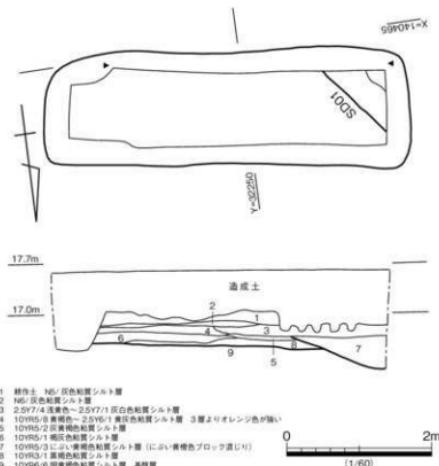
向と合致する可能性が高い。黒褐色系の埋土が堆積しており、最下層の10層は草本質泥炭、9層は地山ブロックを多く含む黒褐色粘質シルト層、8・7層も黒褐色や灰褐色の粘質シルト層である。これらには粗砂より大きい堆積物をほとんど含まず、静穏な環境下で堆積が進行したと考えられる。遺物はほとんど含まれていなかった。SD04は2区東端で検出した溝状遺構である。溝幅0.5m、深さ0.3mで、断面形はU字形を呈する。埋土は褐灰色粘質シルトで、流向はほぼ南北方向に合致する。遺物はサスカイト製の平基無茎鐵が出土している(1)。

3区の調査

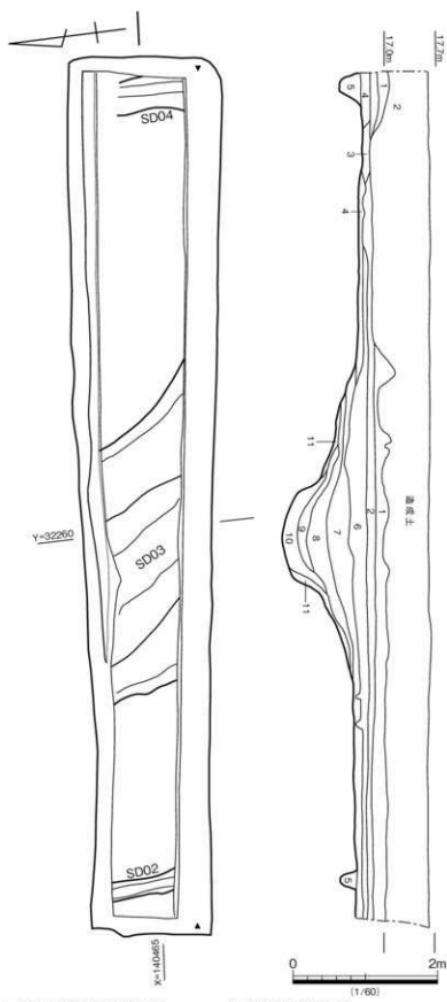
3区では西端で大規模な溝状遺構(SD05)を検出したほか、柱穴2基を検出した。

3区の西端には除去不能のコンクリート製の基礎があり、その東側でSD05を検出した。溝幅2.5m以上、深さ1.2mを測る。東岸を検出したのみであるが、断面形は椀状を呈する。岸のラインが直線でないため、流向については不明確であるが、巨視的には周辺の条里地割の方向に合う可能性が高い。埋土は最下層が褐灰色粘質シルト、淘汰の良い細砂のラミナを挟み、褐灰色粘質シルト層(6層)、灰黄色粘質シルト層(5層)が堆積する。SD05では細砂のラミナが見られるものの、総じて細粒堆積物が堆積している。遺物は採集されなかった。SD05東岸付近で2基の柱穴を検出している。SP01の埋土は灰色粘質土、SP02の埋土は灰色粘質土である。

2・3はSP01から出土した遺物である。2は土師質土器杯(もしくは椀)の口縁部細片である。口縁部内外面に重ね焼きによる変色が認められる。3は柱痕下部に柱の根固めとして転用されていた砂岩製の砥石である。側縁を打ち欠いて整形し、との自然面を砥面としている。4～6はSP02から出土した遺物である。土師質土器杯(もしくは椀)の口縁部細片で、いずれも摩滅している。



第56図 1区 平・断面図



- 1 粘土土 NS/灰色小繩道じり砂質シルト層
- 2 10YR7/2 黄褐色・黄褐色-5Y7/2 灰白色粘質シルト層
- 3 5Y7/2 灰白色粘質シルト・ブロック表記り 2.5Y6/3 C.少い
黄色土
- 4 2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト層
- 5 7.5Y9/4-1 黄褐色粘質シルト層
- 6 2.5Y6/1 黄褐色粘質シルト層

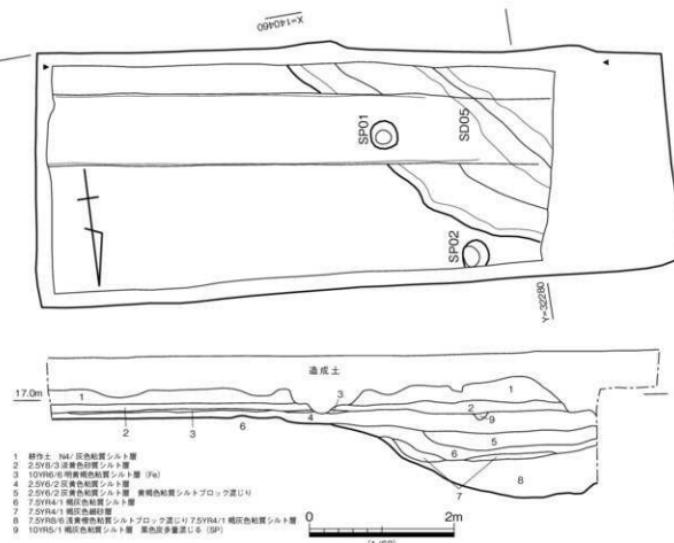
- 7 7.5Y9/4-2 灰褐色粘質シルト層
- 8 7.5Y9/3-2 黄褐色粘質シルト層
- 9 10YR6/3 黄褐色粘質シルト・ブロック表記り (多量)
- 10 10YR3-1 黄褐色粘質シルト層
- 11 10YR3-1 黄褐色粘質シルト層
- 12 10YR4-2 灰褐色粘質シルト層

第57図 2区 平・断面図

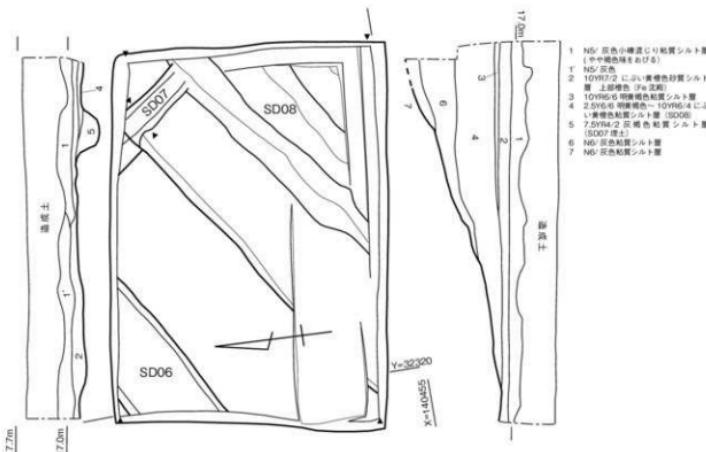
4区の調査

4区では3条の溝状遺構を検出した。

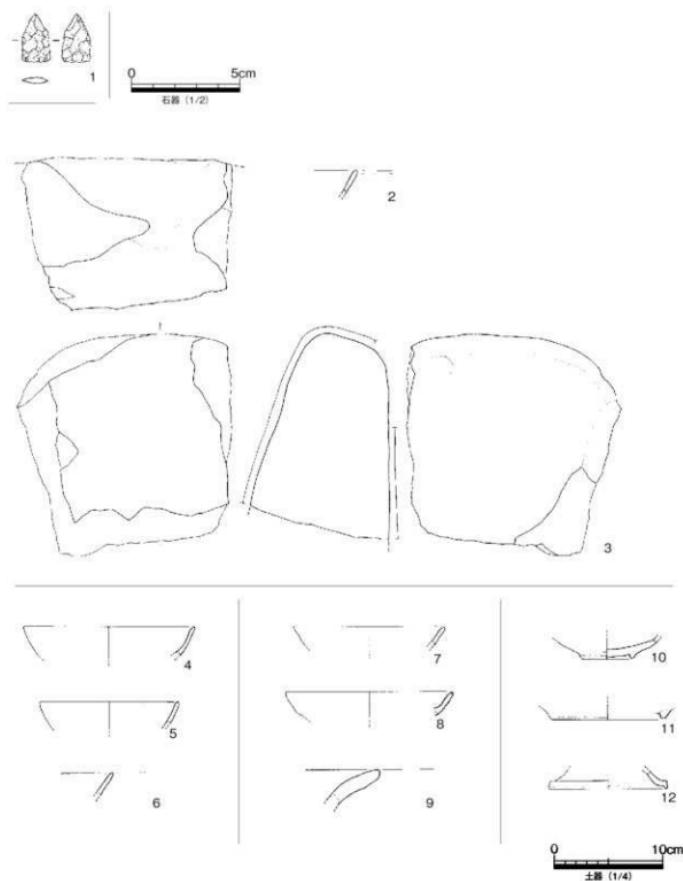
SD08は調査区の東北隅と西南隅を結ぶ対角線の南側で、対角線の方向に流れる溝状遺構である。北岸付近を検出し、溝底および南岸は調査区外になる。溝幅2.0m以上、深さ1.4m以上を測る。断面形は45度近い角度の斜面をなす。灰白色の粘質土で埋積され、粗粒堆積物を含まない。若干量の遺物細片が出土している。7は土師質土器楕の口縁部、8は青磁皿の口縁部、9は土師質土器土鍋の口縁部で、いずれも細片である。8の青磁皿は龍泉窯系のもので見込み部に窪みをもたないものである。SD07はSD08に直交する方向で、SD08と交差する溝状遺構である。SD08の埋土上層に切られている。幅0.5、深さ0.2mほどの規模で、断面形はU字形を呈する。遺物は出土しなかった。SD06はSD08に平行する位置にある浅い溝状遺構である。幅1.1、深さ0.1mほどの規模で、浅い皿状の断面形である。SD08とは1.5m離れて平行している。SD06とSD08との間には土堤のような構造物があった可能性が考えられるが詳細はわからない。遺物は出土しなかった。このほかに包含層から古代の須恵器高杯片12が出土している。



第58図 3区 平・断面図



第59図 4区 平・断面図



第60図 出土遺物

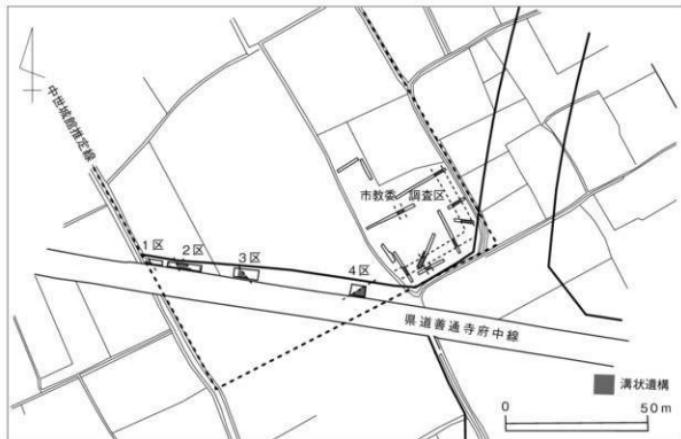
第4章 総括

飯山北土居遺跡の性格を考えるにあたり注目される遺構は、4区のSD08である。SD08は、異質地割の南縁に沿う位置にあり、異質地割を中世平地城館と考えた場合の外縁部に位置する。

SD08は、4区の東側に接する地筆においても延長部分が検出されている。これは、店舗建設に先立つて丸亀市教育委員会が行った調査で検出されたもので、第61図に示すとおり、SD08の東側延長が検出され、異質地割の東縁に沿って直角に屈曲していることが確認されている（近藤2013・2014）。土層断面図と写真での比較の結果、市教委検出の溝とSD08の埋土の様相は酷似しており、同一のものと判断される。この結果、SD08では不明であったが、この溝の規模は幅32、深さ1.2mほどの規模で、断面形はV字形で、途中に犬走り状の平坦部を設けた2段掘りのものであったことがわかる。市教委の調査でも、ほとんど遺物が出土せず、軸が剥落した磁器椀の底部等数片が見られるにすぎない。（註1）

磁器椀の底部は、高台の外面を直に、内面を斜めに削り出したもので、見込み部に段がないものである。森田勉氏による白磁椀のII-1類に該当する可能性が高いと考えられる（森田1995）。第60図8の青磁皿と合わせるとSD08は12世紀中ごろの年代観が得られる。しかし、遺構の年代を示すような出土状況ではないため、今後の調査に待つところが大きい。

以上のことから、SD08は中世平地城館の外縁部に位置する堀と判断できる。一方、西縁部ではSD01が検出されているものの、堀かどうかの判断をするだけのデータに恵まれない。このほか、SD03やSD05など大規模な溝状遺構を検出しているが、これらの遺構の性格は不明であり、今後の発掘調査の進展をまたなければならない。



第61図 丸亀市教育委員会による調査成果

註

1 丸亀市教育委員会近藤武司氏のご好意により、遺物を実見した。

引用・参考文献

- 香川県教育委員会編 1995 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第16冊 川津二代取道跡」
 香川県教育委員会編 2006 「埋蔵文化財試掘調査報告 XX-1 香川県内道路発掘調査」
 木下晴一 1995 「空中写真調査を中心とする中世平地城館址の分布調査—香川県丸亀平野の事例(第一報)」—『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』Ⅲ
 金田章裕 1976 「地割と微地形」『岩波講座日本歴史 第4巻』付録月報
 近藤武司 2013 「飯山北土居遺跡」香川県教育委員会編『香川県文化財年報 平成23年度』
 近藤武司 2014 「飯山北土居遺跡」丸亀市教育委員会編『丸亀市埋蔵文化財発掘調査報告第14冊 平成23年度国庫補助事業報告書 丸亀市内道路発掘調査報告第9集』
 水谷耕造・和田昭・木下晴一 2014 「国府の時代の大開発—条里と南海道—」香川県埋蔵文化財センター編『平成25年度讃岐国府跡探索事業成果報告会 譲岐国府を語る』

番号	遺構名	種類	器種	調整(外)	調整(内)	色調(外)・釉	色調(内)・胎土	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率
2	SP01	土師質土器	杯	マメツ	マメツ	25Y7/2 灰黄	25Y7/2 灰黄	細・多	-	-	-	1/8 未満
4	SP02	土師質土器	杯	マメツ	10YR8/3 浅黄橙	7.5YR7/4 にぶい黄	細・少	(15.9)	-	-	1/8 未満	
5	SP02	土師質土器	杯	マメツ	マメツ	25Y8/2 白	25Y8/2 白	細・少	(12.9)	-	-	1/8 未満
6	SP02	土師質土器	杯	マメツ	マメツ	25Y8/2 灰白	25Y8/2 灰白	細・少	-	-	-	1/8 未満
7	SD08	土師質土器	杯	マメツ	マメツ	25Y8/6 黄	25Y8/6 黄	細・少	(13.9)	-	-	1/8
8	SD08	青磁	皿	回転ナダ	回転ナダ	7.5Y6/2 灰オリーブ	5Y8/1 灰白	細・無	(15.1)	-	-	1/8 未満
9	SD08	土師質土器	土鍋	マメツ	マメツ	25Y6.4 にぶい黄	25Y6.4 にぶい黄	粗・多	-	-	-	1/8 未満
10	混合層	土師質土器	碗	マメツ	マメツ	10YR5/3 にぶい黄橙	10YR4/1 橙灰	細・多	-	-	-	2/8
11	混合層	青磁	不明	回転ナダ	回転ナダ	10Y6/2 灰オリーブ	5Y8/1 灰白	細・無	-	-	(11.0)	1/8 未満
12	混合層	頭更器	高杯	回転ナダ	回転ナダ	N6 灰	N6 灰	粗・多	-	-	(11.0)	1/8

第14表 土器観察表

編文番号	遺構名	器種	現存長(cm)	現存幅(cm)	最大厚(cm)	石材	重量(g)
1	SD03	石瓶	22	13	0.3	サヌカイト	0.89
3	SP01	砥石	10.2	9.9	6.5	砂岩	9529

第15表 石器観察表

写真 1
東坂元北岡遺跡
調査前風景
北から



写真 2
東坂元北岡遺跡
1区 SR01 断面
東から



写真 3
東坂元北岡遺跡
1区 SD02 断面
北から



写真 4
東坂元北岡遺跡
1区 SR01 石庖丁出土状況



写真 5
東坂元北岡遺跡
1区 SX01 遺物出土状況
東から



写真 6
東坂元北岡遺跡
1区 南端部
南から



写真 7
東坂元北岡遺跡
1区 SR01 石庖丁出土状況



写真 8
東坂元北岡遺跡
2区 SD11 断面
南から



写真 9
東坂元北岡遺跡
2区 SK12 断面
北西から



写真 10
東坂元北岡遺跡
2区 SK11 断面
北西から



写真 11
東坂元北岡遺跡
2区 SK15 断面
西から



写真 12
東坂元北岡遺跡
2区 全景
北から



写真 13
東坂元北岡遺跡
2区 西壁断面
東から



写真 14
東坂元北岡遺跡
2区 西壁南端断面
東から



写真 15
東坂元北岡遺跡
2区 SP110 杯出土状況
南西から

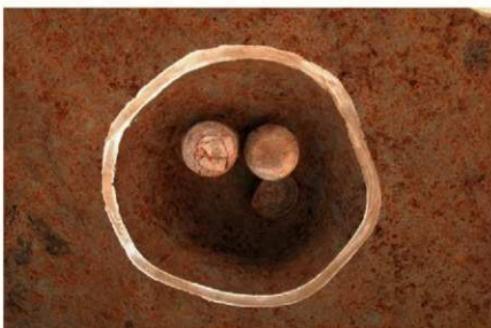


写真 16
東坂元北岡遺跡
3区 SD21断面
南から



写真 17
東坂元北岡遺跡
3区 SD23断面
南から



写真 18
東坂元北岡遺跡
3区 SX21検出状況
東から



写真 19
東坂元北岡遺跡
3区 SX21 断面
北から



写真 20
東坂元北岡遺跡
3区 SD25 断面
東から



写真 21
東坂元北岡遺跡
3区 SD24 断面
北から



写真 22
東坂元北岡遺跡
3区 南半部
北から

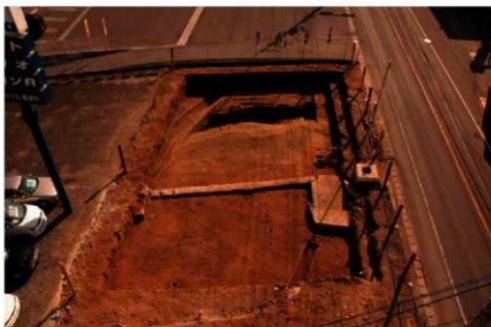


写真 23
東坂元北岡遺跡
3区 SK18 断面
北から



写真 24
東坂元北岡遺跡
現地説明会風景



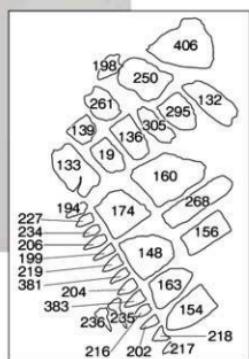


写真 25 東坂元北岡遺跡 出土遺物 1



写真 26 東坂元北岡遺跡 出土遺物 2



163



160



246



156



253



254



174



250

写真 27 東坂元北岡遺跡 出土遺物 3

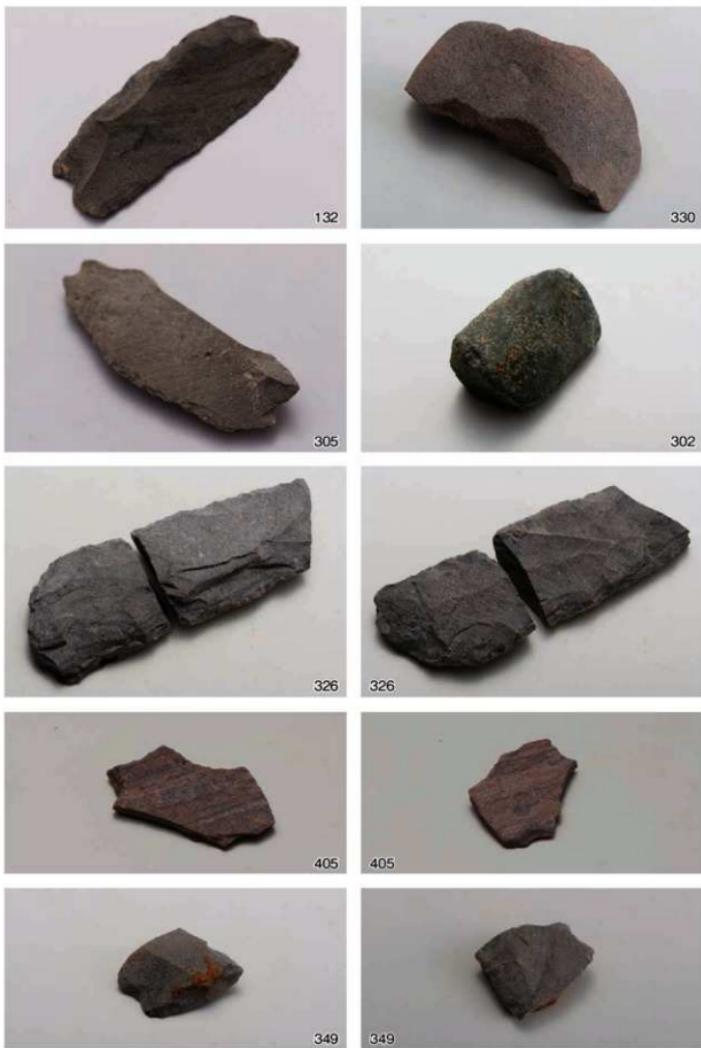


写真 28 東坂元北岡遺跡 出土遺物 4



写真29 東坂元北岡遺跡 出土遺物 5



写真 30 東坂元北岡遺跡 出土遺物 6



366



367



387



388



385



386



400



404



401



402

写真 31 東坂元北岡遺跡 出土遺物 7



写真 32 東坂元北岡遺跡 出土遺物 8



写真33 東坂元北岡遺跡 出土遺物9

写真 34
飯山北土居遺跡
調査地遠景
飯野山から 1994 年撮影



写真 35
飯山北土居遺跡
4 区 調査状況
西から



写真 36
飯山北土居遺跡
1 区 調査状況
東から



写真 37
飯山北土居遺跡
2区 調査状況
東から



写真 38
飯山北土居遺跡
2区 SD03 挖削状況
北から



写真 39
飯山北土居遺跡
3区 調査状況
北から



写真 40
飯山北土居遺跡
4 区 SD08 等掘削状況
西南から



写真 41
飯山北土居遺跡
4 区 SD08 断面
西南から



写真 42
飯山北土居遺跡
4 区 SP01 断面



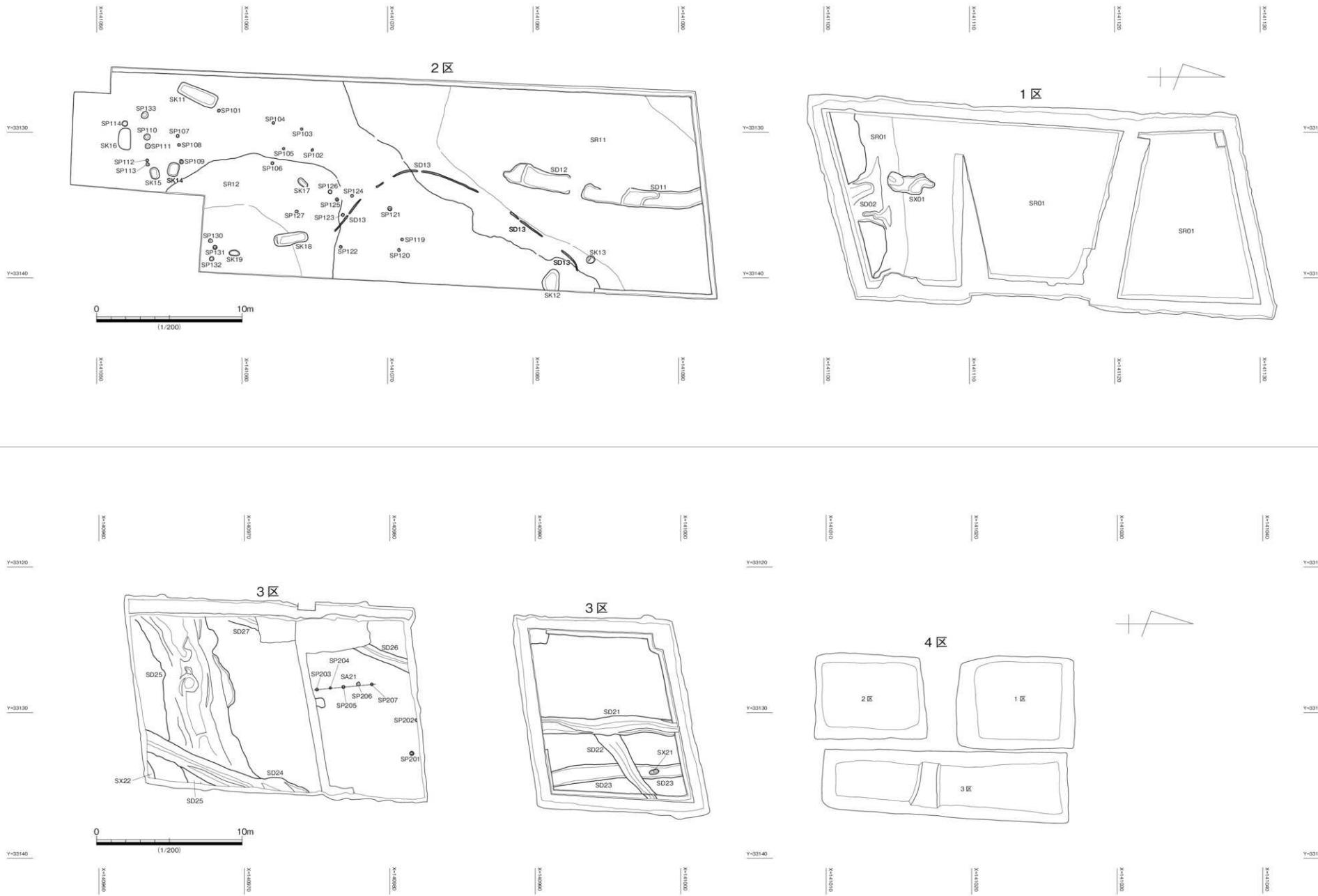
報告書抄録

国道438号道路改築事業(飯山工区)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊

東坂元北岡遺跡
飯山北土居遺跡

2016年2月19日

編集 香川県埋蔵文化財センター
〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷5001-4
Tel 0877-48-2191
E-Mail maibun@pref.kagawa.lg.jp
発行 香川県教育委員会
印刷 株式会社 美巧社



東坂元北岡遺跡遺構配置図『東坂元北岡遺跡 飯山北土居遺跡』
(香川県埋蔵文化財センター編 2016年)付図